目次

コンファレンスプログラム	2
発表演題及び講演時間	3
特別講演要旨	14
シンポジウム講演要旨	15
一般講演要旨	25
ポスター発表講演要旨	35
代表発表者索引	79
糸状菌分子生物学研究会会則	82
糸状菌分子生物学研究会運営委員名簿	83
糸状菌遺伝子研究会賛助会員	84

第12回糸状菌分子生物学コンファレンス

日時: 2012年11月12日(月)-13日(火) 会場: ウインクあいち(名古屋市中村区名駅 4-4-38) 主催:糸状菌分子生物学研究会 後援:糸状菌遺伝子研究会

11月12日(月)

11:00 -	受付開始
12:30 - 12:40	開会の辞
12:40 - 14:40	口頭発表(O-1~10)
14:40 - 15:00	休憩
15:00 - 16:00	特別講演
16:00 - 17:30	ポスター発表(奇数番号)
18:00 -	懇親会

11月13日(火)

- 9:30 12:30 シンポジウム
- 12:30 13:30 昼休み
- ポスター発表(偶数番号) 13:30 - 15:00
- 15:00 15:10 休憩
- 口頭発表(O-11~20) 15:10 - 17:10
- 17:10 17:25 休憩
- 17:25 18:00 総会、表彰式、閉会の辞

発表演題および講演時間

特別講演 11月12日(月)15:00-16:00

Diversity and evolution of wood decay systems in saprotrophic and mycorrhizal Agaricomycetes (mushroom-forming fungi)

Professor David Hibbett (Clark University)

シンポジウム 11月13日(火) 9:30 - 12:30

「植物と菌類の相互作用」

9:30-10:15

- S-1 「α-1,3-グルカンを利用した植物病原性糸状菌の自然免疫回避機構」
 (独)農業生物資源研究所 植物・微生物間相互作用研究ユニット
 西村 麻里江
- 10:15-11:00
 - S-2 「植物病原糸状菌の集団適応戦略-イネいもち病菌を例として」 神戸大学大学院 農学研究科 土佐 幸雄
- 11:00-11:45
 - S-3 「ストリゴラクトン:植物における共生と寄生そして形態形成を司る テルペノイド」

大阪府立大学大学院生命環境科学研究科 秋山 康紀

11:45-12:30

S-4 「牧草共生糸状菌 epichloae エンドファイトの共生に関わる遺伝子群の機能解析」

名古屋大学大学院 生命農学研究科 竹本 大吾

一般講演(O-1~O-10) 11 月 12 日(月) 12:40 - 14:40

- 12:40 O-1 麹菌を用いた脂肪酸等の炭化水素系化合物の生産性向上の研究
 <u>玉野孝一¹</u>, Kenneth Bruno², Sue Karagiosis², David Culley², Shuang Deng², James Collet², 石 井智子¹, 梅村舞子¹, 小池英明¹, Scott Baker², 町田雅之¹ (1 産総研・生物プロセス、2 米 国パシフィックノースウエスト国立研究所)
- **12:52 O-2 麴菌必須遺伝子の解析のためのプロモーターシャットオフシステムの開発** <u>寺戸志保</u>^{1,2},島原明子¹,豊浦 利枝子²,岩下 和裕^{1,2} (¹広島大院・先端研,²酒総研)
- 13:04 O-3 Aspergillus nidulans のガラクトフラナン生合成に関与する遺伝子の機能解析
 <u>元松遥¹</u>, 畠山信太郎¹, 浴野圭輔¹, 二神泰基², 竹川薫², 後藤正利², 野村善幸¹, 岡拓二¹ (¹崇城大学・生物生命・応微工、²九大・院・農)
- 13:16 O-4 Aspergillus nidulans septin interactions and post-translational modifications.
 <u>Shunsuke Masuo</u>, Yainitza Hernández-Rodríguez and Michelle Momany (Dept. of Plant Biology, Univ. of Georgia)
- 13:28 O-5 Characterization of Stress Granules in Aspergillus oryzae
 <u>Hsiang-Ting HUANG</u>, Jun-ichi MARUYAMA, Katsuhiko KITAMOTO (Dept. of Biotechnol., The Univ. of Tokyo)
- 13:40 O-6 ウシグソヒトヨタケの傘成長に必要な cag1 遺伝子は、Tup1 相同タンパク質をコードしている。
 村口 元,名越貴浩、煙山和樹 (秋田県立大・生物資源)
- 13:52 O-7 麹菌が産生する hydrophobin RolA と固体表面間の相互作用機構解析
 田邊弘毅¹, 田中拓未¹, 大類景子¹, 上原健二¹, 高橋徹^{2,3}, 冨樫貴成⁴, 有田稔彦⁴, 阿部敬 ^(1,3) (¹東北大院・生物産業創成, ²酒総研・基盤, ³東北大・未来研, ⁴東北大・多元研)
- 14:04 O-8 Trichoderma reesei セルラーゼ高生産変異株における bgl2 変異の影響 <u>志田洋介¹</u>,山口香織¹、新田美貴子²、森一樹³、平川英樹⁴、久原哲³、小笠原渉¹(¹長岡 技科大・生物、²JST、³九大・生資源、⁴かずさ DNA 研究所)
- **14:16 O-9 シイタケより精製された新規 GH ファミリーに属する endo-**β-1,3-グルカナーゼ <u>坂本裕一</u>,金野尚武 (岩手生工研)
- 14:28 O-10 セルラーゼ遺伝子発現制御因子 ClbR と相互作用する因子の探索

 <u>國武絵美</u>^{1,2}, 谷修治¹, 炭谷順一¹, 川口剛司¹ (¹阪府大院・生環科, ²日本学術振興会特別研究員 PD)

一般講演(O-11~O-20) 11月13日(火) 15:10-17:10

- 15:10 O-11 Co-regulation of A. nidulans cellulase genes by transcription factors McmA and ManR Nuo Li, Miki Aoyama, Kyoko Kanamaru, Makoto Kimura, Tetsuo Kobayashi (Graduate Sch. of Bioagric. Sci., Nagoya Univ.)
- 15:22 O-12 AtrR は Aspergillus fumigatus においてエルゴステロール合成系遺伝子発現を制御する
 <u>大場歩¹</u>,清水公徳²,萩原大祐²,新谷尚弘¹,川本進²,五味勝也¹
 (¹東北大院農・生物産業創成,²千葉大・真菌センター)
- 15:34 O-13 Neurospora crassa のエルゴステロール生合成阻害剤による erg 遺伝子の誘導とその制御 <u>宮下基</u>, 亀井誠之, 高橋正和, 一石昭彦, 藤村真(東洋大院・生命)
- 15:46 O-14 Chaetomium globosum における天然物生合成遺伝子研究からみえてきた特定二次代 謝産物による遺伝子発現制御および有性生殖への関与
 中沢威人,石内勘一郎,杉本覚,五反田康孝,佐藤道大,野口博司,渡辺賢二(静岡県大・ 薬)
- 15:58 O-15 イネいもち病菌の二成分情報伝達系攪乱によるポリケタイド化合物生産誘導 本山高幸,林敏明,廣田洋,長田裕之 (理研基幹研・ケミカルバイオロジー)
- 16:10 O-16 Aspergillus fumigatus における新規病原因子の探索と機能解析 <u>酒井香奈江</u>,大荒田素子,高橋梓,五ノ井透 (千葉大・真菌センター)
- **16:22 O-17 イネいもち病菌における HsbA 様タンパク質 Mohsb1, Mohsb2 は病原性に関与する** <u>坂口歩</u>・西村麻里江 (生物研)
- 16:34 O-18 出芽酵母の Spindle Position Checkpoint (SPOC)構成要素はウリ類炭疽病菌において付着器分化過程における適切な細胞周期の進行に関与する

 <u>深田史美¹</u>,坂口 歩²,久保康之¹(京都府大院・生環¹⁾、生物研²⁾

 16:46 O-19 イチゴ黒斑病菌の 1.0 Mb 染色体にコードされる AF 毒素生合成遺伝子クラスターの 同定
 原歩美¹,近藤日佳理¹,播本佳明¹,間瀬千晶¹,張祐介¹,山本幹博²,秋光和也³,柘植 尚志¹(¹名大院・生命農,²岡山大・農,³香川大・農)

16:58 O-20 第2浸透圧センサー経路はトウモロコシごま葉枯病菌 (Cochliobolus heterostrophus) の感染器官である付着器の形成を制御する <u>泉津弘佑</u>,北出雄生*,住田卓也*,湯谷智*,森田篤*,田中千尋*(滋賀県大・環境科学, *京大院農)

ポスター発表 11 月 12 日(月)16:00 – 17:30(奇数番号) 11 月 13 日(火)13:30 – 15:00(偶数番号)

- P-1 イタコン酸を生産する Aspergillus oryzae の分子育種
 山田智士¹, 倉地裕子², 朴龍洙³, 荒井基夫², 金政真² (¹中部大院・応生, ²中部大・環境生科,
 ³静岡大・創科技院)
- P-2 アミダーゼ高生産麹菌の担体への固定化方法の研究

<u>鈴木晃</u>¹,下家拓馬¹,奥田拓真¹,柳原琢己¹,木村遵¹,佐野元昭¹、尾関健二¹,大箸信一¹,坪 井宏和²,坊垣隆之²,岩井和也³,福永泰司³(¹金沢工大・ゲノム研,²大関・総研,³UCC・R&D センター)

P-3 454 と Illumina の de novo アセンブリーによる糸状菌の新規 cDNA 解析

(ジナリス) 河合文隆、上村泰央、(東大院・農生科) 五十嵐圭日子, 堀 千明, 鮫島正浩,

P-4 バイオマス変換酵素探索ツールとしての糸状菌トランスクリプトーム

(東大院・農生科)<u>五十嵐圭日子</u>,堀千明,石黒真希,鮫島正浩,(ジナリス)上村泰央,竹田 綾(食総研) 金子 哲

- **P-5 麴菌必須遺伝子の解析のためのプロモーターシャットオフシステムの開発** <u>寺戸志保</u>^{1,2},島原明子¹,豊浦 利枝子²,岩下 和裕^{1,2} (¹広島大院・先端研,²酒総研)
- P-6 麹菌における Cre-loxP 選択マーカーリサイクリングシステムの改良

<u>張斯来</u>,江原直樹,水谷治¹⁾,田中瑞己,新谷尚弘,五味勝也(東北大院農,酒総研¹⁾)

- **P-7** 昆虫病原性糸状菌 *Lecanicillium* sp.における自律複製型ベクターを用いた形質転換系の構築 <u>石堂 圭一</u>、木下 浩、井原 史雄¹、仁平 卓也 (阪大生物工学国際交流セ、¹農研機構・果樹研)
- P-8 糸状菌によるフミン酸の分解と還元

<u>中澤奈美</u>,老沼研一,高谷直樹 (筑波大院・生命環境)

- P-9 Aspergillus nidulans のガラクトフラナン生合成に関与する遺伝子の機能解析
 <u>元松遥¹</u>, 畠山信太郎¹, 浴野圭輔¹, 二神泰基², 竹川薫², 後藤正利², 野村善幸¹, 岡拓二¹
 (¹崇城大学・生物生命・応微工、²九大・院・農)
- P-10 Aspergillus nidulans における ugeB 遺伝子の機能解析 <u>田中麻左人¹</u>、浴野圭輔¹、二神泰基²、竹川薫²、後藤正利²、野村善幸¹、岡拓二¹(¹崇城大学・ 生物生命・応微工、²九大・院・農)

— 6 —

- **P-11** Aspergillus fumigatus のガラクトフラノース転移酵素遺伝子の探索 畠山信太郎¹, 浴野圭輔¹, 二神泰基², 竹川薫², 後藤正利², 野村善幸¹, 岡拓二¹(¹崇城大, ²九大)
- **P-12** 糸状菌 Aspergillus nidulans の α -1,3-グルカン合成酵素遺伝子変異株の表現型解析 <u>吉見啓</u>¹, 稲葉梓², 一杉昌玄², 阿部敬悦^{1,2} (¹東北大・未来研, ²東北大院農・生物産業創成)
- P13 糸状菌 Aspergillus nidulans のα-グルカン合成酵素遺伝子破壊株における Congo red 感受性 と菌糸への Congo red 吸着性との関係 <u>稲葉梓¹</u>, 吉見啓², 阿部敬悦^{1,2} (¹東北大院農・生物産業創成,²東北大・未来研)
- P14 Aspergillus nidulans におけるプロテインキナーゼ C による細胞壁合成酵素遺伝子群の転写 制御についての解析 <u>
 片山琢也</u>,太田明徳¹,堀内裕之(東大院・農生科・応生工,¹東農大・バイオ)
- P-15 アカパンカビ OS-2 MAP キナーゼによる細胞壁局在タンパク質の制御 加賀谷奏,山下和宏,高橋正和,亀井誠之,一石昭彦,藤村真 (東洋大院・生命科学)
- **P-16 麹菌における MAP キナーゼ AoFus3 とその相互作用タンパク質の機能解析** <u>矢萩大貴</u>,丸山潤一,Özgür Bayram¹, Oliver Valerius¹, Gerhard H. Braus¹,北本勝ひこ(東大院・農 生科・応生工,¹ゲッティンゲン大学)
- P-17 麹菌 A. oryzae における溶菌に対する細胞修復と再生長の機構の解析 川畑絢平,佐伯圭,丸山潤一,北本勝ひこ(東大院・農生科・応生工)
- P-18 麹菌におけるエンドサイトーシス関連 Aip タンパク質の機能解析 <u>松尾賢人</u>,樋口裕次郎,菊間隆志,有岡 学,北本勝ひこ (東大院・農生科・応生工)
- P-19 麹菌グルコース抑制関連遺伝子 creD の MalP のエンドサイトーシスへの関与 平本 哲也,田中 瑞己,新谷 尚弘,五味 勝也 (東北大院・農・生物産業創成)
- **P-20** Aspergillus nidulans におけるパキシリン様タンパク質 PxlA の機能解析 <u>二神泰基</u>¹, 梶原康博², 高下秀春², 大森俊郎², Michelle Momany³, 後藤正利¹ (¹九大院・農, ²三和酒類, ³ジョージア大)
- P-21 糸状菌 Aspergillus nidulans における出芽酵母 Saccharomyces cerevisiae LAS17 オルソログ AN11104 の機能解析 星浩臣,前田隼見,太田明徳¹,堀内裕之(東大院・農生科・応生工,¹東農大・バイオ)
- P-22 麹菌 A. oryzae における選択的オートファジー関連遺伝子の機能解析 田所隆之, 菊間隆志, 北本勝ひこ (東大院・農生科・応生工)

— 7 —

P-23 Characterization of Stress Granules in Aspergillus oryzae

<u>Hsiang-Ting HUANG</u>, Jun-ichi MARUYAMA, Katsuhiko KITAMOTO (Dept. of Biotechnol., The Univ. of Tokyo)

- **P-24 黄麹菌の分生子特異的遺伝子の機能解析** 辻井雅,森田寛人,前田浩,山形洋平,竹内道雄 (東農工大院・応生化)
- P-25 菌類の adenosine deaminase-related growth factor 類似遺伝子の機能解析 西川良平¹,藤田将幸¹,吉田真澄¹,関屋秀一¹,稲富 聡²,田口悟朗¹,下坂 誠¹ (¹信州大・繊維・応生系,²ホクトきのこ総合研)
- P-26 ウスヒラタケの子実体分化異常に関わる遺伝子の探索 <u>嶋田有宇</u>,伊藤幹成,奥田康仁,松本晃幸 (鳥取大・農)
- P-27 Discovering fundamental mushroom developmental genes. Arend F. van Peer, Yuichi Sakamoto (IBRC)
- P-28 担子菌ウシグソヒトヨタケにおけるセプチンの発現およびインテラクトーム解析 塩谷 達弘,中村 宏江,石井 律好,高橋 直樹,村口 元 (秋田県大院・生物資源)
- **P-29 麹菌が産生する hydrophobin RolA と固体表面間の相互作用機構解析** 田邊弘毅¹,<u>田中拓未¹</u>,大類景子¹,上原健二¹,高橋徹^{2,3},冨樫貴成⁴,有田稔彦⁴,阿部敬悦^{1,3} (¹東北大院・生物産業創成,²酒総研・基盤,³東北大・未来研,⁴東北大・多元研)
- P-30 麹菌 hydrophobin RolA 多重変異体と cutinase CutL1 間の相互作用解析 對馬裕誠,村垣 公英¹,上原 健二¹,高橋 徹^{2,3},山形 洋平^{2,4},阿部 敬悦^{1,2} (¹東北大院農・生物産業創成、²東北大・未来研、³酒類研・基盤、⁴東京農工大院農・応生化)
- P-31 麹菌 Aspergillus oryzae の機能性ペプチド融合ハイドロフォービン (HypA) の生産と吸着 堂前圭佑,加瀬明日香,中島春紫(明治大・農・農化)
- **P-32** Aspergillus oryzae のハイドロフォービン群の機能および局在性の解析 山川結, <u>石田千絵</u>, 早川芙佑華, 水野佑香, 中島春紫 (明治大・農・農化)
- P-33 味噌用麹菌 A. oryzae KBN630 株における酸性ホスファターゼ遺伝子多重破壊株の作出 安田(吉野)庄子,長谷川 摂,小野奈津子,伊賀 佳美¹,白石 洋平¹,和久 豊¹,杉本 達哉², 楠本 憲一³,北本 則行(あいち産科技総セ・食工技セ,¹㈱ビオック,²ナカモ㈱,³食総研)
- **P-34** Aspergillus aculeatus 由来糖化アミノ酸オキシダーゼホモログ遺伝子の取得と発現 <u>宮武はる香</u>,谷修治,炭谷順一,川口剛司 (阪府大院・生環科)

- **P-35** Aspergillus aculeatus 由来分泌型 β-glucosidase の反応特性 竹谷俊亮,谷修治,炭谷順一,川口剛司 (阪府大院・生環科)
- **P-36** GH3 β-グルコシダーゼがβ-フラクトフラノシダーゼ様活性を持つ 片山貴之,谷修治,炭谷順一,川口剛司 (阪府大院・生環科)
- **P-37** Aureobasidium pullulans 由来 α L アラビノフラノシダーゼの酵母 Pichia pastoris における高発 現と酵素化学的性質 東田知洋,太田一良 (宮崎大農・応生科)
- **P-38 油画に付着する糸状菌の除去を目的とした真菌細胞壁溶解酵素の適用** <u>和田朋子¹</u>,中右恵理子²,早川典子¹,佐藤嘉則¹,大河原典子¹,五十嵐圭日子³,木島隆康², 木川りか¹ (¹東京文化財研究所・保修セ,²東京芸大院・美術科,³東大院・農生科)
- P-39 担子菌エノキタケの acetyl xylan esterase (*Fv-axe*)様遺伝子の機能解析 <u>藤田将幸¹</u>, 西川良平¹, 吉田真澄¹, 奥原 徹¹, 稲富 聡², 田口悟朗¹, 下坂 誠¹ (¹信州大・繊維・応生系, ²ホクトきのこ総合研)
- **P-40** Aspergillus nidulans の sirtuin 様タンパク質 SirA の機能解析 <u>伊藤英里子</u>, 志水元亨, 桝尾俊介, 高谷直樹 (筑波大院・生命環境)
- P-41 フルアジナムにより誘導されるアカパンカビの遺伝子群の同定 高橋正和,亀井誠之,宮下基,福森文康,藤村真(東洋大院・生命科学)
- P-42 麹菌 Aspergillus oryzae 金属プロテアーゼ遺伝子の転写解析 <u>酒井大介</u>¹,竹内道雄¹,古崎利紀²,石井一夫²,有江力²,山形洋平¹ (¹東農工大院・応生化,²東農工大院・農学系ゲノム科学人材育成プログラム)
- P-43 麹菌酸性プロテアーゼ遺伝子のイントロンスプライシングに関する研究 <u>石田健</u>,久保島恵,宮本雅史,森田寛人,前田浩,岡本綾子,山形洋平,竹内道雄 (東京農工大・応 生科)
- P-44 麹菌転写因子 HapX の高発現はシデロフォア生産を顕著に増大させる 中村隼人¹, <u>林口拓実¹</u>, 安田(吉野) 庄子², 北本則行², 志水元亨¹, 加藤雅士¹(¹名城大・農, ²あ いち産科技総セ・食工技セ、)
- **P-45** *ligD* 遺伝子破壊による実用麹菌 *hapX* 破壊株の取得とその解析 <u>増田裕一郎</u>¹,安田(吉野)庄子²,北本則行²,志水元亨¹,加藤雅士¹ (¹名城大院・農、²あい ち産科技総セ・食工技セ)

- **P-46 麹菌** A. oryzae のデンプン分解酵素生産に関与する転写因子の細胞内局在解析 <u>鈴木空太</u>,田中瑞己,新谷尚弘,五味勝也 (東北大学院農・生物産業創成)
- P-47 麹菌における CreA 及び脱ユビキチン化酵素 CreB 破壊によるグルコース抑制 の解除 一瀬桜子,田中瑞己,新谷尚弘,五味勝也 (東北大院農・生物産業創成)
- P-48 麹菌における CreA タンパク質量の翻訳後過程における制御 田中瑞己,新谷尚弘,五味勝也 (東北大院農・生物産業創成)
- P-49 Neurospora crassa の beta-1,3-glucan 合成酵素遺伝子 fks-1 の転写制御因子の探索 <u>亀井誠之</u>,高橋正和,一石昭彦,藤村真(東洋大院・生命科学)
- **P-50** Trichoderma reeseiのセルラーゼ生産に関与するシグナル伝達関連タンパク質の解析 日下秀行,古川隆紀,深谷英嗣,志田洋介,小笠原 渉 (長岡技大・生物)
- **P-51** *Trichoderma reesei* のセルラーゼ生産に関与する MFS トランスポーターの機能解析 <u>古川隆紀</u>, 志田洋介, 小笠原渉(長岡技大・生物)
- P-52 糖質加水分解酵素の生産における Aspergillus aculeatus clbR 高発現の影響 川村彩乃,國武絵美,谷修治,炭谷順一,川口剛司 (阪府大院・生環科)
- P-53 環境 pH による糸状菌セルラーゼの生産制御 <u>宮本健太郎</u>,青山未来,金丸京子,木村真,小林哲夫 (名大院生命農・生物機構)
- P-54 Co-regulation of A. nidulans cellulase genes by transcription factors McmA and ManR <u>Nuo Li</u>, Miki Aoyama, Kyoko Kanamaru, Makoto Kimura, Tetsuo Kobayashi (Graduate Sch. of Bioagric. Sci., Nagoya Univ.)
- P-55 Aspergillus nidulans におけるマンナナーゼ生産制御機構 渡邉亜也子,青山未来,金丸京子,木村 真,小林哲夫 (名大院生命農・生物機構)
- **P-56** AtrR は Aspergillus fumigatus においてエルゴステロール合成系遺伝子発現を 制御する

<u>大場歩¹</u>,清水公徳²,萩原大祐²,新谷尚弘¹,川本進²,五味勝也¹ (¹東北大院農・生物産業創成,²千葉大・真菌センター)

- **P-57** Neurospora crassa のエルゴステロール生合成阻害剤による erg 遺伝子の誘導とその制御 <u>宮下基</u>, 亀井誠之, 高橋正和, 一石昭彦, 藤村真(東洋大院・生命)
- **P-58** Histone deacetylase *HstD* と *LaeA* のジェネティックインタラクション <u>河内護之^{1,2}</u>, 廣瀬雅人^{1,2}, 岩下和裕^{1,2} (1 広島大院・先端研, 2 酒総研)
- P-59 ムギ赤かび病菌におけるトリコテセン生合成制御遺伝子 Tri6 の分子生物学的解析 中嶋 佑一,前田 一行,市川 雛代,小林 哲夫,木村 真 (名大院生命農)
- P-60 糸状菌 Coleophoma empetri F-11899 株への人工アシラーゼ遺伝子の導入
 中谷 和也,山田 雅人,大内 卓也,磯貝 泰弘,橋本 正治 (富山県大・生物工)
- **P-61** 糸状菌の二次代謝産物生合成酵素の細胞内局在解析 <u>伴曉彦</u>,田中瑞己,新谷尚弘,五味勝也(東北大院・農・生物産業創成)
- **P-62** 糸状菌 *Talaromyces stipitatus* 由来 MT ドメインを有するタイプ I型 PKS の機能解析 <u>橋元 誠</u>¹,小林大祐¹,若菜大悟²,合田幸広²,藤井 勲¹(¹岩手医科大・薬,²国立衛研・生薬)
- P-63 Penicillium purpurogenum による Monascus 色素同族体生産能の多様性解析

 <u>荻原淳</u>,梅村彩良,小嶋涼,小金井霞,新居鉄平,加藤順,春見隆文 (日大・生物資源・生命化学)
- **P-64** Aspergillus fumigatus ゲノム解読株 Af293 におけるフミトレモルジン非生産性の原因遺伝子の 同定

<u>加藤直樹</u>¹,鈴木宏和¹,奥村英夫²,高橋俊二¹,長田裕之¹ (¹理研基幹研・ケミカルバイオロ ジー,²高輝度光科学研究センター)

- **P-65** イネいもち病菌の二成分情報伝達系攪乱による PK-NRP 融合化合物生産誘導 <u>尹忠銖</u>,本山高幸,林敏明,廣田洋,長田裕之 (理研基幹研・ケミカルバイオロジー)
- **P-66** 牧草共生糸状菌 *Epichloë festuc*ae の宿主植物への全身的感染における低分子量 G タンパク質 Cdc42 の役割

<u>榧野友香</u>·竹本大吾(名大院·生命農学)

P-67 Isolation of a gene involved in the growth inhibition of grass pathogens by fungal grass endophyte Epichloë festucae Jennifer Niones, Takushi Hashikawa and Daigo Takemoto (Graduate School of Bioagricultural Sciences,

Jenniter Mones, Takushi Hashikawa and Daigo Takemoto (Graduate School of Bioagricultural Sciences, Nagoya University)

- **P-68** 担子菌酵母 Cryptococcus neoformans の DBB 染色反応と PMT2 遺伝子の関与 清水公徳,今西由巳,川本進 (千葉大・真菌センター)
- P-69 病原性真菌 A. fumigatus を弱毒化するマイコウイルスの探索とその性状解析
 <u>八原美沙¹</u>,高橋梓²,森山裕充³,五ノ井透² (¹千葉大学・医学薬学府,²千葉大・真菌センター,
 ³農工大)
- P-70 イネいもち病菌における DNA 二本鎖切断誘導系を用いた遺伝的変異機構の解析と遺伝子タ ーゲッティング法への応用 <u>荒添貴之</u>,用之丸哲也,大里修一,*有江力,桑田茂 (明治大農・*農工大農)
- P-71 イネいもち病菌を用いたクロラムフェニコールの新規作用点の探索 西脇綾香,井上雅高,後藤麻紀子,鎌倉高志 (東理大院理工・応生)
- **P-72** イネいもち病菌のキチンデアセチラーゼ相同タンパク遺伝子 *CBP1* の機能解析 <u>吉田翔</u>,黒木美沙,大野優子,中嶋佑一,鎌倉高志 (東理大院理工・応生科)
- P-73 コムギいもち病菌のエンバクに対する非病原力遺伝子 PAT1のマッピング <u>森亮太</u>,井上喜博,中馬いづみ,土佐幸雄 (神戸大院・農学研究科)
- **P-74** 感染中のいもち病菌が分泌する AVR-Pia タンパク質はごく微量である <u>佐藤佑樹¹</u>, 尾瀬農之², 寺内良平³, 曾根輝雄¹ (1 北大農院・応生科, 2 北大薬院・創薬, 3 岩 手生工研)
- P-75 イネいもち病菌マイコウイルス由来弱毒化タンパク質が宿主細胞に及ぼす生育阻害メカニズムのパン酵母を利用した解析 <u>太田智子¹</u>,浦山俊一¹,福原敏行¹,有江力¹,寺岡徹¹,高橋梓²,東江昭夫²,五ノ井透²,森山裕充¹(¹東京農工大院・生物制御科,²千葉大・真菌センター)
- P-76 Alternaria alternata N18株に生育阻害を引き起こすマイコウイルスのゲノム解析とAK 毒素産
 生に及ぼす影響調査
 竹下佳那¹,岡田亮¹,福原敏行¹,有江力¹,寺岡徹¹,江草真由美²,児玉基一朗²,森山裕充¹
 (¹農工大院・農,²鳥取大院・農)
- **P-77** キャベツ萎黄病菌における *SIX4* の機能はトマト萎凋病菌と同じか? <u>柏</u>毅, 稲見 圭悟¹,藤永 真史²,小木曽秀紀²,寺岡 徹,有江 力(農工大院連農,¹現ブリ ヂストン中研,²長野野花試)

- P-78 出芽酵母の Spindle Position Checkpoint (SPOC)構成要素はウリ類炭疽病菌において付着器 分化過程における適切な細胞周期の進行に関与する 深田史美¹⁾、坂口 歩²⁾、久保康之¹⁾(京都府大院・生環¹⁾、生物研²⁾)
- **P-79** ウリ類炭疽病菌における低分子量 G タンパク質 CoCdc42, CoRac1 の機能解析 河下美都里・幸前有香・野村拓将・久保康之・辻 元人 (京府大院生環)
- **P-80** イチゴ黒斑病菌の 1.0 Mb 染色体にコードされる AF 毒素生合成遺伝子クラスターの同定 <u>原歩美¹</u>,近藤日佳理¹,播本佳明¹,間瀬千晶¹,張祐介¹,山本幹博²,秋光和也³,柘植尚志¹ (¹名大院・生命農,²岡山大・農,³香川大・農)
- P-81 リンゴ斑点落葉病菌の 1.3 Mb 染色体にコードされる AM 毒素生合成遺伝子クラスターの 同定

<u>川瀬めぐみ</u>,後藤千保,播本佳明,児玉基一朗,山本幹博,尾谷浩,柘植尚志 (名大院生農・鳥 取大・岡山大)

- P-82 パイロシークエンス法を用いたキュウリ褐斑病菌の殺菌剤耐性変異検出の構築 新福剛、坂野真平、石上陽平、一石昭彦、藤村真(東洋大院・生命科学)
- P-83 ウリ類炭疽病菌が分泌するエフェクター分子の植物細胞死誘導および抑制能と感染過程に おける局在解析

入枝泰樹, 高野義孝 (京大・院・農)

- P-84 ウリ類炭疽病菌は,植物表層上における PacC 依存型の環境認識を介して,適切な侵入様式 を選択する <u>吉野香絵</u>、高野義孝(京大院農)
- P-85 トウモロコシごま葉枯病菌の病原性と有性生殖におけるオートファジーの関与 <u>住田卓也</u>,泉津弘佑,森田篤,田中千尋 (京大・院・農)
- P-86 トウモロコシごま葉枯病菌における PKA 遺伝子および PKR 遺伝子の機能解析 <u>湯谷智</u>,泉津弘佑,住田卓也,北出雄生,田中千尋(京大・院・農)
- **P-87** Cryphonectria parasitica の C 末端脂質付加部位を欠く低分子量 GTP 結合タンパク質 RAS3 の 性質

山内優輝,高橋拓也,笠原紳 (宮城大学・食産業・環境)

P-88 糸状菌類で保存されている機能未知遺伝子破壊株の特性解析 <u>井丸直</u>^{1,2}, 妹尾史子^{1,2}, 寺戸志保^{1,2}, 池田優理子², 岩下和裕^{1,2} (1 広島大院・先端研, 2 酒類研)

— 13 —

Diversity and evolution of wood decay systems in saprotrophic and mycorrhizal Agaricomycetes (mushroom-forming fungi).

David Hibbett, Clark University, Worcester MA 01610 USA.

The Agaricomycetes includes over 20,000 described species of mushrooms, polypores, puffballs and other macrofungi. This diverse assemblage has both saprotrophic (decayer) and biotrophic (symbiont or pathogen) modes of obtaining carbon nutrition. Saprotrophic Agaricomycetes include the vast majority of microorganisms that are able to decay wood (a major pool of organic carbon), as well as decomposers of leaf-litter and other substrates. Among the wood-rotting species, two principal modes of decay occur: white rot, in which both lignin and cellulose are decomposed, and brown rot, where cellulose is attacked but lignin remains as a polymeric residue. The most common form of biotrophy is ectomycorrhizal symbiosis (ECM), although the Agaricomycetes also contain plant pathogens, mycoparasites, and mutualistic partners of insects (such as attine ants).

In collaboration with the DOE Joint Genome Institute and an international consortium of partners, we are using phylogenomic approaches to understand the pattern and mechanisms of switches between nutritional modes in Agaricomycetes. To reconstruct the evolution of wood decay mechanisms, we generated and analyzed complete genomes of twelve species of Agaricomycotina, including six white rot, five brown rot, and one mycoparasitic species, and we combined these with existing genome sequences of 19 species. We found that all white rot genomes encode multiple copies of lignin-degrading class II fungal peroxidases (POD), which have been repeatedly lost in brown rot lineages, as have genes encoding many other decay-related oxidoreductases and enzymes attacking crystalline cellulose. The Agaricomycete Laccaria bicolor and the Ascomycete Tuber melanosporum, both ECM species, also lack PODs and they appear to have lost many enzymes involved in decomposition of cellulose. Nonetheless, each has retained pectinases (GH28) and endoglucanases (GH5), which have been shown to be among the most highly upregulated genes in ectomycorrhizae (presumably aiding in the penetration of the root cortex), demonstrating an adaptation of "decay" enzymes for a symbiotic lifestyle. To further characterize the origins of ECM symbioses, we are currently analyzing ten new whole genome sequences, including members of the Agaricales, Boletales, and Sebacinales. Preliminary analyses suggest that different lineages have differentially retained or lost enzymes associated with wood decay, indicating that there is substantial variation in nutritional capabilities among ECM Agaricomycetes.

シンポジウム

S-1

α-1,3-グルカンを利用した植物病原性糸状菌の自然免疫回避機構

西村麻里江

((独) 農業生物資源研究所 植物・微生物間相互作用研究ユニット)

動物や植物には体内に侵入した「非自己」を迅速に認識して排除する自然免疫(innate immunity)と呼ばれる機構がある。自然免疫により認識される標的として微生物の外界 に接する部位(細胞壁や鞭毛など)の構成成分(例えば多糖など)などが一般的に知ら れている。しかし病原性微生物は「非自己」成分を持つにもかかわらず宿主生物に感染 することができる。近年,病原性糸状菌における自然免疫回避機構は動物病原菌を中心 に徐々に明らかになりつつあるが,植物病原菌では殆ど分かっていない。

本シンポジウムでは著者らが明らかにした植物病原性糸状菌のα-1,3-グルカンを利用した自然免疫回避機構について紹介するとともに、本研究成果の作物保護への応用についての可能性を述べる。

「ステルス機能を備えた鎧」としての α-1,3-グルカン

植物では糸状菌の細胞壁由来のキチンやβグルカン (分岐したβ-1,3-グルカン)オリゴ マーが防御応答を誘導することが知られており(1),実際にイネやシロイヌナズナでキ チンオリゴマーを認識するレセプターがクローニングされている(2,3)。しかしβグル カンやキチンが糸状菌の骨格形成に必要な多糖であることから,植物病原性糸状菌には これらの細胞壁多糖を宿主植物により認識させないための機構があると考えられてき た。

著者らが抗体やレクチンを用いてイネ感染時のいもち病菌(*Magnaporthe oryzae*)の細胞 壁多糖を観察したところ,感染時特異的に α -1,3-グルカンが細胞壁表層に蓄積され,そ の結果として細胞壁中の β -1,3-グルカンやキチンが覆い隠されていることが明らかにな った(4)。また変異株を用いた解析から,いもち病菌では植物表面のクチン(ワックス) 成分の認識により MAP キナーゼ(Mps1 MAPK; cell wall integrity MAP kinase ortholog) が活性化して α -1,3-グルカンの生合成が誘導されることが見出された(4)。

そこで α -1,3-グルカン合成遺伝子(MoAGSI)を欠損させたいもち病菌(Δ MoAGSI)を 作製したところ、 Δ MoAGSI は葉上で溶菌して感染に失敗するだけではなく、植物が防 御応答の1つとして分泌する抗菌酵素(キチナーゼ)に対して感受性を示すようになっ た(5)。さらに興味深いことに、MoAGSI 欠損いもち病菌に対するイネの防御応答が菌の 侵入前から誘導されることが見出された(5)。これらの結果と α -1,3-グルカナーゼ遺伝 子が植物ゲノム中に見つかっていないことを考え合わせると、いもち病菌は感染時に植 物が分解できない α -1,3-グルカンで菌体表層を覆うことにより、イネが生産する(おそ らくはイネ表面にも分泌されている)抗菌酵素などから菌体を保護すると同時にイネの 自然免疫による認識を回避していることが推測された。

α-1,3-グルカンを標的とした病害防除

そこでバクテリア由来のα-1,3-グルカナーゼ遺伝子をイネに導入して分泌させたとこ

ろ、イネの3大糸状菌病害であるいもち病、ゴマ葉枯れ病、紋枯れ病菌に対する抵抗性 を示した(5)。ゴマ葉枯れ病菌(*Cochlioborus miyabeanus*)と紋枯れ病菌(*Rhizoctonia solani*) の細胞壁構造を観察したところ、これらの菌でもいもち病菌と同様に感染時特異的な細 胞壁表層へのα-1,3-グルカンの蓄積が確認された(5)。α-1,3-グルカナーゼ分泌イネがこ れらの病原菌に対して防御応答を迅速に活性化したことから、「α-1,3-グルカンで菌体 表層を覆う」という宿主植物の自然免疫からの回避機構がこれらの菌の間で保存されて いることが強く示唆された。

いもち病, ゴマ葉枯れ病が子嚢菌であるのに対して紋枯れ病菌は担子菌であり, これら の菌は進化上相互に遠い関係にある。加えて, α-1,3-グルカナーゼ遺伝子が植物ゲノム 中に見つかっていないことや, 紋枯れ病菌が多犯性であり殆どの植物に感染できること などから, おそらく多くの植物病原性糸状菌がα-1,3-グルカンを利用して自然免疫によ る認識を回避しているのではないかと想像される。またα-1,3-グルカンが欠損した病原 菌に対して宿主植物が侵入前から自然免疫を活性化するという実験データはα-1,3-グル カナーゼやその生産菌を利用した病害防除法の可能性を示唆している。α-1,3-グルカン を標的とすることにより「植物の自然免疫を利用した」これまでにないタイプの作物保 護技術が開発できるのではないかと考えている。

本研究をすすめるにあたり阿部敬悦博士(東北大学),藤川貴史博士,坂口歩博士,西 澤洋子博士(生物研),矢野成和博士(山形大学)をはじめ多くの方々のご協力に感謝 いたします。本研究は農林水産省新農業展開ゲノムプロジェクト(PMI0009),生研センタ ー異分野融合事業からの援助を受けました。

参考文献

- Shibuya N and Minami E (2001) Oligosaccharide signaling for defense responses in plant. *Physiol. Mol. Plant Pathol.* 59: 223-233.
- Kaku H, Nishizawa Y, Ishii-Minami N, Akimoto-Tomiyama C, Dohmae N, Takio K, Minami E, and Shibuya N (2006) Plant cells recognize chitin fragments for defense signaling through a plasma membrane receptor. *Proc. Natl. Acad. Sci. USA.* 103: 11086-11091.
- Miya A, Albert P, Shinya T, Desaki Y, Ichimura K, Shirasu K, Narusaka Y, Kawakami N, Kaku H, Shibuya N (2007) CERK1, a LysM receptor kinase, is essential for chitin elicitor signaling in Arabidopsis. *Proc Natl Acad Sci USA*. 104:19613-19618.
- Fujikawa T, Kuga Y, Yano S, Yoshimi A, Tachiki T, Abe K, and Nishimura M (2009) Dynamics of cell wall components of *Magnaporthe grisea* during infectious structure development. *Mol. Microbiol.* 73: 553-570.
- 5) Fujikawa T, Sakaguchi A, Nishizawa Y, Kouzai Y, Minami E, Yano S, Koga H, Meshi T, and Nishimura M (2012) Surface α-1,3-glucan facilitates fungal stealth infection by preventing innate immunity in plants. *PLoS Pathogens* 8: e1002882.

α -1,3-glucan functions as a 'stealth armor' in fungal plant pathogens during infection Marie Nishimura (National Institute of Agrobiological Sciences)

植物病原糸状菌の集団適応戦略ーイネいもち病菌を例として

土佐幸雄

(神戸大学大学院農学研究科 植物病理学研究室)

糸状菌 Pyricularia oryzae (完全世代 Magnaporthe oryzae) によって引き起こされるいも ち病は、イネの最重要病害である。これを防除するため明治以来抵抗性遺伝子の探索が 行われ、それを日本品種に導入する育種事業が展開されてきたが、1960 年代初頭、長年 の努力の結果完成した新品種が農家圃場にリリースされるや否や、それらを侵すイネい もち病菌新レースが出現し、抵抗性品種が感受性品種に転落するといういわゆる「抵抗 性の崩壊」現象が次々と起こった。これは、農家ならびにそれら品種の育成に心血を注 いだ育種家に大きな打撃を与えた大事件であった。

植物病原菌は、なぜそれほど素早く抵抗性遺伝子に適応できるのであろうか。植物品 種と病原菌レースの間の特異性は、Gene-for-gene説によって説明できる。それによれば、 植物の抵抗性遺伝子座それぞれに対して一対一に対応する病原力遺伝子座が菌の側に 存在する。そして、その菌側の遺伝子座における優性アリルは非病原性を支配し、この アリル(非病原力遺伝子)を菌が持っている場合にのみ、抵抗性遺伝子はその効力を発 揮できる。そうすると、菌が抵抗性遺伝子に適応するためには、その非病原力遺伝子の 機能を損なうような変異を起こせばよい。これは劣性方向への変異であるから、極めて 容易であると考えられる。病原菌の素早い適応の理由はこのように理解されてきた。な お、非病原性という自己に不利益な性質を付与する遺伝子を菌が持っている理由は当初 不明であったが、現在では、それらの多くは本来病原性の強化に関与する「エフェクタ 一遺伝子」であることが明らかとなっている。

近年、病原性アリルへの変異のメカニズムに関する分子レベルの知見が数多く報告さ れるようになった。その結果、トランスポゾンの挿入、点突然変異等も散見されるもの の、多くの場合は、遺伝子自体の欠失が起こっていることが明らかとなった。この事実 から次の疑問が生じる。菌が抵抗性遺伝子に適応するたびに対応する非病原力遺伝子を 失っていくと、やがてはすべてを失ってしまうのではないかと思われる。しかし、実際 にはそれぞれの非病原力遺伝子は集団の中に維持されている。非病原力遺伝子がエフェ クターを支配することを考えれば、菌が非病原力遺伝子を維持しようとするであろうこ とは予測できるが、どのようにしてそれを可能としているのであろうか。

いもち病菌のレースー品種間特異性に関わる非病原力遺伝子として最初にクローニ ングされたのは、Pitaに対応する AVR-Pita である(1)。AVR-Pita は、Pitaに認識される AVR-Pita1, AVR-Pita2、ならびに認識されない AVR-Pita3 等のメンバーから成る遺伝子フ ァミリーを構成している(2)。Orbach et al. (1) がクローニングした AVR-Pita1 は、第3 染色体のテロメアに隣接して座乗していた。その後、世界的な研究の趨勢は、非病原力 遺伝子産物と抵抗性産物の相互作用、非病原力遺伝子産物の機能へと移り、座乗染色体 には注意が払われなくなった。そのような中、我々は、本遺伝子の座乗染色体をさまざ まな菌株を用いて丹念に調べたところ、AVR-Pita1 が頻繁に座乗染色体を変えているこ とを見出した(3)。この現象を、multiple translocation と呼ぶことにした。この座乗染色 体の変異は、イネ菌において特に顕著であった。これは、イネとイネ菌の長く複雑な相 互作用の歴史を反映していると考えれば reasonable である。一方、Pita に認識されない

S-2

— 17 —

*AVR-Pita3*は、菌株に関わらず安定して第7染色体に座乗していた。これらのことから、 multiple translocation は、*Pita*による認識と密接に関係していると考えた。

なぜ、*Pita*による認識が multiple translocation を促進するように見えるのか、その理由 は当初不明であった。multiple translocation が本遺伝子の塩基配列レベルの突然変異を誘 発し、*Pita*による認識から逃れやすくしているという可能性も考えたが、実際の

AVR-Pital の塩基配列は、かなり安定していた。なによりも、いもち病菌が Pita の認識 から逃れるための最も一般的な方法は、塩基配列の変異ではなく、遺伝子そのものの全 欠失であった。

これを説明する手掛かりとなったのは、AVR-Pita2の Horizontal transfer を示すデータ であった。AVR-Pita2 は、イネ菌 P. oryzae とは別種のメヒシバ菌(P. grisea)のゲノム中 に存在するメンバーであるが、周辺構造も含めてほぼ同じ AVR-Pita2 フラグメントがキ ビ菌(イネ菌と同種 P. oryzae に属する)に存在することが判明した(3)。非病原力遺伝 子が種を超えて移動可能ならば、同種内、あるいは同種同菌群内個体間での移動はより 容易であろうと考えた。もし、いもち病菌が、そのような個体間移動を介した非病原力 遺伝子の再獲得メカニズムを持っているならば、「抵抗性遺伝子への適応のたびに失わ れていくはずの非病原力遺伝子をどのようにして集団内に維持しているのか」「なぜ、 Pita による認識が multiple translocation を促進するように見えるのか」という2つの問題 は容易に説明できる。非病原力遺伝子の欠失によりいもち病菌が適応し、抵抗性品種が 感受性に転落すると、通常、もとの感受性品種の頻度が増えて(復活して)ゆく。抵抗性 遺伝子を持たない品種の上ならば、エフェクター遺伝子を持つ菌系の方が有利である。 そこで、エフェクター遺伝子を再獲得した個体が増えてゆく。いもち病菌の有性世代は 野外ではいまだ確認されていないので、この再獲得を有性生活環を介して行っている可 能性は極めて低い。おそらく anastomosis 等を介するのだろうと考えているが、この過程 で再導入されたエフェクター遺伝子は、元あった位置に関係なく染色体のサブテロメア や脆弱部位に挿入される。この欠失→再獲得のサイクルの結果が、我々に multiple translocation として認識されると考える。いもち病菌は、このように「集団」を非病原力 遺伝子の reservoir として使うことにより、非病原力遺伝子が抵抗性遺伝子から「逃げ回 る」ことを可能にしつつ、それを維持しているように思われる。

以上の知見をもとに、我々の考える植物病原菌の適応戦略を整理してみよう。AVR-Pita 以外にも、多くのいもち病菌非病原力遺伝子がテロメア近傍に座乗することが知られて いる。いもち病菌の非病原力遺伝子がテロメア付近(サブテロメア)に座乗することを 好むことが明らかとなってきたとき、多くの研究者が連想したのは、動物病原体との類 似性であった。たとえば、マラリア原虫 Plasmodium falciparum は抗原を次々と変化させ てすばやく宿主免疫機構(抗体)による認識をかいくぐることが知られているが、それ は抗原決定に関わる var gene がサブテロメアに座乗するがために、その可塑性(不安定 性)を利用して異所的組み換えを頻繁に起こし、新しい var 変異体を次々と創出するこ とによる(4)。しかし、よく見ると、動物病原体の抗原遺伝子と植物病原体の非病原力 遺伝子は重要な点で異なっている。第一に、抗原遺伝子は個体の生存に必須で欠損する ことができる。第二に、抗原遺伝子は多くの場合生存に必須ではなくゲノムから捨て去 ることができる。第二に、抗原遺伝子はゲノム内に多重遺伝子族として存在するが、非 病原力遺伝子は1~数コピーしか存在しない。第三に、抗原遺伝子は非常に変異に富む が、それに比べて非病原力遺伝子の塩基配列そのものはきわめて安定である。これらの 事実を総合したとき、我々は、動物とその病原体の相互作用が個体対個体の闘いである

— 18 —

のに対し、植物とその病原体の相互作用は集団対集団の闘いなのではないか、と考える に至った。動物は個体の中に多様な抗体を作り出して病原体に対抗しているが、これに 呼応して動物病原体はその個体内に多様な抗原遺伝子を準備して適応している。一方、 植物は集団として多様な抵抗性遺伝子を保有して病原体に対抗しているが、これに呼応 して植物病原体は集団として多様な非病原力遺伝子を保持しておればよいとする。した がって、持つと不利になるときはこれをゲノムから捨て去り、再度必要になったときは 集団の reservoir から再獲得する。これは、非病原力遺伝子が生存に必須でないが故に可 能となる「集団戦略」であると考える。

引用文献

- 1) Orbach MJ, Farrall L, Sweigard JA, Chumley FG, Valent B (2000) A telomeric avirulence gene determines efficacy for the rice blast resistance gene *Pi-ta*. Plant Cell 12: 2019-2032.
- Khang CH, Park S-Y, Lee Y-H, Valent B, Kang S (2008) Genome organization and evolution of the *AVR-Pita* avirulence gene family in the *Magnaporthe grisea* species complex. Mol Plant-Microbe Interact 21: 658-670.
- 3) Chuma I, Isobe C, Hotta Y, Ibaragi K, Futamata N, Kusaba M, Yoshida K, Terauchi R, Fujita Y, Nakayashiki H, Valent B, Tosa Y (2011) Multiple translocation of the AVR-Pita effector gene among chromosomes of the rice blast fungus Magnaporthe oryzae and related species. PloS Pathog 7:e1002147.
- Freitas-Junior LH, Bottius E, Pirrit LA, Deitsch KW, Scheidig C, et al. (2000) Frequent ectopic recombination of virulence factor genes in telomeric chromosome clusters of *P. falciparum*. Nature 407: 1018-1022.

Strategy of plant pathogenic fungi for overcoming resistance genes using a population as a unit of adaptation

Yukio Tosa (Laboratory of Plant Pathology, Graduate School of Agricultural Sciences, Kobe University)

ストリゴラクトン:植物における共生と寄生そして形態形成を司るテルペノイド

秋山 康紀

(大阪府立大学大学院生命環境科学研究科)

アーバスキュラー菌根共生

"菌根"とは菌類と植物根との共生体であり、菌根を形成する菌類を菌根菌と呼ぶ。アーバス キュラー菌根菌(arbuscular mycorrhizal fungi, AM 菌)は80%以上もの陸上植物と共生する菌 根菌であり、根の皮層細胞内に樹枝状体(arbuscule)と呼ばれる栄養交換器官を形成すること からその名が付けられている。この樹枝状体を介して AM 菌は根外に伸ばした菌糸で土壌から 吸収したリン酸などのミネラルを宿主植物に与え、自らは宿主から光合成産物である糖を受け 取るという相利共生関係を築く。分子系統解析や化石記録から AM 菌の起源は約4億6千万 年前と考えられている。これは陸上植物の起源と同時期であることから、無機栄養素が乏しい 陸上で植物が生存していくのに AM 菌が重要な役割を果してきたと考えられている。

AM 菌は菌単独ではほとんど生育せず,次世代の胞子も形成しない絶対共生菌である。この ため,実験生物としては取り扱いが極めて難しく,AM 菌と植物とがどのようにして互いの存在を 認識し,共生確立に至るのか,その分子機構はあまり分かっていなかった。とりわけ,AM 菌と 植物との間で取り交わされる共生シグナルはながらく不明のままであった。我々は天然物化学 的手法を用いて AM 共生における共生シグナルの解明を目標に研究を行い,植物から AM 菌 に向かって発せられるシグナル物質の解明に世界に先駆けて成功した。

AM 菌の宿主認識シグナル=ストリゴラクトン

AM 菌の菌糸は宿主の根の近傍に達すると激しく分岐する。この菌糸分岐は非宿主であるア ブラナ科やアカザ科などの植物では見られないことから、AM 菌の宿主認識反応と見なされて いる。菌糸分岐は根から分泌される脂溶性の低分子化合物により引き起こされることが分かっ ていた。本物質は branching factor (BF)と呼ばれ、その単離が試みられてきたが、根から極微 量しか分泌されず、化学的にも不安定であるため、ながらく単離されなかった。2005 年、我々 はマメ科モデル植物であるミヤコグサ(*Lotus japonicus*)の根分泌物から世界で初めて BF の単 離に成功し、これを 5-deoxystrigol と同定した¹⁾。本物質はストリゴラクトン(strigolactone, SL)と 総称される根寄生雑草の種子発芽刺激物質として単離されていたテルペノイドであった。ストラ イガやオロバンキなどの根寄生雑草は他の植物の根に寄生して養水分を奪う難防除性の強害 雑草であり、世界中で農作物に甚大な被害を与えている。寄生を受けてしまうのにもかかわら ず、なぜ植物が SLを根から分泌するのか、ながらく謎であった。本成果により、SL は本来、AM 菌に対する共生シグナルとして根から発せられ、根寄生雑草はこれを傍受することにより寄主と なる植物の所在を突き止めているということが分かってきた。

ストリゴラクトン=シュート分岐抑制ホルモン

1990年代半ば以降にペチュニアやエンドウ,シロイヌナズナ,イネにおいて地上部シュートが 過剰に枝分かれする変異体が発見されていた。これらの変異体の一部は、カロテノイド酸化開 裂酵素(carotenoid cleavage dioxygenase, CCD)をコードする遺伝子の変異に原因があること から、カロテノイドに由来するシュート分岐抑制ホルモンの存在が予想されていた。カロテノイド 生合成阻害剤やカロテノイド生合成変異体を用いた研究からSLがカロテノイドの酸化開裂によ

— 20 —

り生合成されることが分かっていた。そこで、CCD7 や CCD8 が欠損したイネの枝分かれ過剰変 異体について LC-MS/MS に分析したところ、SL をほとんど生産していないことが分かった。さら に、これらの変異体に SLを投与すると、枝分かれが正常に戻ることを見出した²⁰。このようにして、 1966 年に寄生シグナル³¹、2005 年には共生シグナルとして同定された SL は 2008 年には植物 のシュートの分岐を制御する内生ホルモンとして同定されることとなった。ごく最近、LC-MS/MS を用いた植物界における SL の分布解析から、水生藻類であるシャジクモが SL を生産している ことが明らかになった。このことから、植物進化の歴史において SL はまず植物ホルモンとして出 現した後に、AM 菌に対する共生シグナルへと機能分化していったと考えられている⁴⁰。



図. 5-Deoxystrigol

参考文献

- 1) Akiyama, K., et al., Nature, 435, 824-827 (2005)
- 2) Umehara, M., et al., Nature, 455, 195-200 (2008).
- 3) Cook, C.E., et al., Science, 154, 1189-1190 (1966).
- 4) Delaux P.M., et al., New Phytologist, 195, 857-871 (2012).

Strigolactones: multifunctional terpene lactones acting as a rhizosphere signal to arbuscular mycorrhizal fungi and root parasitic weeds as well as a shoot branching-inhibiting hormone in plants

Kohki AKIYAMA (Grad. Sch. of Life and Environ. Sci., Osaka Pref. Univ.)

牧草共生糸状菌 epichloae エンドファイトの共生に関わる遺伝子群の機能解析

竹本大吾

(名古屋大学大学院 生命農学研究科 植物病理学研究分野)

図. epichloae エンドファイトが産出する生理活性物質

植物体内で共生的に生活している糸状菌や細菌などはエンドファイトと総称されて いる。Epichloë/Neotyphodium属エンドファイト(epichloaeエンドファイト)は子のう菌 門、麦角菌科に属し、牧草や芝草の細胞間隙で生育し、共生関係を保っているエンドフ ァイトである(1)。菌根菌などの良く知られている共生菌が根に感染するのに対し、 epichloaeエンドファイトは宿主植物の地上組織の細胞間隙で生育し、根には殆ど定着し ない。epichloaeエンドファイトは宿主植物内で種々の生理活性物質を生成し、植物に動 物や昆虫による補食の抑制、耐乾性、耐病性などの効果をもたらす。一方で、植物細胞 間隙で生育することにより外界の微生物から遮断され、植物の細胞間隙から栄養を獲得 し、種子を介して次世代の植物に感染することで繁殖しており、両者はお互いに利益を 与え合う関係を築いている。本講演では、Epichloë festucaeとペレニアルライグラスのモ デル系を用いてこれまでに取り組んできた、エンドファイトが生成する生理活性物質の 生合成遺伝子群の解析、共生の確立に関与する遺伝子群の解析、病害抵抗性に関わる遺 伝子単離の試みなどについて紹介する。

1) epichloae エンドファイトが生成する生理活性物質ロリトレム B の生合成遺伝子

エンドファイトが生成する生理活性物質 として、動物に毒性を示すロリトレム B や エルゴバリン、昆虫に毒性や忌避作用を示 すロリン、ペラミンなどが知られている

(図)。これらの物質は epichloae エンドフ アイトが宿主植物に感染している時に特異 的に合成され、宿主植物を外敵から防御す る際に主導的な役割を果たしていると考え られている(1)。

ロリトレムBは、一部のepichloaeエンドファイ



トがペレニアルライグラス感染時に最も多く生産するインドールジテルペノイドで、ニュージーラ ンドで問題になった牧草を食べた羊の中毒症状(Ryegrass stagger)の原因物質である。ロリトレムB と共通の基本骨格をもつ化合物は、Penicillium、Aspergillus、Claviceps属菌などで知られている。近 年、P. paxilliが生産するインドールジテルペノイドのマイコトキシンであるパキシリンの生合成遺 伝子の配列をもとに、ロリトレムB生合成遺伝子が単離された(2)。パキシリン生合成遺伝子クラ スターには、5つの生合成遺伝子paxG、paxM、paxC、paxP、paxQが存在するのに対し、ロリトレム B生合成遺伝子クラスターには、5つのpax相同遺伝子のほかに、ロリトレムB生合成遺伝子クラスタ ーに特異的なltmE(プレニル基転移酵素)、ltmJ(シトクロムP450)、ltmF(プレニル基転移酵素)、 ltmK(シトクロムP450)が見出された(3)。P. paxilliにおいてpax遺伝子群が恒常的に発現するのに対 し、epichloaeエンドファイトのltm遺伝子群は宿主植物への感染時に特異的に発現することから、エ ンドファイトが宿主植物への感染を認識してltm遺伝子群の発現調節を行っていると考えられる。

2) epichloae エンドファイトの共生確立に関与する遺伝子の解析

epichloae エンドファイトと植物の関係には宿主特異性があり、例えば E. festucae は Pooideae 亜科 Poeae 連の植物にのみ感染することが出来る。非宿主植物にエンドファイ トの人工接種を試みると植物の防御応答の誘導、植物細胞や糸状菌細胞の細胞死、宿主 植物の矮化などが起こることが報告されている(4)。これらの観察から、epichloae エン ドファイトは宿主への感染を確立するために、植物の抵抗性応答を抑制あるいは回避し、 さらに宿主にストレスを与えない程度に植物内での菌糸生育を抑制していることが推 察される。

epichloae エンドファイトの宿主植物との共生確立に必要な遺伝子を単離するため、プ ラスミド挿入変異法を用いて宿主植物へ正常に感染できない変異株を複数単離した。こ れらのうち、NADPH 酸化酵素遺伝子(NoxA)を欠損した変異株は、宿主植物に感染す ると植物の矮化や分げつ数の増加を引き起し、宿主植物はやがて枯死した(5)。noxA破 壊株の宿主植物での生育を観察したところ、野生株に比べ菌糸量が顕著に増加していた。 さらに、NoxA活性化因子としてNoxRや低分子量Gタンパク質RacAを単離した(6.7)。 noxR 破壊株の植物内での生育を調べたところ、特に茎頂分裂組織での菌糸分岐の増加 が認められ、E. festucae による活性酸素生成が宿主植物内での菌糸分岐を制御している ことが示唆された(6)。培地上で生育したエンドファイトの菌糸を活性酸素の検出試薬 で染色すると、菌糸の伸長先端や菌糸分岐の起こる部位で局在的な活性酸素生成が検出 された。一方、NoxR 過剰発現株では活性酸素の局在的生成が失われ、菌糸先端成長の遅 延と菌糸分岐の異常が認められた。また Nox 阻害剤の処理によってもエンドファイトの 菌糸分岐が誘導された(6)。これらの結果は、活性酸素の局在的生成が菌糸の先端生長 や分岐を制御する因子として機能していることを示している。伸張細胞の先端での活性 酸素生成は、植物の根毛細胞の先端での活性酸素生成の例と類似しており、活性酸素が 糸状菌と植物の細胞の先端生長においてで同様の役割を担っていることを示唆してい る。さらに Yeast two hybrid 法を用いて NoxR と結合する因子の探索を行ったところ、酵 母の細胞極性決定に中心的役割を担うとされている Beml や Cdc24 の相同遺伝子が単離 された。GFP ラベルにより NoxR、RacA、Cdc24、BemA の細胞内局在性を調べたところ、 これら因子が全て菌糸先端や分岐部に局在することが明らかとなった(8)。これらの結 果から、菌糸末端で局所的に生成される活性酸素が、菌糸の先端生長や分岐を制御して いることが示唆された。

3) epichloae エンドファイトの感染による宿主植物の病害抵抗性の向上

epichloae エンドファイトの感染によって宿主植物の病害抵抗性が向上する例が報告されている。しかし、エンドファイト感染による植物の病害抵抗性獲得のメカニズムは全く解っていない。エンドファイト感染が宿主植物に病原菌耐性を付与する報告例がある一方で、全く効果がないとする報告もあり、エンドファイト菌株や病原菌の種類による効果の違いがあると考えられる。そこで、世界の様々な地域から分離された *E. festucae* 菌株群と、ペレニアルライグラスの種々の病原糸状菌との対峙培養を行った結果、斑点病菌 *Drechslera erythrospila* や炭疽病菌 *Colletotrichum graminicola* などの培地上での生育を抑制する *E. festucae* 株(Ef437 株)が見出された。Ef437 株が感染した植物に斑点病菌を接種したところ、非感染植物と比較して病徴が軽減する傾向が認められた。現在、Ef437 株を用いて斑点病菌への抗菌性を失う変異株群の単離とその原因遺伝子の解析を進めている。

- Tanaka A., Takemoto D., Chujo T. and Scott B (2012) Fungal endophytes of grasses. Curr. Opin. Plant Biol. 15: 462-482.
- Young C.A., Bryant M.K., Christensen M.J., Tapper B.A., Bryan G.T. and Scott B. (2005) Molecular cloning and genetic analysis of a symbiosis-expressed gene cluster for lolitrem biosynthesis from a mutualistic endophyte of ryegrass. Mol. Genet. Genomics 274: 13–29.
- Saikia S, Takemoto D, Tapper B.A., Lane G.A., Fraser K and Scott B. (2012) Functional analysis of an indole-diterpene gene cluster for lolitrem B biosynthesis in the grass endosymbiont *Epichloë festucae*. FEBS Lett. 586: 2563-2569.
- 4) Koga H., Christensen M.J. and Bennett R.J. (1993). Incompatibility of some grass-*acremonium* endophyte associations. Mycol. Res. 97: 1237-1244.
- 5) Tanaka A., Christensen M., Takemoto D., Park P. and Scott B. (2006) Reactive oxygen species play a role in regulating a fungus-perennial ryegrass mutualistic interaction. Plant Cell 18: 1052-1066.
- 6) Takemoto D., Tanaka A., and Scott B. (2006) A p67^{Phox}-like regulator recruited to control hyphal branching in a fungal-plant mutualistic symbiosis. Plant Cell 18: 2807-2821.
- 7) Tanaka A., Takemoto D., Hyon G.S., Park P., and Scott B. (2008) NoxA activation by the small GTPase RacA is required to maintain a mutualistic symbiotic association between *Epichloë festucae* and perennial ryegrass. Mol. Microbiol. 68: 1165-1178.
- Takemoto D., Kamakura S., Saikia S., Becker Y., Wrenn R., Tanaka A., Sumimoto H. and Scott B. (2011) Polarity proteins Bem1 and Cdc24 are components of the filamentous fungal NADPH oxidase complex. Proc. Natl. Acad. Sci. USA. 108: 2861-2866.

Functional analysis of genes involved in symbiotic interaction between epichloae endophyte and host plant.

Daigo Takemoto (Plant Pathol. Lab., Grad. Sch. Bioagricul. Sci., Nagoya Univ.)

0-1

麹菌を用いた脂肪酸等の炭化水素系化合物の生産性向上の研究

<u>玉野孝一¹</u>, Kenneth Bruno², Sue Karagiosis², David Culley², Shuang Deng², James Collet², 石井智子¹, 梅 村舞子¹, 小池英明¹, Scott Baker², 町田雅之¹ (1 産総研・生物プロセス、2 米国パシフィックノース ウエスト国立研究所)

化石燃料の世界的な需要の増加に伴い、バイオマスなどの植物成分から環境への負荷の少ないバイオ燃料を生産する技術が求められている。微生物の合成する炭化水素系化合物はバイオ燃料やその原料に用いられる可能性がある。麹菌の作る炭化水素系化合物のうち、脂肪酸や脂肪(トリグリセリド)はバイオディーゼルの原料として利用が考えられ、そこでそれらの生産性向上に向けた研究を、遺伝子組み換え技術を用いて麹菌で進めてきた。

まず脂肪酸合成に関わる4種類の酵素遺伝子をそれぞれ個別に高発現化した。そして脂肪酸や脂肪の生産性を酵素法により測定した結果,脂肪酸合成酵素複合体の高発現化において単位菌体乾燥重量当たりで脂肪酸は2.1倍,脂肪は2.2倍にそれぞれ生産性が向上した。次に炭素数18以上の長鎖脂肪酸の合成に関わる酵素遺伝子を破壊した結果,脂肪酸の生産性はさらに向上した。一方で脂肪の生産性は野生株と同じ程度であった。

脂肪酸や脂肪の生産性向上に向けて引き続き研究を進めているとともに,それ以外の麹菌の作る炭化水 素系化合物の生産系構築も視野に研究を進めている。

Research on Increased Production of Hydrocarbons such as Fatty Acids using Aspergillus oryzae.

<u>Koichi Tamano¹</u>, Kenneth Bruno², Sue Karagiosis², David Culley², Shuang Deng², James Collet², Tomoko Ishii¹, Myco Umemura¹, Hideaki Koike¹, Scott Baker², Masayuki Machida¹ (1 AIST, 2 PNNL)

O-2 (**P-5**)

麴菌必須遺伝子の解析のためのプロモーターシャットオフシステムの開発

<u>寺戸志保</u>^{1,2},島原明子¹,豊浦 利枝子²,岩下 和裕^{1,2} (¹広島大院・先端研,²酒総研)

麴菌の遺伝子機能の解析には、遺伝子の発現を ON/OFF 出来る事が必要で、これまで amyB プロモー ター等いくつかの誘導型プロモーターの開発が成されている。しかし、発現抑制時にも発現が見られるも のや、誘導、抑制時に細胞内代謝の大幅な変化が見られる等、遺伝子機能解析に使用しにくい点がある。 特にプロモーターシャットオフによる必須遺伝子の解析には、発現抑制時に転写がほぼ完全に抑えられる 必要があり、このようなプロモーターは開発されていない。そこでグルコース同様に解糖系により代謝さ れると考えられるソルビトールに着目し、解析を行った。また、 Aspergillus 属ではソルビトールを単一 の C 源として資化できるが、その代謝機構等についてはほとんど研究されていなかった。そこで、ソル ビトール誘導下での遺伝子発現につてマイクロアレイ解析を行い、誘導される遺伝子を抽出するとともに 機能解析を行うと共に、そのプロモーターについて発現制御に使用可能かどうか検討を行った。

まず、ソルビトールまたはガラクトースを誘導源として、グルコースを抑制条件としてマイクロアレイ 解析した。ガラクトースに比べソルビトールを用いた場合の方が遺伝子全体への発現変動が少なく、かつ グルコース環境下で発現が検出されず、ソルビトール下で発現が有意に 10 倍以上増加した遺伝子が2遺 伝子見つかった。そこで、プロモーターの下流に EGFP を連結したプラスミドを用いて、形質転換体を 作成した。この獲得した形質転換体をグルコースまたはソルビトール存在下で培養し蛍光と EGFP タン パクを確認したところ、ソルビトール存在下でのみ EGFP が発現していることが確認できた。現在、ノ ーザン解析を行うと共に、複数の環境下での発現誘導について解析を行っている。

The development of promoter shutoff system for function analysis of the essential genes in Aspergillus oryzae.

Shiho Terado^{1, 2}, Akiko Shimahara², Rieko Toyoura², Kazuhiro Iwashita^{1,2}

(¹ AdSM,Hiroshima Univ $\ ^2$ NRIB)

O-3 (P-9)

Aspergillus nidulans のガラクトフラナン生合成に関与する遺伝子の機能解析 <u>元松遥¹</u>, 畠山信太郎¹, 浴野圭輔¹, 二神泰基², 竹川薫², 後藤正利², 野村善幸¹, 岡拓二¹ (¹崇城大 学・生物生命・応微工、²九大・院・農)

Aspergillus 属の細胞壁構成糖鎖には、α-グルカン、β-グルカン、キチン、ガラクトマンナン(GM)が含 まれる。この GM は、α1,2-テトラマンノースのユニットがα1,6 結合した主鎖に、β1,5-ガラクトフラノ ースの側鎖であるガラクトフラナン(GF)がβ1,6 結合する構造である。この GM のうち GF の生合成に関 する知見は乏しい。本研究室で逆遺伝学的手法により見出されたAgfsA 株では、GF を認識する抗体(EB-A2) によるシグナルが消失しており、細胞壁中のガラクトース量は親株の 60%に減少していた。また、AgfsA 株では菌糸形態の異常や分生子形成能の低下が認められた。gfsA 遺伝子は子嚢菌門のうちチャワンタケ亜 門に分布しており、GF 構造を細胞壁中に持つ菌類には全て gfsA 遺伝子が存在していた。GfsA に関する機 能解析を進めるために染色体上の gfsA 遺伝子に 3xFLAG タグを挿入した。まず、in vitro における GF 合 成酵素の活性測定を行った。反応系に、GfsA-3xFLAG,糖供与体、AgfsA 由来のマンノプロテインを加え、 37℃で保温した。次に、SDS-PAGE に供与し、EB-A2 により解析をおこなった。反応時間とともにシグナ ル強度が増加し、熱失活させたものや糖供与体を除去したものではシグナルが認められなかったことから、 GfsA-3xFLAG が GF 合成活性を有することが明らかとなった。また、ゴルジ体に局在する GlfB、小胞体 に局在する BipA をマーカーとしてショ糖密度勾配遠心分離法により局在解析を行ったところ、 GfsA-3xFLAG はゴルジ体に局在することが示された。以上のことから GfsA が GF 合成酵素であり、GF はゴルジ体で合成されることが示唆された。

Functional analysis of gene involved in galactofuranan biosynthesis in Aspergillus nidulans.

Haruka Motomatsu¹, Shintaro Hatakeyama¹, Keisuke Ekino¹, Taiki Futagami², Kaoru Takegawa², Masatoshi

Goto², Yoshiyuki Nomura¹, Takuji Oka¹

(¹ Univ. of Sojo,²Univ. of Kyusyu)

O-4

Aspergillus nidulans septin interactions and post-translational modifications.

Shunsuke Masuo, Yainitza Hernández-Rodríguez and Michelle Momany (Dept. of Plant Biology, Univ. of Georgia)

Septins, GTPases first observed at the yeast septum between the mother cell and daughter bud, are increasingly considered to be novel cytoskeletal elements with roles as diverse as those of actin and tubulin. In the filamentous fungus *Aspergillus nidulans* there are five septin genes, *aspA*, *aspB*, *aspC*, *aspD*, and *aspE*. Here, we investigate the interactions among the *A. nidulans* septins using S-tag affinity purification and mass spectrometry. We showed that AspA, AspB, AspC and AspD strongly interacts each other at isotropic, unicellular and multicellular stages of early vegetative growth. AspE appears to have little or no interaction with the other septins in the isotropic and unicellular stages before septum formation. However after the transition from unicellular to multicellular growth, AspE appears to interact more with the other septins, especially AspB. LC-MS analysis detected acetylation of lysine residue in AspA recovered from the unicellular stage and in AspC recovered from the multicellular stage. In addition, we found the phosphorylation of AspD in multicellular stage. These data suggest that the septin interactions and modifications are altered during their growth stage in *A. nidulans*.

O-5 (P-23)

Characterization of Stress Granules in Aspergillus oryzae

Hsiang-Ting HUANG, Jun-ichi MARUYAMA, Katsuhiko KITAMOTO (Dept. of Biotechnol., The Univ. of Tokyo)

An important part of the cellular responses to stress or environmental stimuli is the modulation of mRNA translation and degradation. Recently, evidences from yeasts to mammalian cells have indicated that one aspect of this process involving the remodeling of translating mRNAs into non-translating mRNPs (mRNA-protein particles) that accumulate in cytoplasmic foci referred to as stress granules. We previously showed that AoSO protein, a homolog of the *Neurospora crassa* SO, accumulates at septal pore in response to stresses¹⁾. The stress-inducible behavior makes a possible link between stress granules and AoSO. In the present study, the localization analysis showed that AoSO-EGFP colocalized with the stress granules visualized by AoPab1-mDsRed in response to heat shock. Deletion of *Aoso* altered the localization of the stress granules at the hyphal tip. Furthermore, because the ability to form stress granules seems to correlate with the survival of cells exposed to stress, growth of the disruptant of *Aopub1* gene, encoding one of the major components of stress granules, was being tested under various stress conditions. Finally, the stress granules were often observed in the vicinity of vacuoles at the hyphal tip, and AoPab1-mDsRed colocalized with EGFP-AoAtg8 in response to heat shock, suggesting that autophagy may participate in the cellular stress response.

1) Maruyama et al. Biochem Biophys Res Commun 391: 868-873, 2010.

0-6

ウシグソヒトヨタケの傘成長に必要な cagl 遺伝子は、Tupl 相同タンパク質をコ ードしている。

村口 元,名越貴浩,煙山和樹 (秋田県立大・生物資源)

担子菌ウシグソヒトヨタケの子実体形成過程において,子実体原基の傘部分が成長せずに子実体原基の 状態で止まってしまう突然変異体 cap-growthless1 を見出した。この突然変異体の子実体原基では,石突上 部で傘部分が膨らみはしているものの、子実層が分化していないように思われた。原因遺伝子 cagl 座と 連鎖する RAPD マーカーを探したところ,第 IX 染色体上の G13-900B マーカーが組換え率 15%で連鎖し ていた。形質転換受容菌株#58 (cag1-1 trp1-1, 1-6)を構築し,この株に G13-900B マーカー近傍に由来する BAC DNA (trp1⁺を持つ)やサブクローンを導入し,相補活性に基づき cag1 遺伝子を特定したろころ, cag1 遺伝子は出芽酵母の Tup1 と相同なタンパク質をコードしていることが分かった。突然変異部位を特定し たところ、開始コドンから 234 番目のコドン AAA(K)が TAA(STOP)に変異していた。ウシグソヒト ヨタケのゲノムには、もう1つの Tup1 相同遺伝子(Cc.tupA と命名)があったので、定量リアルタイム PCRにより、2つのTupl相同遺伝子の発現解析を行った。栄養菌糸や子実体の柄では、Cc.tupAの方が多 く発現しているが、傘組織では cag1 の方が多く発現していた。出芽酵母の Tup1p はホモ4 量体を形成し、 Cyc8p とも相互作用することが知られているので、Cag1、Cc.TupA および Cc.Cyc8 間の相互作用を Yeast two-hybird 法を使って調べた。Cag1 はN末領域でそれ自身と相作用するとともに、Cc.TupA とも相互作用 した。出芽酵母の場合とは違って、Cc.Cyc8のN末領域は、Cag1のN末領域と強い相互作用を示さなか った。これら Yeast two-hybrid 法の結果は,Cag1 が Cc.TupA と相互作用することで傘成長に必要な遺伝子 の発現を促している可能性を示唆している。

The cag1 gene required for cap growth of Coprinopsis cinerea encodes a Tup1 homologue.

Hajime Muraguchi, Takahiro Nagoshi, Kazuki Kemuriyama

(Dept. of Biotechnology, Akita Prefectural Univ.)

— 27 —

O-7 (P-29)

麹菌が産生する hydrophobin RolA と固体表面間の相互作用機構解析

田邊弘毅¹,<u>田中拓未¹</u>,大類景子¹,上原健二¹,高橋徹^{2,3},冨樫貴成⁴,有田稔彦⁴,阿部敬悦^{1,3} (¹東北 大院・生物産業創成,²酒総研・基盤,³東北大・未来研,⁴東北大・多元研)

麹菌の産生する界面活性蛋白質 hydrophobin RolA は生分解性ポリエステル PBSA に吸着し、PBSA 分解酵素 CutL1 による PBSA 分解を促進する。一方,様々な固体表面と hydrophobin 間の相互作用機構やその kinetics は不明である。これまでに、1. RolA の Leu137, Leu142 が PBSA への結合に重要、2. pH4-10 での PBSA への RolA の親和性は pH4 で最大、3. pH4-10 における PBSA 微粒子のゼータ電位は中性で負,酸 性で 0 になる結果を得た。以上の結果と、RolA の pI=5~6 という結果から、RolA の PBSA への吸着には、 両者の "疎水的相互作用"が正に、"負電荷の静電反発"が負に働く可能性が推察された。本報告は、様々 な固体表面への RolA の吸着様式の解析を目的とした。 異なる化学的性質を付与した表面への RolA の吸着を、pH7 の条件で QCM により評価した。疎水度が異 なる表面に対する RolA の親和性は、表面の疎水度と正の相関を示した。正・負電荷表面に対する親和性 は変わらず、負電荷表面で最大結合量が半減した。従って、固体表面の負電荷が最大結合量に対し負に働 く可能性が示唆された。RolA は両親媒性であるため、固体表面の電荷により吸着様式が異なる可能性を 推察した。また RolA は pH4 で固体表面に高い親和性を示し、RolA 濃度上昇に伴う急激な吸着量の増加 と rodlet 状重合構造形成が確認された。現在、電荷・極性を持つ表面に対し、pH の異なる条件下での親 和性解析を行っている。

Analysis of the interaction between Aspergillus oryzae hydrophobin RolA and solid surfaces

Hiroki Tanabe¹, <u>Takumi Tanaka</u>¹, Keiko Orui¹, Kenji Uehara¹, Toru Takahashi^{2,3}, Takanari Togashi⁴, Toshihiko Arita⁴, Keietsu Abe^{1,3} (¹Grad. Sch. Agric. Sci., Tohoku Univ., ²NRIB., ³NICHe., Tohoku Univ., ⁴IMRAM., Tohoku Univ.)

O-8

Trichoderma reesei セルラーゼ高生産変異株における bgl2 変異の影響

<u>志田洋介¹</u>,山口香織¹、新田美貴子²、森一樹³、平川英樹⁴、久原哲³、小笠原渉¹(¹長岡技科大・生物、 ²JST、³九大・生資源、⁴かずさ DNA 研究所)

【目的】セルラーゼ高生産糸状菌である Trichoderma reesei においてセルラーゼ遺伝子群の発現は誘導 的であり、セルロースやその誘導体、 β -グルコシダーゼ(BGL)の有する糖転移活性によってセロビオ ースから生じた α -ソホロースが存在するときにのみ観察される。本研究室では、世界標準株 QM9414 から 派生した我が国独自の T. reesei 変異株系統樹を保有しており、次世代シーケンサーを用いた変異株間の比 較ゲノム解析を進めている。QM9414 から 6 代の変異を経て得られた PC-3-7 株は、セロビオースおよび L-ソルボースによるセルラーゼ誘導生産能が高められた菌株であるが、本菌において細胞内 β -グルコシダ ーゼである BGLII 遺伝子(bgl2)に SNP が生じていることが明らかとなった。そこで、本研究では bgl2 に生じた SNP の影響を解析することで、セルラーゼの誘導発現に関する新たな知見を得ることを目的と している

【結果】PC-3-7株を宿主として野生型 bgl2 導入株(WTbgl2)、bgl2 破壊株(Δbgl2)を構築し、セルラ ーゼの誘導生産性に関して種々の解析を行った。菌体内の BGL 活性は WTbgl2 において大幅な回復がか んさつされ、PC-3-7株およびΔbgl2株の活性がほぼ同程度であったため、SNP によって BGLII の機能が失 われていると考えられた。しかしながら、セロビオースによるセルラーゼ遺伝子の転写応答は PC-3-7株 が最も高く破壊株と異なる挙動を示したことから、PC-3-7において BGLII は完全に機能を失ってはおら ず、セルラーゼ誘導生産に有利な機能を残していることが示唆された。現在 bgl2 以外の SNP の影響を排 除するため、QM9414株において同様の解析を進めている。

Effect of the SNP in bgl2 in Trichoderma reesei cellulase hyper-producing strain

<u>Yosuke Shida¹</u>, Kaori Yamaguchi¹, Mikiko Nitta² Kazuki Mori³, Hideki Hirakawa⁴, Satoru Kuhara³, Wataru Ogasawara¹ (¹Nagaoka Univ. of Tech., ²JST, ³Kyushu Univ., ⁴Kazusa DNA Inst.)

— 28 —

0-9

シイタケより精製された新規 GH ファミリーに属する endo-β-1,3-グルカナーゼ

<u>坂本裕一</u>,金野尚武 (岩手生工研)

シイタケは、収穫後急速に老化し、自己分解を起こす。自己分解過程では、主に細胞壁の溶解が起こっている。シイタケの細胞壁成分は、主にキチンと β -1,3-1,6-グルカンからなっており、収穫後に起きる自己分解過程で、細胞壁分解酵素により分解される。そこで、シイタケ収穫後に発現している β -1,3-グルカナーゼの解析を行った。シイタケ保存4日目の子実体からは、2種類のエンド型 β -1,3-グルカナーゼ(TLG1及びGLU1)が精製され、両酵素をコードする遺伝子をクローニングした結果、それぞれ既知の糖質加水分解酵素と相同性を持たないことが明らかになった。TLG1は植物の抗菌タンパク質であるThaumatin-like proteinと相同性が高かったが、GLU1は機能既知タンパク質とは高い相同性を示さなかった。一方、多くの菌類などのゲノム配列に存在する hypothetical proteinと低いながらも相同性を示した。それら一群の遺伝子配列中には β -1,3-グルカナーゼと関連するモチーフは検出されなかった。しかしながら、精製した GLU1、*Phichia pastoris*で発現させた組換え酵素ともに明らかに β -1,3-グルカナーゼ活性を示した。そこで、GLU1を含む酵素群は、糖質関連酵素データベース (CAZy)に新たな糖質加水分解酵素(GH128)として登録された。両酵素は、既知のGHファミリーとは相同性が低く、ゲノム情報からは酵素機能は推定されていなかったことから、今後もゲノム情報だけでなく、酵素学的な解析が重要であることが示唆された。

Novel endo- β -1,3-glucanase purified from *Lentinula edodes*

<u>Yuichi Sakamoto</u> Naotake Konno (IBRC)

O-10

セルラーゼ遺伝子発現制御因子 ClbR と相互作用する因子の探索

<u>國武絵美^{1,2}</u>, 谷修治¹, 炭谷順一¹, 川口剛司¹ (¹阪府大院・生環科, ²日本学術振興会特別研究員 PD)

Aspergillus aculeatus ではセルラーゼ・ヘミセルラーゼ遺伝子発現は、XlnR を介した機構と XlnR 非依存 的な機構の少なくとも2種類の経路により誘導される。我々が同定した Zn(II)₂Cys₆型転写因子 <u>cellobiose</u> response regulator ClbR は、セルロース性基質を誘導物質とした際の両遺伝子群の発現を制御している。こ れまでに、*clbR* 破壊株においても制御下の遺伝子発現は完全に消失しないこと、リコンビナント ClbR タ ンパク質が *in vitro* で制御下の遺伝子プロモータ領域に特異的に結合しなかったことから、ClbR はコアク チベータとして他の因子と協調的にセルラーゼ・ヘミセルラーゼ遺伝子発現を調節していると仮定した。 そこで本研究では ClbR と相互作用する因子の探索を試みたので報告する。

既知の糖質加水分解酵素遺伝子の転写因子と ClbR パラログからなる Prey ライブラリを作製し, Yeast Two Hybrid 法により ClbR と相互作用する因子をスクリーニングした。その結果, ClbR と相同性 42%のパ ラログが取得された(ClbR2 とする)。ClbR2 の機能は未知であるため,まずその機能を調べることを目的 として *clbR2* 単独破壊株, *clbR* との二重破壊株,及び *clbR2* 高発現株を作製した。現在その表現型を解析 している段階である。また, *in vivo* における ClbR と ClbR2 の相互作用についても確認しているところで ある。

Screening for interaction factors with transcription factor ClbR involved in cellulase gene expression in *Aspergillus aculeatus*

<u>Emi Kunitake</u>^{1,2}, Shuji Tani¹, Jun-ichi Sumitani¹, Takashi Kawaguchi¹ (¹Grad. Sch. Life & Env. Sci., Osaka Pref. Univ., ²JSPS Research Fellow (PD))

O-11 (P-54)

Co-regulation of A. nidulans cellulase genes by transcription factors McmA and ManR

Nuo Li, Miki Aoyama, Kyoko Kanamaru, Makoto Kimura, Tetsuo Kobayashi (Graduate Sch. of Bioagric. Sci.,

Nagoya Univ.)

In *A. nidulans*, a MADS box protein McmA regulates at least two endoglucanse genes (*eglA* and *eglB*) and two cellobiohydrolase genes (*cbhA* and *cbhD*). As a MADS box protein generally requires an interacting partner to regulate gene expression, identification of the McmA partner is the key to understanding the regulatory mechanisms underlying cellulase regulation. One of the candidate cofactors is ManR because it is essential for expression of the above cellulase genes. This study focuses on the clarification of the cooperative regulatory mechanisms by McmA and ManR.

RNA sequencing analysis revealed that most cellulase genes were regulated by both ManR and McmA, implying that ManR is one of the partners of McmA. Previous studies have proved the existence of two binding sites for McmA on the 50 bp region of the *eglA* promoter. To detect the binding of ManR to the region, electrophoretic mobility shift assay was applied in the presence and absence of McmA. His-tagged McmA and Flag-tagged ManR were purified and utilized in the experiments. While ManR alone showed very weak binding, McmA alone bound to the probe with two shift bands corresponding to the single and double occupation of the binding sites. When both ManR and McmA were applied, the slower migrating DNA-protein complex with enhanced affinity appeared. Supershift assay using anti-Flag tag and anti-His tag antibodies confirmed that the complex contained both ManR and McmA. The results illustrated that McmA played a key role in the regulation of cellulase genes by assisting recruitment of ManR to the promoter.

This work was supported by the Programme for Promotion of Basic and Applied Researches for Innovations in Bio-oriented Industry.

Co-regulation of A.nidulans cellulase genes by transcription factors McmA and ManR

Nuo Li, Miki Aoyama, Kyoko Kanamaru, Makoto Kimura, Tetsuo Kobayashi

(Graduate Sch. of Bioagric. Sci., Nagoya Univ.)

O-12 (P-56)

AtrR は Aspergillus fumigatus においてエルゴステロール合成系遺伝子発現を制御する

大場步¹,清水公德²,萩原大祐²,新谷尚弘¹,川本進²,五味勝也¹

(1東北大院農・生物産業創成,2千葉大・真菌センター)

当研究室では、これまでに麹菌においてアゾール系薬剤排出に関与する複数の ABC トランスポーター 遺伝子の発現を同時に制御する Zn_2Cys_6 型の転写因子 AtrR を見いだしている. AtrR は Aspergillus 属に幅 広く保存されており、病原性真菌 Aspergillus funigatus においても、atrR を破壊することでアゾール系薬 剤に関して超感受性を示すことを明らかにしている.

本研究では、A. funigatus の atrR 破壊株における遺伝子発現プロファイルを網羅的に調べるために、 RNA-seqを用いてトランスクリプトーム解析を行った.A. funigatus の野生株と破壊株をDMSO, fluconazole, miconazole で各々処理したサンプルに異なるインデックスを付加することでマルチプレックスな RNA-seq を行い、各サンプルから 1.91~2.45 M read の配列、約 10000 遺伝子の発現プロファイルを得た.発現量を 比較した結果、破壊株では薬剤無添加において ABC トランスポーター遺伝子だけでなく複数のエルゴス テロール合成系遺伝子の発現量が極めて低く、薬剤を添加した際には野生株でそれらの発現量が上昇する 一方、破壊株ではほとんど変動しない、あるいは僅かな上昇しか示さないことが明らかになった.このこ とから AtrR は ABC トランスポーター遺伝子のみならず、エルゴステロール合成系遺伝子の発現も制御し ていると考えられる. A. funigatus では bHLH 型転写因子 SrbA がエルゴステロール合成系遺伝子の発現を制御している可 能性が示唆された.

AtrR regulates the expression of ergosterol biosynthesis genes in Aspergillus fumigatus.

Ayumi Ohba¹, Kiminori Shimizu², Daisuke Hagiwara², Takahiro Shintani¹, Susumu Kawamoto², Katsuya Gomi¹

(¹Div. Biosci. Biotechnol. Future Bioind., Grad Sch. Agric. Sci., Tohoku Univ., ²MMRC, Chiba Univ.)

- 30 -

O-13 (P-57)

Neurospora crassa のエルゴステロール生合成阻害剤による erg 遺伝子の誘導とその制御

<u>宮下基</u>, 亀井誠之, 高橋正和, 一石昭彦, 藤村真(東洋大院・生命)

Ergosterol は糸状菌の細胞膜の成分で、その生合成経路は農業用殺菌剤や抗真菌剤の標的である。 Morpholine 系剤 Fenpropimorph (FEN)は、C-14 sterol reductase (ERG-24)と C-8 sterol isomerase (ERG-2)の二点 の酵素を阻害し、Azole 系剤 Fluconazole (FLC)は Lanosterol 14-alpha-demethylase (ERG-11)を阻害し殺菌活 性を発現する。Ergosterol 生合成阻害剤により erg 遺伝子が誘導される事が知られているが、薬剤の阻害点 と誘導遺伝子の関係は不明な点が多い。そこで、N. crassa に FEN と FLC を処理し、メバロン酸経路から Ergosterol に至る 21 種類の erg 遺伝子の発現様式を qRT-PCR を用いて比較解析した。その結果、FEN に より阻害点の erg-24 と erg-2 及びその下流の erg-25 と erg-3 が誘導された。一方、FLC では阻害点の erg-11 及びその下流の erg-6 が誘導され、薬剤の阻害点により誘導される遺伝子が異なる事を明らかにした。興 味深いことに両剤を混合処理すると、FEN 応答遺伝子の誘導のみが顕著に低下した。合成経路の阻害で蓄 積する異常ステロールにより、誘導される遺伝子を決定している可能性が考えられた。N. crassa の Ergosterol 生合成経路は少なくとも二種類の異なる制御を受けていると推測し、その転写因子を同定する ため、転写因子破壊株ライブラリーから、FEN 及び FLC 感受性株をスクリーニングした。その結果、sterol binding element regulator protein である sah-2 破壊株が顕著な FEN 感受性を示し、FEN 応答遺伝子の誘導も ほぼ完全に消失した。一方、sah-2 破壊株は FLC 感受性及び FLC による erg-11 誘導は野生株と同様に認 められた。以上の事から、N. crassaでは、転写因子 SAH-2 が Morpholine 系剤により誘導される遺伝子を 制御する事を明らかにした。

Regulation of ergosterol biosynthetic genes in response to azole and morpholine fungicides in *Neurospora* crassa.

<u>Moto Miyashita</u>, Masayuki Kamei, Masakazu Takahashi, Akihiko Ichiishi and Makoto Fujimura (Fac. of Life Sci., Toyo Univ.)

O-14

Chaetomium globosum における天然物生合成遺伝子研究からみえてきた 特定二次代謝産物による遺伝子発現制御および有性生殖への関与

中沢威人, 石内勘一郎, 杉本覚, 五反田康孝, 佐藤道大, 野口博司, 渡辺賢二 (静岡県大・薬)

糸状菌 Chaetomium globosum は、強力な生物活性を有する多様な天然物(二次代謝産物)を、興味深い 生合成機構によって産生する。我々は本菌における分子遺伝学実験システムの構築を通じ、そのような興 味深い天然物の生合成機構について研究を行っている。本発表では、一連の生合成研究の過程で明らかと なった、本菌における二次代謝産物の遺伝子発現制御および有性生殖への関与について報告する。

二次代謝産物である aureonitol および chaetoviridin 類生合成遺伝子の破壊株において、それぞれ異なる 複数の天然物(新規化合物を含む)の顕著な産生変動が観察された。これら天然物について、NMR スペ クトル解析による構造決定を行い、続いて遺伝子破壊実験を通じて生合成遺伝子クラスターを特定した。 これら生合成遺伝子の転写発現は、それぞれの天然物の産生変動に対応する形で顕著に変動していた。以 上から、aureonitol および chaetoviridin 類によって、他の二次代謝産物の生合成を転写レベルで制御する 機構の存在が明らかになった。また、chaetoglobosin 類生合成遺伝子の破壊株において、子のう殻形成は 確認できるが、有性胞子が形成されない表現型が観察された。

これらの結果について,過去の天然物化学研究から報告されている上記天然物およびそれらの類縁体の 生物活性・作用機序に関する知見,および本菌におけるエピジェネティック制御因子類との遺伝子多重破 壊株の解析結果を踏まえて議論する。

Effects of secondary metabolites on transcriptional regulation and sexual development in *Chaetomium* globosum

Takehito Nakazawa, Kan'ichiro Ishiuchi, Satoru Sugimoto, Yasutaka Gotanda, Michio Sato, Hiroshi Noguchi,

Kenji Watanabe (School of Pharmaceutical Sciences, Univ. of Shizuoka)

- 31 -

O-15

イネいもち病菌の二成分情報伝達系攪乱によるポリケタイド化合物生産誘導

<u>本山高幸</u>,林敏明,廣田洋,長田裕之 (理研基幹研・ケミカルバイオロジー)

【目的】糸状菌ゲノム中に予想以上に膨大な数の二次代謝遺伝子が存在することが明らかになってきたが、 ほとんどは実験室条件では休眠状態にある。二次代謝遺伝子はある特定の環境でのみ発現するように厳密 な制御を受けていることが想定されている。それならば、環境応答を攪乱することにより、休眠遺伝子覚 醒が可能なはずである。今回、モデル植物病原糸状菌であるイネいもち病菌*Magnaporthe oryzae*を用いて、 環境応答に関与する二成分情報伝達系の攪乱により二次代謝産物生産誘導が可能なことを見出し、生合成 遺伝子を同定した。 【方法と結果】HPt遺伝子*MoYPD1*を破壊することにより二成分情報伝達系を攪乱した。HPt遺伝子破壊に よる致死性を回避するために、下流で働くp38 MAPキナーゼOsm1の遺伝子破壊株を作製した後に、HPt遺 伝子破壊を行った。HPt遺伝子破壊株の培養液中で二つの二次代謝産物の生産が誘導されていることを見 出した。一つは、イネいもち病菌と近縁の植物内共生菌(エンドファイト)などで生産が報告されている ポリケタイド化合物nectriapyroneであり、もう一つはその類縁体で新規物質であった。DNAマイクロアレ イ解析により、生産誘導パターンと一致する発現パターンを示すPKS遺伝子を1 個見出した。遺伝子破壊 により、二つの代謝物の生産が認められなくなったことから、このPKS遺伝子が生合成に関与することが

明らかとなった。

本研究の一部は、生研センターイノベーション創出事業による支援を受けた。

Induced production of polyketide compounds by disturbance of the two-component signal transduction system in the rice blast fungus

Takayuki Motoyama, Toshiaki Hayashi, Hiroshi Hirota, Hiroyuki Osada

(Chem. Biol., RIKEN ASI)

O-16

Aspergillus fumigatus における新規病原因子の探索と機能解析

<u>酒井香奈江</u>,大荒田素子,高橋梓,五ノ井透 (千葉大・真菌センター)

アスペルギルス症はアスペルギルス属菌によって引き起こされる日和見感染症で、臓器移植患者や AIDS 患者など免疫機能の低下したヒトに重大な疾病を引き起こす。この主な原因菌として知られている のが A. funigatus であり、治療が遅れた場合の致死率は高い。現在、いくつかの抗生物質が治療薬として 用いられているが、耐性菌の出現が報告されており新規治療薬の開発が求められている。

これまでに宿主であるヒトや動物モデルにおいて、感染菌の細胞表面多糖とそれを認識するレセプター が感染防御において重要な働きをしていることが報告されてきた。しかし、そのほとんどが宿主側のレセ プターについての研究で、真菌側のレセプターがどのような働きをしているのか明らかとなっているもの は少ない。そこで本研究では、糖鎖を認識するレセプタータンパク質であるレクチンに焦点をあて、A. funigatusのレクチンと病原性との関わりを調べることとした。

A. funigatus のゲノム配列よりレクチンと思われる遺伝子を選択し,破壊株を作製,マウスへの感染実験を行ったところ,病原性が顕著に昂進した株が見つかった。この破壊株では病原性だけではなく病理組織においても野生型株と異なる挙動を示しており,破壊した遺伝子が病原性発現において何らかの働きをしていると考えられる。現在,この遺伝子機能についてさらに解析を進めているところであり,病原性が 昂進した原因を知ることでアスペルギルス症の発症や播種の機構の解明が進むことが期待される。

Screening and functional analysis of the virulence factor in Aspergillus fumigatus.

Kanae Sakai, Motoko Ooarada, Azusa Takahashi, Thoru Gonoi

(MMRC, Univ. of Chiba)

0-17

イネいもち病菌における HsbA 様タンパク質 Mohsb1, Mohsb2 は病原性に関与する

坂口歩・西村麻里江 (生物研)

イネいもち病菌は感染過程において様々な分泌タンパク質を生産し感染を成立させる。これまでに本研 究室では、植物のクチン分解産物がいもち病菌のα-1,3-グルカン合成を誘導し、本菌の感染に必須である ことを明らかにしてきた。今回、クチナーゼのリクルート活性を持つ麹菌 HsbA タンパク質に着目し、い もち病菌における HsbA 様タンパク質の病原性への関与を検討した。最初に、いもち病菌が保持する 8 個 の HsbA 様タンパク質コード遺伝子破壊株を作成し、大麦に対する病原性検定を行った。その結果、2 つ の破壊株で顕著な病原性の低下が見られ、これら遺伝子を MoHSB1、MoHSB2 と命名した。MoHSB1 また は MoHSB2 プロモーター下流に GFP を連結し、各生育ステージでの観察を行ったところ、メラニン化し た成熟付着器および侵入菌糸でのみに GFP シグナルが検出されたことから、MoHSB1、MoHSB2 は付着器 形成および侵入菌糸形成能に差異は見られなかったことから、MoHSB1, MoHSB2 は感染器官分化には必 須でないことが考えられた。分泌シグナルコード領域を欠いた MoHSB1, MoHSB2 では mohsb1、mohsb2 破壊株の病原性欠損を相補できなかった。このことから、Mohsb1, MohSb2 はイネいもち病菌の感染過程 において分泌され病原性に寄与していることが示唆された。

HsbA-like proteins Mohsb1 and Mohsb2 are involved in pathogenicity in Magnaporthe oryzae.

Ayumu Sakaguchi, Marie Nishimura.

(NIAS)

O-18 (P-78)

出芽酵母の Spindle Position Checkpoint (SPOC)構成要素はウリ類炭疽病菌において 付着器分化過程における適切な細胞周期の進行に関与する

<u>深田史美¹</u>,坂口 歩²,久保康之¹(京都府大院・生環¹⁾、生物研²)

ウリ類炭疽病菌はウリ科植物に炭疽病を引き起こす植物病原糸状菌である。本菌は感染過程において分 生胞子の先端部での付着器形成,侵入菌糸の宿主内成長といった一連の形態形成を伴い,感染を成立させ る。我々はこれまでにアグロバクテリウム形質転換法により,ウリ類炭疽病菌の付着器形成欠損変異株 coQ-1を得ている。coQ-1の破壊候補遺伝子における推定コードアミノ酸配列は,出芽酵母のBUB2と高い 相同性を示し,このホモログ遺伝子をCoBUB2と命名した。出芽酵母のBUB2は、細胞分裂制御に関与する Spindle Position Checkpoint (SPOC)の構成要素である。CoBUB2の遺伝子破壊実験を行った結果, cobub2破 壊株は付着器の形態異常,宿主植物への病原性低下を示した。そこで,cobub2破壊株における核分裂の挙 動を解析するため,付着器分化過程での核局在および紡錘体観察を行った。その結果,野生株では培養開 始4時間後,付着器形成に伴い紡錘体が出現し核分裂が行われるのに対し,cobub2破壊株では培養開始2時 間後の未発芽胞子において核分裂が行われ,2核となる胞子の割合が顕著に増加した。そこで,付着器分 化過程における細胞周期を検討するため,S期阻害剤およびM期阻害剤を用いて核分裂を観察した結果, 破壊株でのG1/S期の移行時期が,野生株と比較して約2時間早まることが認められた。以上より,ウリ類 炭疽病菌の付着器分化過程において,CoBUB2はG1期の維持,あるいはS期の適切な開始時期に関与して おり,M期の制御因子である出芽酵母のBUB2とは異なる機能を有する可能性が示唆された。

Spindle Position Checkpoint (SPOC) component in Saccharomyces cerevisiae is involved in proper cell cycle

progression during appressorium development in Colletotrichum orbiculare

Fumi Fukada¹⁾, Ayumu Sakaguchi²⁾, Yasuyuki Kubo¹⁾

(¹⁾Life and Environmental Sciences, Kyoto Prefectural Univ., ²⁾National Institute of Agrobiological S

O-19 (P-80)

イチゴ黒斑病菌の 1.0 Mb 染色体にコードされる AF 毒素生合成遺伝子クラスターの同定

<u>原歩美¹</u>,近藤日佳理¹,播本佳明¹,間瀬千晶¹,張祐介¹,山本幹博²,秋光和也³,柘植尚志¹ (¹名大 院・生命農,²岡山大・農,³香川大・農)

イチゴ黒斑病菌 NAF8 株の AF 毒素生合成遺伝子 (AFT) クラスターは, 1.0 Mb の conditionally dispensable 染色体にコードされている。先に,本染色体の塩基配列を決定し,両腕に対応する 2 つのコンティグ (F1 および F2) からそれぞれ 158 個, 127 個の遺伝子を同定した。なお, AFT 遺伝子群はコンティグ F2 の 392 kb 領域にクラスターとして存在し,この領域には 24 個の推定 AFT 遺伝子が 2~7 コピー分布する。これ ら 24 遺伝子のうち 17 個については,すでに AF 毒素生産における機能を同定した。今回,この領域にコ ードされる, AF 毒素生産に不可欠な転写制御因子 AftR によって制御される遺伝子の同定を試みた。1.0 Mb 染色体の全遺伝子について,野生株と AFTR サイレンシング株における転写レベルをリアルタイム RT-PCR 法によって比較解析した。その結果, AFTR サイレンシング株では,24 個の AFT 遺伝子すべての転写レベ ルが顕著に低下し,これら遺伝子が AftR によって正に制御されることが明らかとなった。さらに,遺伝 子破壊によって,機能未解析の 7 遺伝子について AF 毒素生合成における機能を解析した。その結果,7 遺伝子のうち 4 個が AF 毒素生産に不可欠であり,残り 3 個は毒素生産を抑制する遺伝子であることが明 らかとなった。

Identification of AF-toxin biosynthetic genes cluster encoded by the 1.0-Mb chromosome in the strawberry

pathotype of Alternaria alternata

<u>Ayumi Hara¹</u>, Hikari Kondou¹, Yoshiaki Harimoto¹, Chiaki Mase¹, Yusuke Cho¹, Mikihiro Yamamoto², Kazuya Akimitsu³. Takashi Tsuge¹

(¹Grad. Sch. Bioagric. Sci., Nagoya Univ., ²Fac. Agr., Okayama Univ., ³Dept. Agr., Kagawa

O-20

第2浸透圧センサー経路はトウモロコシごま葉枯病菌 (Cochliabolus heterostrophus) の感染器官である付着器の形成を制御する

泉津弘佑,北出雄生*,住田卓也*,湯谷智*,森田篤*,田中千尋*(滋賀県大·環境科学,*京大院農)

モデル生物である出芽酵母では MSB2 や SHO1 から構成される第 2 浸透圧センサー経路が知られて いる. この経路は高浸透圧ストレス時に MAPKK キナーゼ STE11 を介して MAP キナーゼ HOG1 を活 性化することで高浸透圧ストレス適応を制御している. 一方で、糸状菌類においては酵母のモデルと異 なり、STE11型 MAPKK キナーゼが HOG1型 MAP キナーゼの活性化に寄与しないことが示唆されてい る. 今回我々は,主要植物病原菌であるトウモロコシごま葉枯病菌 (*Cochliobolus heterostrophus*)を用 いて,第 2 浸透圧センサー経路に関与する因子群の遺伝子破壊および機能解析を行い,植物病原菌にお ける役割を調べた. STE11 および STE50 遺伝子の破壊株は、高浸透圧ストレスへの感受性は示さなか ったが、胞子形成、メラニン化、偽子嚢殻形成、および付着器の形成に著しい不全を示した. こうした 形質は全て HOG1型 MAP キナーゼ遺伝子の破壊株では認められず、CHK1型 MAP キナーゼの破壊株 において認められた. 第 2 浸透圧センサー経路の主要構成因子である MSB2 および SHO1 遺伝子の破 壊株は、高浸透圧ストレスへの感受性は一切示さなかったが、疎水表面 (ポリスチレン) における付着 器の形成に著しい不全を示した. 一方で、MSB2 および SHO1 の破壊株では正常なメラニン化や胞子形 成が認められた. 以上の結果から、トウモロコシごま葉枯病菌の第 2 浸透圧センサー経路は高浸透圧ス トレス適応ではなく、感染器官である付着器の形成を制御する上流因子として機能していることが示唆 された.

The secondary osmotic sensor pathway regulates appressorium formation in Cochliobolus heterostrophus.

*Kosuke Izumitsu, Yuki Kitade, Takuya Sumita, Satoshi Yutani, Atsushi Morita, Chihiro Tanaka

(Grad. School of Environmental Science, Shiga Prefecture Univ, * Grad. School of Agriculture, Kyoto Univ.)

- 34 -

P-1

イタコン酸を生産する Aspergillus oryzae の分子育種

<u>山田智士¹</u>, 倉地裕子², 朴龍洙³, 荒井基夫², 金政真² (¹中部大院・応生, ²中部大・環境生科, ³静 岡大・創科技院)

【目的】イタコン酸は2価のカルボン酸を持つ有機酸で、安全性が高いことから合成樹脂や接着剤などの 原料として幅広く利用されている。現在、イタコン酸は Aspergillus terreus により生産されているが、本菌 は同じ Aspergillus 属糸状菌である麹菌 A. oryzae などに比べ生育が遅く、常在菌とはいえヒト日和見感染 菌であるといった問題がある。A. oryzae は古来より醸造に利用されており、生育速度が A. terreus よりも 速いだけでなくヒトへの安全性が極めて高いことが知られている。本研究は、イタコン酸合成酵素である シスーアコニット酸デカルボキシラーゼをコードする CAD1 を A. oryzae に導入し、イタコン酸生産能を有 する A. oryzae の育種を目的とした。

【方法と結果】A. terreus 由来 CAD1 を大関(株)により開発された糸状菌用高発現ベクターpNENU2512 に挿入し, CAD1 高発現ベクターを構築した。本ベクターを niaD を選択マーカーとして A. oryzae に導入 し, CAD1 導入株を得た。液体培養して解析したところ、コントロール株ではイタコン酸の生産が認めら れなかったのに対し、CAD1 導入株ではイタコン酸生産が認められた。

Molecular breeding of Aspergillus oryzae for itaconic acid production

Satoshi Yamada¹, Yuko Kurachi², Enoch Yongsoo Park³, Motoo Arai², Shin Kanamasa²

(¹Grad. Sch. Biosci. Biotech., Univ. of Chubu; ²Dept. Envi. Biol., Univ. of Chubu; ³Grad. Sch. Sci. Technol., Univ. of Shizuoka)

P-2

アミダーゼ高生産麹菌の担体への固定化方法の研究

<u>鈴木晃</u>¹,下家拓馬¹,奥田拓真¹,柳原琢己¹,木村遵¹,佐野元昭¹、尾関健二¹,大箸信一¹,坪井宏和²,坊垣隆之²,岩井和也³,福永泰司³(¹金沢工大・ゲノム研,²大関・総研,³UCC・R&Dセンター)

【目的】これまでモデル飲料中のアクリルアミド(AA)を分解するために、アミダーゼ高生産麹菌を用いる菌体処理法が有効であることを報告した。また、麹菌を吸着させる担体として4mm角のヘチマを使用してきたが、ヘチマは環境に優しくメリットもあるが、準備に時間がかかるなどデメリットも多い。そこで、各種担体を用い麹菌菌体量の測定およびコーヒーのAA低減化を従来のヘチマ吸着菌体と比較し、担体の変更およびその担体での最適な菌体吸着条件の検討を行ったので報告する。

【方法・結果】麹菌は、アミダーゼ高生産麹菌(4コピー株)を用い、担体はセルロース担体(東レ社製) が最大の菌体量及び洗浄操作での菌体の脱落が少ないことが分かった。担体を事前に18個100mlの容器 に入れて滅菌し、YPD 培地入りの4コピー株の胞子懸濁液(1.5×10⁵/ml)、1mlを10回に分けて全体に撒 き、25℃・1日間静置培養を行なった。その後、50mlのYPD 液体培地を入れ、更に30℃・3日間・70rpm で振とう培養を行ない、その後菌体量、アミダーゼ活性の測定およびコーヒーのAA 低減化試験で良好な 結果が得られた。このとき、YPD 液体培地のpHを6.5から4に変えて培養を行なった結果、pH4の培地 において菌体量の増加が認められた。現在、従来のヘチマ吸着菌体と比較して、今回開発した方法などで のアミダーゼ遺伝子の発現量、アミダーゼ活性およびコーヒーのAA の低減化効率を検討している。

Study on the immobilization of the amidase producing Aspergillus oryzae with cellulosic support.

<u>Akira Suzuki</u>¹, Takuma Shitaya¹, Takuma Okuda¹, Takumi Yanagihara¹, Jyun Kimura¹, Mtoaki Sano¹, Kenji Ozeki¹, Shinichi Ohashi¹, Hirokazu Tsuboi², Takayuki Bogaki², Kazuya Iwai³, Taiji Fukunaga³ (¹KIT, ²Ozeki, ³UCC)

P-3

454 と Illumina の de novo アセンブリーによる糸状菌の新規 cDNA 解析

(ジナリス) 河合文隆、上村泰央、(東大院・農生科) 五十嵐圭日子, 堀 千明, 鮫島正浩,

次世代シーケンサーを用いたトランスクリプトーム解析は、参照ゲノム配列が存在する生物種において、 遺伝子発現量を解析する RNA-Seq と、参照ゲノム配列が存在しない生物種において、発現遺伝子配列を de novo アセンブリー解析により取得する新規 cDNA 解析の 2 種類に大別できる。前者においては、リードが 短いが、数の多い Illumina シーケンサーが、後者においては、比較的長いリードの 454 シーケンサーが 利用されることが多い。一般に、Illumina シーケンサーによる RNA-seq 解析においては、ゲノム配列が利 用できない非モデル生物の遺伝子発現解析を行うことができず、454 シーケンサーによる新規 cDNA 解析に おいては、アセンブリー解析の技術的限界から、精度の高い完全長 cDNA 配列を獲得することは困難であ った。

本研究では、454 シーケンサーにより得られたリードデータと Illumina シーケンサーによって得られ たリードデータを組み合わせることで、ゲノム配列を利用することなく、どれだけ完全な cDNA 配列が取 得できるかを検討したので、その結果について報告したい。解析には、ゲノム配列が既に決定されている Phanerochaete chrysosporium のトランスクリプトーム解析を行い、454 シーケンサーのリードデータと して約 58 万リード総塩基数 228 Mb、Illumina シーケンサーからのリードデータとして約 1.9 億リード総 塩基数 14 Gb の配列データを取得し、de novo アセンブリー解析を実施した。さらに、得られたコンティ グ配列を参照配列として、RNA-seq データをマッピング解析することで、ゲノム配列の利用できない生物 種における遺伝子発現量比較の可能性についても考察する。

De novo transcriptome assembly of Filamentous Fungi using 454 and Illumina sequencing data

<u>Fumitaka Kawai</u>¹, Yasuo Uemura¹, Kiyohiko Igarashi², Chiaki Hori², Masahiro Samejima², (¹Genaris, Inc., ²Dept. of Biomaterial and Science, Univ. of Tokyo)

P-4

バイオマス変換酵素探索ツールとしての糸状菌トランスクリプトーム

(東大院・農生科) 五十嵐圭日子, 堀 千明, 石黒真希, 鮫島正浩, (ジナリス) 上村泰央, 竹田 綾 (食総研) 金子 哲

セルロース分解性の糸状菌は、様々な分解酵素を菌体外に分泌することで植物細胞壁を分解する。その 際に生産される酵素群には、セルロース系バイオマスを高度利用するために必要な酵素が含まれるだけで なく、機能が未知ではあるが潜在的にセルロース系バイオマスの分解効率を高めるものなどが含まれるこ とから、全ゲノム配列情報やアノテーションして得られた推定アミノ酸配列情報をプロテオーム解析と組 み合わせることで、様々な情報を得ることが可能となる。

本研究では、担子菌 Flammulina velutipes (エノキタケ)および Phanerochaete chrysosporium を様々 なセルロース系バイオマスを炭素源として培養し、抽出された cDNA を第2世代シーケンサによって配列 解析するとともに、得られたトランスクリプトーム配列データの解析を試みた。エノキタケのトランスク リプトーム配列はデータベース化し、セルロース系バイオマスの変換に関わる酵素のプロテオーム解析に 用いた。その結果 19 種類の新規バイオマス変換酵素の同定に成功し、そのうちの 12 種類が糖関連酵素 (CAZyme) であることが明らかとなった。P. chrysosporium に関しては、トランスクリプトーム配列を用 いて、ゲノムアノテーションの改良を行った。その結果、米国エネルギー省ジョイントゲノム研究所 (JGI) によるアノテーションでは 10,048 と推定されていた遺伝子数が、本アノテーションでは 11,398 遺伝子に 増え、その中には JGI のアノテーションでは予測できていなかったセルラーゼ (PcCel45A) などの遺伝子 も予測されていた。さらに、アノテーションの精度が高くなったことで、イントロンの予測精度も向上し、 本菌のイントロン長がユニークな分布を示すことも明らかとなった。

Fungal Transcriptome as a Tool to Search for Biomass-Converting Enzymes

Kiyohiko Igarashi¹, Chiaki Hori¹, Masahiro Samejima¹, Yasuo Uemura², Aya K. Takeda², Satoshi Kaneko

(¹Dept. of Biomaterial and Science, Univ. of Tokyo, ²Genaris, Inc., ³National Food Research Institute)
P-5 (O-2)

麴菌必須遺伝子の解析のためのプロモーターシャットオフシステムの開発 <u>寺戸志保</u>^{1,2},島原明子¹,豊浦 利枝子²,岩下 和裕^{1,2} (¹広島大院・先端研,²酒総研)

麹菌の遺伝子機能の解析には、遺伝子の発現を ON/OFF 出来る事が必要で、これまで amyB プロモー ター等いくつかの誘導型プロモーターの開発が成されている。しかし、発現抑制時にも発現が見られるも のや、誘導、抑制時に細胞内代謝の大幅な変化が見られる等、遺伝子機能解析に使用しにくい点がある。 特にプロモーターシャットオフによる必須遺伝子の解析には、発現抑制時に転写がほぼ完全に抑えられる 必要があり、このようなプロモーターは開発されていない。そこでグルコース同様に解糖系により代謝さ れると考えられるソルビトールに着目し、解析を行った。また、 Aspergillus 属ではソルビトールを単一 の C 源として資化できるが、その代謝機構等についてはほとんど研究されていなかった。そこで、ソル ビトール誘導下での遺伝子発現につてマイクロアレイ解析を行い、誘導される遺伝子を抽出するとともに 機能解析を行うと共に、そのプロモーターについて発現制御に使用可能かどうか検討を行った。 まず、ソルビトールまたはガラクトースを誘導源として、グルコースを抑制条件としてマイクロアレイ解 析した。ガラクトースに比べソルビトールを用いた場合の方が遺伝子全体への発現変動が少なく、かつグ ルコース環境下で発現が検出されず、ソルビトール下で発現が有意に 10 倍以上増加した遺伝子が2 遺伝 子見つかった。そこで、プロモーターの下流に EGFP を連結したプラスミドを用いて、形質転換体を作 成した。この獲得した形質転換体をグルコースまたはソルビトール存在下で培養し蛍光と EGFP タンパ クを確認したところ、ソルビトール存在下でのみ EGFP が発現していることが確認できた。現在、ノー ザン解析を行うと共に、複数の環境下での発現誘導について解析を行っている。

The development of promoter shutoff system for function analysis of the essential genes in *Aspergillus oryzae*. Shiho Terado ^{1, 2}, Akiko Shimahara², Rieko Toyoura², Kazuhiro Iwashita ^{1,2}

(¹ AdSM,Hiroshima Univ 、²NRIB)

P-6

麹菌における Cre-loxP 選択マーカーリサイクリングシステムの改良

<u>張斯来</u>,江原直樹,水谷治¹⁾,田中瑞己,新谷尚弘,五味勝也(東北大院農,酒総研¹⁾)

麹菌は多数の二次代謝関連遺伝子を有しているものの、その多くは極めて僅かにしか発現していないため、二次代謝化合物生産のクリーンホストとしての利用が期待されている。しかし、麹菌は利用出来る選択マーカーが限られているため、二次代謝化合物の生合成マシナリー構成遺伝子を全て導入することが困難である。我々はこれまでに、変異型 *loxP*を用いた Cre/*loxP*システムによる多重遺伝子導入法の開発を行ってきた(1)。現在までに、*thiA*プロモーターによって Cre を細胞内で条件的に発現させ、ウラシル要求性マーカーを効率的にリサイクリングするシステムを構築している。しかし、ウラシル要求性株の選択に用いる 5-フルオロオロチン酸が高価である点や、*thiA*プロモーターによる Cre の発現抑制が完全ではない点が問題となっている。そこで、本研究ではこれらの問題点を解決可能な Cre/*loxP*システムの開発を目指すこととした。

リサイクリングに用いる選択マーカーとしてアデニン要求性マーカーを用いることとし、はじめに adeA 破壊株の取得を試みた。ptrA マーカーを形質転換マーカーとし、置換破壊法により adeA の破壊を 行った。取得した adeA 破壊株はアデニン要求性を示し、YPD 寒天培地上でコロニーが赤色を呈した。 このことから、コロニーの色のみで adeA 脱落株が選択可能であると考えられる。次に、adeA と Cre 発 現カセットの両者を変異型 loxP 配列で挟んだ断片を搭載したプラスミドの構築を行い、完成したプラス ミドを adeA 破壊株に導入し、adeA と Cre 発現カセットの同時脱落を試みているところである。 (1)江原直樹、水谷治、五味勝也 (2012) 生物工学会誌、90(6): 298-301

Improvement of the Cre-loxP selection marker recycling system in Aspergillus oryzae.

Silai Zhang, Naoki Ebara, Osamu Mizutani¹⁾, Mizuki Tanaka, TakahiroShintani, KatsuyaGomi

(Grad.Sch,Agric.Sci.,Tohoku Univ., NRIB¹⁾)

昆虫病原性糸状菌 Lecanicillium sp.における自律複製型ベクターを用いた形質転換 系の構築

石堂 圭一、木下 浩、井原 史雄¹、仁平 卓也 (阪大生物工学国際交流セ、¹農研機構・果樹研)

【目的】Lecanicillium 属糸状菌はアブラムシ等の害虫だけでなく、うどんこ病菌やサビ病菌等の植物病 原菌に効果を示すことから微生物農薬、土壌改良剤として用いられている。本菌の病原性発現、寄生機構 を分子生物学的に解明するため、我々はこれまでに Lecanicillium sp. においてウリジン要求性変異株を宿 主、また pyrG 遺伝子をマーカー遺伝子とする宿主-ベクター系を構築した。今回我々は、効率よく遺伝 子の機能解析を行うために、自律複製型プラスミドベクターを用いた形質転換系の構築を目指した。

【方法および結果】pAUR316のARSであるAMA1 配列,及び Lecanicillium sp.のpyrG 遺伝子を制限 酵素により切り出し,pUC19 にクローニングしたプラスミド pLSPYRG+AMA1 を作成した。AMA1 配列 を持たない組込み型ベクターとの形質転換効率の比較を行ったところ,pLSPYRG+AMA1 は3倍以上の形 質転換効率を示した。pLSPYRG+AMA1 の内部一カ所を切断する Hind IIIを用いてサザン解析を行ったと ころ,得られた形質転換体8株中5株で,プラスミド型に由来する13.2kbpのバンドが検出されたことか ら,pLSPYRG+AMA1 は Lecanicillium sp.内で自律複製型ベクターとして機能していることが示された。

Construction of transformation system using autonomously replicating vector in *Lecanicillium* sp.

<u>Kei-ichi Ishido</u>, Hiroshi Kinoshita, Fumio Ihara¹, Takuya Nihira (ICBiotech, Osaka Univ., ¹Nat. Inst. Fruit Tree Sci.)

P-8

糸状菌によるフミン酸の分解と還元

<u>中澤奈美</u>,老沼研一,高谷直樹 (筑波大院・生命環境)

土壌に豊富に含まれるフミン酸は、芳香環を多く含む難分解性の高分子化合物であり、自然界では白色 腐朽菌等によるフミン酸分解が地球上の炭素循環の維持に大きく寄与しているとされている。また、一部 の鉄還元細菌が、有機物の酸化によって生じた電子を不溶性の酸化鉄へ伝達する際に、細胞外に存在する フミン酸を媒体として利用することが示されている。一方、糸状菌によるフミン酸の分解や電子伝達につ いての多くは未解明であり、本研究では、これについて解析した。

研究室保有の土壌分離菌を含む糸状菌(188種)を、フミン酸を添加した Potato dextrose 固体培地を用いて培養したところ、26種が褐色のフミン酸を強く脱色した。これらのうち少なくとも15種については、液体培地中でも有意なフミン酸脱色活性が確認された。また、その培養液を、ゲルろ過法を用いて分析したところ、脱色活性を示した菌の多くがフミン酸の分子量分布を変化させていた。一方、糸状菌によるフミン酸およびフミン酸のモデル化合物である anthraquinone-2,6-disulfate (AQDS)への電子伝達活性を、電子供与体としてグルコースを加えた嫌気条件下で、不溶性の酸化鉄(Fe₂O₃)の還元活性を指標として測定した。その結果、Aspergillus nidulans を含む複数の菌株が、フミンや AQDS の存在下でのみ Fe₂O₃の顕著な還元活性を示し、フミン酸への細胞外電子伝達が行われることが示された。また、呼吸鎖阻害剤は本活性を著しく低下させたことから、フミン酸は呼吸鎖電子伝達鎖を介して還元されると考えられた。これらの結果は、土壌環境中に棲息する幅広い糸状菌種が、フミン酸を分解および還元することによって土壌生態や炭素循環の恒常性の維持に重要である可能性を示す点で、これまでの常識を覆すものであろう。

Analysis of humic acid degradation and reduction by filamentous fungi

Nami Nakazawa, Ken-Ichi Oinuma, Naoki Takaya

(Grad. School of Life and Environmental Sciences, Univ. of Tsukuba)

— 38 —

P-9 (O-3)

Aspergillus nidulans のガラクトフラナン生合成に関与する遺伝子の機能解析 <u>元松遥¹</u>, 畠山信太郎¹, 浴野圭輔¹, 二神泰基², 竹川薫², 後藤正利², 野村善幸¹, 岡拓二¹ (¹崇城大 学・生物生命・応微工、²九大・院・農)

Aspergillus 属の細胞壁構成糖鎖には、 α -グルカン、 β -グルカン、キチン、ガラクトマンナン(GM)が含まれる。この GM は、 α 1,2-テトラマンノースのユニットが α 1,6 結合した主鎖に、 β 1,5-ガラクトフラノースの側鎖であるガラクトフラナン(GF)が β 1,6 結合する構造である。この GM のうち GF の生合成に関する知見は乏しい。本研究室で逆遺伝学的手法により見出された Δ gfsA 株では、GF を認識する抗体(EB-A2)によるシグナルが消失しており、細胞壁中のガラクトース量は親株の 60%に減少していた。また、 Δ gfsA 株では菌糸形態の異常や分生子形成能の低下が認められた。gfsA 遺伝子は子嚢菌門のうちチャワンタケ亜門に分布しており、GF 構造を細胞壁中に持つ菌類には全て gfsA 遺伝子が存在していた。GfsA に関する機能解析を進めるために染色体上の gfsA 遺伝子に 3xFLAG タグを挿入した。まず、*in vitro*における GF 合成酵素の活性測定を行った。反応系に、GfsA-3xFLAG、糖供与体、 Δ gfsA 由来のマンノプロテインを加え、37℃で保温した。次に、SDS-PAGE に供与し、EB-A2 により解析をおこなった。反応時間とともにシグナル強度が増加し、熱失活させたものや糖供与体を除去したものではシグナルが認められなかったことから、GfsA-3xFLAG が GF 合成活性を有することが明らかとなった。また、ゴルジ体に局在する GlfB、小胞体に局在する BipA をマーカーとしてショ糖密度勾配遠心分離法により局在解析を行ったところ、GfsA-3xFLAG はゴルジ体に局在することが示された。以上のことから GfsA が GF 合成酵素であり、GF はゴルジ体で合成されることが示

Functional analysis of gene involved in galactofuranan biosynthesis in Aspergillus nidulans.

<u>Haruka Motomatsu¹</u>, Shintaro Hatakeyama¹,Keisuke Ekino¹,Taiki Futagami²,Kaoru Takegawa²,Masatoshi Goto²,Yoshiyuki Nomura¹,Takuji Oka¹ (¹ Univ. of Sojo,²Univ. of Kyusyu)

P-10

Aspergillus nidulans における ugeB 遺伝子の機能解析

<u>田中麻左人¹</u>、浴野圭輔¹、二神泰基²、竹川薫²、後藤正利²、野村善幸¹、岡拓二¹(¹崇城大学・生物生 命・応微工、²九大・院・農)

Aspergillus nidulans のゲノム上には UDP-グルコース(Glc)/UDP-ガラクトース(Gal) 4-エピメラーゼ (UGE)をコードしている出芽酵母の Gal10p と類似したアミノ酸配列を有する遺伝子 (ugeA および ugeB) が 2 つ存在する。これら 2 つのタンパク質は、出芽酵母の Gal10p とそれぞれ 58.7%および 37.8%の相同 性を有していた。ugeA は 1116 塩基 371 アミノ酸からなり、ugeB は 1287 塩基 428 アミノ酸からなるタン パク質 (UgeA および UgeB)をコードしており、互いにアミノ酸レベルで 38.8%の相同性を保持していた。 これらのうち UgeA に関しては UGE 活性を持つことが既に報告されている(El-Ganiny AM, 2010)。しか しながら、UgeB の酵素機能については明らかにされていない。そこで、UgeB の機能解析について解析を 進めた。

出芽酵母の *Agal10*株において *ugeB* 遺伝子を高発現させ機能相補性試験を行ったところ *Agal10*株の Gal 資化性がわずかであるが回復することが明らかになった。また、発現させた UgeB を用いて *in vitro* におけ る糖ヌクレオチドの変換活性を測定したところ,わずかな UGE 活性の他に,強い UDP-*N*-アセチルグルコ サミン(GlcNAc)/UDP-*N*-アセチルガラクトサミン(GalNAc) 4-エピメラーゼ活性を有することが明らかにな った。次に *AugeB* 株を作製し,親株とのコロニー形態の比較を行った。炭素源を Glc, Gal, Glc+Gal, GlcNAc および GalNAc,培養温度を 30℃, 37℃および 42℃と変化させて培養を行ったが顕著な差異は認められな かった。UDP-GalNAc は,糸状菌細胞壁構成糖鎖のうちガラクトサミノガラクタンの合成に必要であるこ とが予想される。よって、ガラクトサミノガラクタンは,糸状菌の正常な細胞壁形成には必要でないこと が示唆された。

Functional analysis of ugeB gene in Aspergillus nidulans

<u>Masato Tanaka¹</u>, Ekino Keisuke¹, Taki Hutagami², Kaoru Takekawa², Masatosi Gotou², Yosiyuki Nomura¹, Oka Takuji¹(¹Univ of Sojo, ²Univ of Kyusyu)

Aspergillus fumigatus のガラクトフラノース転移酵素遺伝子の探索

<u>畠山信太郎¹</u>,浴野圭輔¹,二神泰基²,竹川薫²,後藤正利²,野村善幸¹,岡拓二¹(¹崇城大,²九大)

Aspergillus fumigatus は日和見感染症を引き起こす病原菌である。A. fumigatus のタンパク質に結合する N-型糖鎖及び O-型糖鎖の非還元末端にはガラクトフラノース(Galf)糖鎖が付加されている。これら Galf 糖鎖 は、細菌類や線虫等に存在が認められているが、高等生物には存在しないことが知られている。近年 A. fumigatus において UDP-Galp から UDP-Galf を合成する glfA 遺伝子が同定され, ΔglfA 株において糖鎖構 造の非還元末端に Galf が付加しないことが報告されている。また、AglfA株では親株に比べ病原性の低下 が報告されている。以上のことから UDP-Galf が Galf 糖鎖の糖供与体であり, Galf 糖鎖が病原性に関与 していることが示唆されている。しかし、UDP-Galfを糖供与体とした N-型糖鎖及び O-型糖鎖の生合成に 関与する Galf 転移酵素遺伝子については明らかにされておらず、研究進捗の妨げとなっている。そこで、 A. fumigatus の Galf 転移酵素遺伝子の同定を逆遺伝学的手法により試みた。初めに、ゲノム情報より 15 種類の Galf 転移酵素候補遺伝子を選抜し、フュージョン PCR 法を用いて候補遺伝子上流、ピリチアミン 耐性マーカーである ptrA 遺伝子、候補遺伝子下流の各断片を挟み込むような形で遺伝子破壊用 DNA 断片 を作製した。次に、作製した遺伝子破壊用 DNA 断片をプロトプラスト-PEG 法を用いて親株に導入し、13 種類の遺伝子破壊株を構築した。取得した遺伝子破壊株のコロニー表現型を観察したところ、顕著な差異 は認められなかった。さらに、各遺伝子破壊株より細胞壁タンパク質を抽出し、HPLC により N-型糖鎖及 び 0-型糖鎖の構造を解析した。その結果,いくつかの遺伝子破壊株で親株との糖鎖構造の差異が確認さ れた。

Exploration of genes that encode a galactofuranosyltransferase in Aspergillus fumigatus

<u>Shintaro Hatakeyama¹</u>, Keisuke Ekino¹, Taiki Futagami², Kaoru Takekawa², Masatoshi Goto², Yoshiyuki Nomura¹, Takuji Oka¹(¹ Univ of Sojo, ² Univ of Kyushu)

P-12

糸状菌 Aspergillus nidulans のα-1,3-グルカン合成酵素遺伝子変異株の表現型解析

吉見啓¹, 稲葉梓², 一杉昌玄², 阿部敬悦^{1,2} (¹東北大・未来研, ²東北大院農・生物産業創成)

我々は、Aspergillus nidulans の細胞壁構築シグナル伝達経路について、MAP キナーゼ MpkA 経路を中 心に解析を進めてきた。本菌の MpkA 経路は、出芽酵母とは大きく異なり、β-1,3-グルカンおよびキチン 合成酵素遺伝子群の転写は制御しておらず、出芽酵母には存在しない α -1,3-グルカン合成酵素 (AGS) 遺伝子 agsA, agsB の転写制御に特化していることを明らかにしている。近年、ヒト病原性真菌や植物病原 菌において、 α -1,3-グルカン (AG) が感染過程で重要な役割を担うことが明らかになり、糸状菌における AG の重要性が認識されつつある。これらの背景から、我々は A. nidulans において種々の AGS 遺伝子変異 株 (agsA 破壊株, agsB 破壊株, agsAagsB 二重破壊株、コンディショナル agsB 株)を造成し、AGS 遺伝 子の機能を解析してきた。これまでに、本菌における AG の合成には主として agsB が機能していること、 細胞壁中の AG が欠損すると Congo red への感受性が上昇することを明らかにしている。

今回, A. nidulans における AG の役割をより深く理解するため, AGS 遺伝子変異株について更なる表現 型解析を行ったので、その結果について報告する。まず、AGS 遺伝子変異株について、 β -1,3-グルカナー ゼおよびキチナーゼ活性を有する Lyzing enzymes に対する感受性を評価したところ、AG 欠損株の細胞壁 は Lyzing enzymes によって容易に分解されることが明らかになった。野生株の細胞壁が α -1,3-グルカナー ゼ処理によって同様に分解されたことから、細胞壁 AG は細胞壁分解酵素に対する感受性に関与すると考 えられた。さらに、AGS 遺伝子変異株の最小培地や富栄養培地など種々の培養条件における培養性状を比 較したので、その結果についても考察した。(本研究は生研センターの支援を受けた。)

The phenotypic analysis of the α -1,3-glucan synthase gene mutants in Aspergillus nidulans

Akira Yoshimi¹, Azusa Inaba², Masahiro Hitosugi², Keietsu Abe^{1,2}

(¹NICHe, Tohoku Univ., ²Grad. Sch. Agric. Sci., Tohoku, Univ.)

糸状菌 Aspergillus nidulans の α - グルカン合成酵素遺伝子破壊株における Congo red 感受性と菌糸への Congo red 吸着性との関係

<u>稲葉梓¹</u>, 吉見啓², 阿部敬悦^{1,2} (¹東北大院農・生物産業創成,²東北大・未来研)

我々は Aspergillus nidulans の細胞壁構築シグナル伝達経路について MAP キナーゼカスケード MpkA 経路を中心に解析を進めてきた。これまでに、本菌の MpkA 経路は α -1,3-グルカン合成酵素 (AGS) 遺 伝子 agsA, agsB の転写制御に特化していることを明らかにしている。また、本菌における 2 種の AGS 遺伝子の機能を解析するため、これら 2 遺伝子の破壊株を用いた表現型解析を進めてきた。昨年の本大会において、agsB 破壊株および agsAagsB 破壊株 (二重破壊株)の取得に成功したことを報告している。 細胞壁の生化学的解析の結果、これらの AGS 遺伝子破壊株の細胞壁からは、 α -1,3-グルカン (AG) が 消失しており、本菌の AG 合成には主として agsB が機能していることが明らかになっている。さらに、これら破壊株は Congo red (CR) に対して高い感受性を示すことも明らかになった。

今回,細胞壁中の AG が欠損した株における CR 感受性上昇の原因を究明するため,菌体に対する CR の吸着性を評価した。まず,液体培養菌体を CR 溶液に入れ,共振盪することで菌体に CR を吸着 させた。その後,菌体を除去し、上清の CR 残量から菌体への CR 吸着量を算出した。その結果,AG 欠 損株では、菌体への CR 吸着量が増加していた。また、細胞壁構成多糖に対する CR の吸着性を評価し たところ、AG と比較して β -グルカンやキチンは CR に対する吸着性が高いことが明らかになった。こ れらのことから、細胞壁から AG が消失すると CR に親和性の高い β -グルカンやキチンが露出し、菌体 への CR 吸着量が増大することによって CR 感受性が上昇することが強く示唆された(本研究は生研セ ンターの支援を受けた)。

The relationship between the congo red-sensitivity and the adsorption of congo red to the hyphae in *Aspergillus nidulans* alpha-1,3-glucan synthase gene disruptants.

Azusa Inaba¹, Akira Yoshimi², Keietsu Abe^{1,2}(¹Grad. Sch. Agric. Sci., ²Tohoku, Univ., NICHe., Tohoku Univ.)

P-14

Aspergillus nidulans におけるプロテインキナーゼ Cによる細胞壁合成酵素遺伝子群の転写制御についての解析

<u>片山琢也</u>,太田明徳¹,堀内裕之(東大院・農生科・応生工,¹東農大・バイオ)

Saccharomyces cerevisiae のプロテインキナーゼ C (PKC) である Pkc1p は細胞壁の完全性維持に関わる シグナル伝達経路 (cell wall integrity (CWI) 経路) において中心的な役割を担う。Aspergillus nidulans に おいて CWI 経路の構成因子のオルソログが保存されていることなどから, A. nidulans にも CWI 経路が存 在し, A. nidulans の PKC である PkcA も CWI 経路で機能すると考えられている。そこで、 PkcA の細胞 壁合成酵素遺伝子群の転写制御への関与について検討した。これまでに当研究室で作製された pkcA 温度 感受性株 (pkcA-ts 株) に加え、新たに活性化型 PkcA (PkcA (R429A)) を alcA プロモーター制御下で生 産できる株 (R429A 株) を作製し、PkcA 失活条件下、PkcA 活性化条件下における細胞壁合成酵素遺伝子 能の転写解析を行った。pkcA-ts 株を用いた解析では、非制限温度 (30°C) で培養した菌体を制限温度 (42°C) に移してさらに培養した場合、野生型株では α -1,3-グルカン合成酵素遺伝子 agsB、キチン合成酵素遺伝子 chsD、csmA、csmB の転写が誘導されたのに対し、pkcA 温度感受性株ではこれらの遺伝子の転写誘導がほ とんど起こらなかった。また、R429A 株を用いた解析では、37°C、PkcA (R429A) 発現誘導条件で 16 時 間培養した場合, agsB、 β -1,3-グルカン合成酵素遺伝子 fksA、キチン合成酵素遺伝子 chsB, chsC, chsD, csmA, csmB の転写が誘導された。さらに、37°C、PkcA (R429A) 発現訪割条件で16 時 間培養した場合、agsB、 β -1,3-グルカン合成酵素遺伝子 fksA、キチン合成酵素遺伝子 chsB、chsC, chsD, csmA, csmB の転写が誘導条件に移して1時間培養した場合, agsB, chsC, chsD, csmA, csmB の転 写が誘導された。これらのことから、PkcA がグルカン合成、キチン合成に関与する細胞壁合成酵素遺伝 子の転写制御に関与することが示唆された。

Transcriptional regulation of cell wall related genes by PkcA in Aspergillus nidulans

<u>Takuya Katayama</u>, Akinori Ohta¹, and Hiroyuki Horiuchi (Dept. of Biotechnol., Univ. of Tokyo, ¹Dept. of Biosci., Tokyo Univ. of Agric.)

- 41 -

アカパンカビ OS-2 MAP キナーゼによる細胞壁局在タンパク質の制御

<u>加賀谷奏</u>,山下和宏,高橋正和,亀井誠之,一石昭彦,藤村真 (東洋大院・生命科学)

アカパンカビの浸透圧シグナル伝達(OS)経路は、浸透圧応答と殺菌剤フルジオキソニル感受性に重要 な役割を果たしている。これまでに我々は、OS-2 MAP キナーゼが発現制御する遺伝子群を特定してきて おり、グリセロール合成系遺伝子(gcy-3)や糖新生鍵酵素遺伝子(fbp-1)だけでなく、カタラーゼ遺伝 子(cat-1)や clock-controlled遺伝子(ccg-1, ccg-13)など、様々な機能をもつ遺伝子が制御されているこ とを明らかにしてきた。また、アレイ解析により約650遺伝子が制御される可能性を示してきたが、アレ イ解析結果の精度や制御される遺伝子群の検証は必ずしも十分に行われていない。そこで、本研究では、 アレイデータの検証とともに、制御遺伝子からOS経路の未知の機能の探索を行った。その結果、アレイ 解析でOS-2により制御される約50遺伝子についてリアルタイム定量PCR法を用いて検証したところ、 一部の例外を除き、野生株で顕著なフルジオキソニル誘導が認められ、その誘導がos-2変異株で消失・低 下した。このことから、アレイ選抜の遺伝子群は精度の高いリストであると考えられた。さらに、顕著に 誘導される遺伝子群の中には、non-anchored cell wall protein である ncw-3や ncw-6, GPI-anchored protein で ある gel-1、細胞壁に局在すると推定される phiA や O-結合型糖タンパク質遺伝子などが含まれていた。ま た、os-2 変異株は、高浸透圧下で細胞壁のない肥大化細胞となることが知られており、OS経路は細胞壁 の維持やその調節に重要な役割をもつと考えられる。これらのフルジオキソニル誘導遺伝子について、糸 状菌間の共通性について検証するため、赤かび病菌(Fusarium graminearum)との比較解析を行っている。

OS-2 MAP kinase regulates various cell wall proteins in N. crassa

Sou Kagaya, Kazuhiro Yamashita, Masakazu Takahashi, Masayuki Kamei, Akihiko Ichiishi, Makoto Fujimura (Grad.Sch.of Life Sci., Toyo Univ)

P-16

麹菌における MAP キナーゼ AoFus3 とその相互作用タンパク質の機能解析

<u> 矢萩 大貴</u>,丸山 潤一, Özgür Bayram¹, Oliver Valerius¹, Gerhard H. Braus¹, 北本 勝ひこ (東大院・農生 科・応生工,¹ゲッティンゲン大学)

【目的】酵母 Saccharomyces cerevisiae の MAP キナーゼのひとつ Fus3p は有性生殖において, 接合フェロ モン応答と細胞融合に関与する。糸状菌の Fus3p ホモログは有性生殖に関与することに加え, 二次代謝, 病原性等において重要な働きを有する。以前, 我々の研究で麹菌 Aspergillus oryzae の Fus3p ホモログであ る AoFus3 が菌糸先端と隔壁孔に局在し, その遺伝子破壊株は隣接する細胞に溶菌が伝播する割合が上昇 することを見出したことから, AoFus3 が隔壁孔を介した細胞間連絡に関係することが示唆された。その 機構の解析を目的として, 我々は TAP (Tandem Affinity Purification)タグを用いた精製により, AoFus3 と相 互作用するタンパク質の候補を 2 つ(AO090003000834, AO090012000718)同定した¹⁾。これらのタンパク質 は菌糸先端と隔壁孔に局在し, その遺伝子破壊株では隣接する細胞に溶菌が伝播する割合が上昇した¹⁾。

【方法・結果】AoFus3 とこれと相互作用する 2 つのタンパク質に関して 2 重遺伝子破壊株を取得し,溶 菌が伝播する割合をそれぞれの単独破壊株と比較した。その結果, 2 重破壊株は Aofus3 遺伝子破壊株とほ ぼ同等の割合を示した。一方で, AoFus3 と相互作用するタンパク質の単独遺伝子破壊株において溶菌が 伝播する割合は野生型株よりは上昇するものの,前述の破壊株と比較してその上昇する割合は低いことが わかった。また, AoFus3 非存在下での細胞内局在の観察から, AoFus3 が相互作用する 2 つのタンパク質 の局在に影響を与えている可能性が示唆され,反対に AoFus3 の局在は両タンパク質の有無による影響を 受けなかった。以上の結果より, AoFus3 がその相互作用するタンパク質の上流で働く可能性が示唆され た。現在, AoFus3 が相互作用するタンパク質自体に及ぼすリン酸化などの作用を解析するとともに,こ れらのタンパク質が溶菌後にも隔壁孔に局在することから,溶菌後の再生長(regrowth)における役割を解析 している。

1) 矢萩ら、平成 24 年度日本農芸化学会 大会講演要旨集 p. 2292

Functional analysis of AoFus3 MAP kinase-interacting proteins in Aspergillus oryzae

<u>Daiki YAHAGI</u>, Jun-ichi MARUYAMA, Özgür BAYRAM¹, Oliver VALERIUS¹, Gerhard H. BRAUS¹, Katsuhiko KITAMOTO (Dept. of Biotechnol.,The Univ. of Tokyo, ¹Georg-August-Universit

— 42 —

麹菌 A. oryzae における溶菌に対する細胞修復と再生長の機構の解析

川畑絢平,佐伯圭,丸山潤一,北本勝ひこ(東大院・農生科・応生工)

【目的】A. oryzae が属するチャワンタケ亜門(真正子嚢菌綱)の糸状菌において、菌糸は隔壁によって 多くの細胞に区切られている。隣接する細胞は隔壁孔を介して細胞間連絡を行うが、この性質はある細胞 が溶菌した際に隣接する細胞に溶菌が伝播する危険を伴う。我々は以前、A. oryzae において寒天培地上の コロニーに水を添加して溶菌を誘導する低浸透圧ショック実験を確立し、Woronin body と呼ばれるオルガ ネラが溶菌の伝播を防ぐことを明らかにした¹⁾。しかし、この方法では細胞のダメージが大きいため再生 長の効率が悪く、さらに溶菌前後の変化を経時的に追跡することが困難である。また、これまでに糸状菌 全般に溶菌時の細胞修復と再生長の分子機構はあまりわかっていない。本研究では、細胞に過大な負担を かけずに溶菌し、再生長まで観察できる新たな実験系を確立し、その分子機構の解明を試みた。

【方法・結果】まず、寒天培地上に生育させた菌糸をパルスレーザーにより切断し、溶菌した細胞に隣接する細胞を観察した。その結果、隣接する細胞の約8割が新たな菌糸先端を形成し、再生長することがわかった。ストレスに応答して隔壁孔に蓄積する AoSO タンパク質²⁰をコードする遺伝子の破壊株では、再生長を行う菌糸の割合が野生株に比べて低下した。また、AoSO の局在変化を調べたところ、菌糸切断後から数秒で隔壁孔に AoSO が凝集する様子が観察された。以上の結果から、AoSO は溶菌後の初期段階で細胞修復に働くことで再生長に関わっているという可能性が考えられた。現在、細胞修復と再生長に関与すると考えられる他の因子についてさらなる解析を進めている。

1) Maruyama et al. (2005) Biochem Biophys Res Commun Vol. 331: 1081-8.

2) Maruyama et al. (2010) Biochem Biophys Res Commun Vol. 391: 868-73.

Investigation of molecular mechanisms mediating cell repair and regrowth upon hyphal wounding in A.

oryzae

Junpei KAWABATA, Kei SAEKI, Jun-ichi MARUYAMA, Katsuhiko KITAMOTO

(Dept. of Biotechnol., Univ. of Tokyo)

P-18

麹菌におけるエンドサイトーシス関連 Aip タンパク質の機能解析

松尾賢人, 樋口裕次郎, 菊間隆志, 有岡 学, 北本勝ひこ (東大院・農生科・応生工)

エンドサイトーシス部位に局在する AoAbp1 を bait とした yeast two-hybrid スクリーニングにより見出さ れたタンパク質 AipA~D (AoAbp1 interacting protein) のうち, AipC と AipD の EGFP 融合タンパク質は菌 糸先端において AoAbp1 と共局在しており,エンドサイトーシスにおいて何らかの機能を有していること が示唆された。しかし,これまでの解析では *aipC*, *aipD* の破壊株ともに通常条件下での生育や FM4-64 の取り込みに異常は見られなかった¹⁾。そこで,これらのタンパク質のエンドサイトーシスにおける機能 を解明することを目的としてさらなる解析を行うとともに, AipB についても機能解析を行った。

今回新たに、細胞膜上の MCC (membrane compartment of Can1p) の構成因子であるアルギニンパーミア ーゼ AoCan1 に着目し、エンドサイトーシスの解析を行った。その結果, *aipC* 破壊株, *aipD* 破壊株のそれ ぞれでエンドサイトーシスに遅延が生じることが明らかとなった。出芽酵母とは異なり、AoCan1-EGFP は主に菌糸基部の細胞膜上に偏って局在していたことから、高度に極性化した細胞において菌糸の先端と 基部で異なるエンドサイトーシスの機構が存在することが示唆された。*aipB*は class I myosin 重鎖をコー ドしており、他の糸状菌においても高度に保存されている。*aipB* 破壊株は得られなかっため、*thiA* プロモ ーター制御で *aipB* の発現を抑制したところ、コロニー周縁部の形態異常および分生子の発芽率の低下が 観察された。また、EGFP-AipB は菌糸先端や細胞膜上において AoAbp1 と共局在しており、AipB が myosin I としてエンドサイトーシスに機能するという A. *nidulans* での知見が支持された。

1) 松尾ら,第11回糸状菌分子生物学コンファレンス要旨集

Functional analysis of Aip proteins related to endocytosis in Aspergillus oryzae

Kento MATSUO, Yujiro HIGUCHI, Takashi KIKUMA, Manabu ARIOKA, Katsuhiko KITAMOTO

(Dept. of Biotechnol., Univ. of Tokyo)

- 43 -

麹菌グルコース抑制関連遺伝子 creD の MalP のエンドサイトーシスへの関与

<u>平本 哲也</u>,田中 瑞己,新谷 尚弘,五味 勝也 (東北大院・農・生物産業創成)

我々は、麹菌のデンプン分解酵素生産において、誘導基質であるマルトースの細胞内取込み系が重要で あり、その取込みを担うマルトースパーミアーゼ(MalP)遺伝子はグルコースにより転写レベルで抑制を受 けることをすでに明らかにしている。一方、出芽酵母で報告されているように、タンパク質レベルでエン ドサイトーシス依存的に分解を受ける機構が存在するかを調べるため、GFP-MalP 融合タンパク質を MalP プロモーター制御下で発現させたところ、マルトース誘導条件下では主として GFP-MalP は細胞膜に局在 が観察された。これにグルコースを添加すると速やかに細胞膜からの GFP 蛍光の消失と液胞への移行が 認められた。そこで、本研究ではグルコース存在下における MalP のエンドサイトーシス依存的な液胞へ の移行の確認と、グルコース抑制に関わる遺伝子変異株における MalP のエンドサイトーシスへの影響に ついて解析を行った。

エンドサイトーシスはアクチンの重合阻害により抑制を受けるため、アクチン重合阻害剤である Latrunculin Bを用いて GFP-MalP の液胞への移行に対する影響を解析した。その結果、Latrunculin B 処理 を行ったものではグルコース添加後も細胞膜上の GFP 蛍光が消失しないことが明らかとなり、GFP-MalP の細胞膜上から液胞への移行はエンドサイトーシス依存的な機構によるものであることが示された。次に グルコース抑制転写因子(CreA)のユビキチン化に関与する CreD の遺伝子破壊株を作製し、GFP-MalP のエ ンドサイトーシスに及ぼす影響を解析した。*creD* 破壊株においてはマルトース誘導後、グルコースを添加 しても GFP-MalP の液胞への移行が認められなかったことから、CreD は MalP のエンドサイトーシス依存 的な取込みに関与する制御因子である可能性が示唆された。

Involvement of a carbon catabolite repression-related gene, *creD*, in endocytosis of MalP in Aspergillus

oryzae.

Tetsuya Hiramoto, Mizuki Tanaka, Takahiro Shintani, Katsuya Gomi

(Div.Biosci.Biotechnol.Future Bioind., Grad.Sch.Agric.Sci., Tohoku Univ.)

P-20

Aspergillus nidulans におけるパキシリン様タンパク質 PxlA の機能解析

<u>二神泰基</u>¹,梶原康博²,高下秀春²,大森俊郎², Michelle Momany³,後藤正利¹ (¹九大院・農,²三和 酒類,³ジョージア大)

パキシリンはシグナル伝達経路の構成因子の足場や細胞間接着因子として機能するタンパク質の一種で、真核生物において広く保存されている。例えば、出芽酵母 Saccharomyces cerevisiae には1つのパキシリン様タンパク質(Pxl1)が存在し、極性成長部位の決定と維持に関与することが明らかにされている。 一方、糸状菌 Aspergillus nidulans のゲノムには2つのパキシリン様タンパク質が見出されており、そのうち PxlA は、出芽酵母の Pxl1 とは異なるクレードに分類される。そこで、PxlA は糸状菌特有の形態形成やシグナル伝達に重要な役割をもつと推定し、その機能を解明することを目的とした。

まず、pxlA遺伝子破壊株($\Delta pxlA$)の表現型を観察した。YG 培地における $\Delta pxlA$ のコロニー成長速度 は、野生株の 86%に低下した。また、メトレおよびフィアライドに異常が観察され、分生子形成能が顕著 に低下(7%)した。次に、GFP 融合タンパク質の発現による局在解析の結果、細胞質に局在することが 示唆された。また、 $\Delta pxlA$ はタンパク質合成阻害剤であるハイグロマイシン B に対して野生株と同等の感 受性を示したが、細胞壁生合成系を阻害する Calcofluor white, Congo red、およびミカファンギンに対して 高感受性を示した。さらに、 $\Delta pxlA$ の細胞壁構成多糖成分のうち、GlcNAc 含量が野生株の 60%に低下し た。以上の結果より、A. nidulans において、PxlA は分生子の形成および細胞壁生合成に関与すると考察し た。

Functional analysis of paxillin like protein PxIA in Aspergillus nidulans

Taiki Futagami¹, Yasuhiro Kajiwara², Hideharu Takashita², Toshiro Omori², Michelle Momany³, Masatoshi Goto¹

(¹Kyushu Univ., ²Sanwa Shurui Co. Ltd., ³Univ. of Georgia)

— 44 —

糸状菌 Aspergillus nidulans における出芽酵母 Saccharomyces cerevisiae LAS17 オルソ ログ AN11104 の機能解析

<u>星浩臣</u>,前田隼見,太田明徳¹,堀内裕之(東大院・農生科・応生工,¹東農大・バイオ)

Aspergillus nidulans において、クラスVキチン合成酵素 CsmA は、N 末端側にミオシンと相同性を有す るドメイン(myosin motor-like domain; MMD)を持つ特徴的なタンパク質であり、菌糸先端及び隔壁形成 部位に局在して菌糸型の形態形成に重要な役割を果たす。一方、その細胞内における局在化及び機能の制 御機構については未解明な点が多く、CsmA と相互作用してその機能に関与する因子の同定と解析が望ま れる。今回、酵母ツーハイブリッドスクリーニングにより、CsmA と相互作用するタンパク質の候補とし て AN11104を同定し、その機能解析を行った。AN11104 は Saccharomyces cerevisiae においてクラスリン介 在型のエンドサイトーシスに必須の機能を有するタンパク質をコードする LAS17 のオルソログである。ま ず RACE 解析により、翻訳開始点及び終止点、イントロンの位置がゲノムデータベースで予想されたもの と一致することを確認した。次に AN11104 破壊株を作製したところ、野生型株と比較して生育の著しい遅 延、菌糸先端の形態異常及び後方での異常な多分岐等が観察された。生育の著しい遅延から、AN11104 破 壊株を用いた AN11104 の詳細な機能解析は困難であると考えられたため、チアミン存在下で遺伝子発現 抑制の可能な thiF プロモーターにより AN11104 の発現制御可能な株を作製したところ、発現抑制条件下 では破壊株と類似の表現型を示した。また AN11104 の予想された C 末端に EGFP を繋いだ AN11104-EGFP は菌糸先端やや後方の形質膜上に局在が観察された。現在、CsmA と AN11104 との細胞内局在比較、及び in vivo における両者の物理的相互作用について検討中である。

Functional analysis of a Saccharomyces cerevisiae LAS17 ortholog in Aspergillus nidulans

<u>Hiroomi Hoshi</u>, Hayami Maeda, Akinori Ohta¹, and Hiroyuki Horiuchi (Dept. of Biotechnol., Univ. of Tokyo, ¹Dept. Biosci., Tokyo Univ. of Agric.)

P-22

麹菌 A. oryzae における選択的オートファジー関連遺伝子の機能解析

<u>田所隆之</u>,菊間隆志,北本勝ひこ (東大院・農生科・応生工)

【目的】オートファジーは真核生物における細胞内分解機構であり、細胞質成分やオルガネラを液胞に 輸送し分解する。オートファジーは非選択的および選択的オートファジーに分類され、選択的オートファ ジーは特定タンパク質やオルガネラを特異的に認識し、液胞へ輸送することが酵母などで知られている。 しかし、A. oryzae など糸状菌でその存在は確認されていない。酵母 Saccharomyces cerevisiae の Atgl1 は選 択的に認識した基質の pre-autophagosomal structure (PAS) への輸送に機能することが報告されている。前 回そのホモログである AoAtgl1 の遺伝子破壊株を作製したところ、非選択的オートファジー欠損株に特徴 的な気中菌糸および分生子形成の阻害は見られなかった。また、選択的オートファジーの標的基質である と考えられるタンパク質やオルガネラを標識し、局在観察を行ったところ、AoAtgl1 はペルオキシソーム の液胞への取込みに関与していることが示唆された。本研究では、A. oryzae における AoAtgl1 の選択的オ ートファジーへの関与をより明らかにすることを目的とし、AoAtgl1 の局在解析やマーカータンパク質の 更なる観察を行った。

【方法・結果】AoAtg11-EGFP とオートファジーのマーカーである mDsRed-AoAtg8 を共発現し局在観 察を行ったところ、ドット状に共局在を示し、AoAtg11-EGFP は PAS に局在することが明らかとなった。 また、Aoatg11 破壊株でペルオキシソームの液胞への輸送を定量的に解析することにより、野生株と統計 的に有意な差があることが確認された。さらに、S. cerevisiae においてオートファジーにより優先的に液 胞へ輸送されることが知られている Ald6 のホモログ AoAld6 の局在解析を行ったところ、Aoatg11 破壊株 においても液胞への輸送に影響が見られなかった。この結果より、AoAtg11 は AoAld6 の選択的認識に関 与していないと考えられる。現在、Yeast two-hybrid 法を用いて AoAtg11 結合タンパク質の解析を進めて いる。

Functional analysis of genes related to selective autophagy in Aspergillus oryzae

Takayuki Tadokoro, Takashi Kikuma, Katsuhiko Kitamoto (Dept. of Biotechnol., Univ. of Tokyo)

- 45 -

P-23 (O-5)

Characterization of Stress Granules in Aspergillus oryzae

Hsiang-Ting HUANG, Jun-ichi MARUYAMA, Katsuhiko KITAMOTO (Dept. of Biotechnol., The Univ. of Tokyo)

An important part of the cellular responses to stress or environmental stimuli is the modulation of mRNA translation and degradation. Recently, evidences from yeasts to mammalian cells have indicated that one aspect of this process involving the remodeling of translating mRNAs into non-translating mRNPs (mRNA-protein particles) that accumulate in cytoplasmic foci referred to as stress granules. We previously showed that AoSO protein, a homolog of the *Neurospora crassa* SO, accumulates at septal pore in response to stresses¹). The stress-inducible behavior makes a possible link between stress granules and AoSO. In the present study, the localization analysis showed that AoSO-EGFP colocalized with the stress granules visualized by AoPab1-mDsRed in response to heat shock. Deletion of *Aoso* altered the localization of the stress granules at the hyphal tip. Furthermore, because the ability to form stress granules seems to correlate with the survival of cells exposed to stress, growth of the disruptant of *Aopub1* gene, encoding one of the major components of stress granules, was being tested under various stress conditions. Finally, the stress granules were often observed in the vicinity of vacuoles at the hyphal tip, and AoPab1-mDsRed colocalized with EGFP-AoAtg8 in response to heat shock, suggesting that autophagy may participate in the cellular stress response.

1) Maruyama et al. Biochem Biophys Res Commun 391: 868-873, 2010.

P-24

黄麹菌の分生子特異的遺伝子の機能解析

<u>辻井雅</u>,森田寛人,前田浩,山形洋平,竹内道雄 (東農工大院・応生化)

【背景と目的】黄麹菌の分生子及び発芽分生子の EST 解析の結果、 331-25 遺伝子から転写される mRNA は分生子にのみ見出され、 528 の EST のうち 43 回という高頻度で読まれた。本研究は 331-25 遺伝子から転写され、分生子特異的に存在する mRNA の機能を明らかにすることを目的として解析を行なった。

【方法及び結果】3⁻ RACE 法、5⁻ RACE 法、シークエンス解析により、転写開始点と転写終結点、 スプライシング部位を明らかにした。 RT-PCR により、分生子、発芽分生子、菌糸及び分生子着生直前 における 331-25 遺伝子から転写される RNA の存在量について比較したところ、ゲノム解析により予測 された 331-25 遺伝子からの RNA は分生子に特異的に存在しており、分生子を 2 時間液体培養した発 芽分生子には僅かにしか存在しておらず、6 時間液体培養した菌糸には存在していないことを明らかに した。さらに、長期固体培養によって得た褐色の分生子、短期固体培養によって得た黄緑色の分生子にお いても 331-25 遺伝子からの RNA の存在量について比較したところ、331-25 遺伝子からの RNA は成 熟分生子において存在していないことを明らかにした。また、adapter-primer を用いた RT-PCR により、 331-25 遺伝子からの RNA の二種類の RNA が分生子に存在していることを明らかにした。さらに、 破壊株の作製を行ったところ、固体培養と液体培養における表現形の観察では、ホスト株と破壊株におい て発芽率、表現形に差は認められなかった。

Identification of conidia specific mRNA in Adpergillus oryzae

Masaru Tsujii, Hiroto Morita, Hiroshi maeda, Yohei Yamagata, Michio Takeuchi

Dept. of Applied Biological Science, Tokyo Univ. of Agriculture and Technology

— 46 —

菌類の adenosine deaminase-related growth factor 類似遺伝子の機能解析

西川良平1,藤田将幸1,吉田真澄1,関屋秀一1,稲富 聡2,田口悟朗1,下坂 誠1

(¹信州大・繊維・応生系,²ホクトきのこ総合研)

昆虫などで報告されている adenosine deaminase-related growth factor (ADGF) は, adenosine deaminase (ADA) 活性中心配列を保持し, ADA 活性を介して細胞増殖や分化を制御する新規の増殖因子である。 ADGF 類似遺伝子は菌類に広く存在しているが,その機能は不明である。これまでにエノキタケ細胞より 子実体特異的に発現する ADGF 類似遺伝子 (*Fv-ada*) を単離し, *Pichia* 酵母で発現させた組換えタンパク 質が ADA 活性を有することを確認した。本研究では,エノキタケ *Fv-ada* 遺伝子の機能解析を目指すとと もに,他の菌類の ADGF 類似遺伝子について調査した。

当研究室で開発した RNA 干渉(RNAi)および高発現用バイナリーベクターを用いて,エノキタケ Fv-ada 遺伝子の発現抑制株と高発現株を作出した。発現抑制株では,抑制の程度に応じて複核菌糸体の生育速度 が遅延したことから,本遺伝子産物が菌糸体の生育に関与することが明らかとなった。

Aspergillus nidulans および Neurospora crassa のゲノム中には、それぞれ2個の ADGF 様遺伝子が存在 した。各遺伝子の cDNA を RT-PCR により獲得し塩基配列を確認したところ、両株ともに1個の遺伝子の みが ADA 活性中心配列を完全に保存していた。現在、これらの遺伝子の機能について解析中である。

Characterization of fungal genes coding for a putative adenosine deaminase-related growth factor

<u>Ryohei Nishikawa</u>¹, Masayuki Fujita¹, Masumi Yoshida¹, Syuichi Sekiya¹, Satoshi Inatomi², Goro Taguchi¹, Makoto Shimosaka¹

(¹Division Appl. Biol., Fac. Tex. Sci. Tech., Shinshu Univ., ²Mushroom Lab. Hokuto Co.)

P-26

ウスヒラタケの子実体分化異常に関わる遺伝子の探索

<u>嶋田有宇</u>,伊藤幹成,奥田康仁,松本晃幸 (鳥取大・農)

きのこ類の子実体形成に関わる分子レベルでのメカニズムは関与する遺伝子を含め十分には解明されていない。このため、子実体形成過程の突然変異体は子実体形成のメカニズムに関する有益な知見を提供する材料となる。本研究室ではウスヒラタケ (Pleurotus pulmonarius) TMIC-30058 株由来の単胞子分離株を用いた自殖株の中に、正常な子実体分化が認められない突然変異体を偶然見い出した。調査の結果、本変異は単一の劣性遺伝子によるものであることが推定され、さらに AFLP (Amplified fragment length polymorphism) マーカーとの連鎖解析によりその遺伝子から 0 cM の近傍に座上する AFLP マーカー (CTTT91) を取得した¹⁾。

本研究では、この近傍マーカーCTTT91の配列情報に基づき、ウスヒラタケのゲノムライブラリーおよびドラフトシーケンスデータを利用して CTTT91座上位置の前後 140 kb にわたる周辺配列を推定した。この領域について遺伝子予測プログラム Augustus により座上遺伝子を推定し、野生型と変異型子実体より調製した RNA を用いてそれらの遺伝子について発現解析を行った。その結果、9遺伝子で野生型と変異型間に発現差が認められた。これらの遺伝子はいずれも塩基配列レベルで顕著な多型が認められ、このうち6遺伝子についてはアミノ酸レベルにおいても異なった。以上の結果より、これら6遺伝子のうちどれかが本変異に関わっている可能性が大きいと考えられる。今後、これらを標的とした遺伝子破壊を行い、表現型への影響を調査することで本変異の原因遺伝子を特定する予定である。

¹⁾ 伊藤ら, 2010 年度日本菌学会第 54 回大会講演要旨集, p63

Search for gene causes a defect in fruiting body differentiation in *Pleurotus pulmonarius*.

Yu Shimada, Mikinari Ito, Yasuhito Okuda, Teruyuki Matsumoto (Tottori, Univ. of Agri)

— 47 —

P-27 Discovering fundamental mushroom developmental genes. Arend F. van Peer (IBRC), Yuichi Sakamoto (IBRC).

Mushrooms are important sources of food, medicinal compounds, for industrial applications, waste recycling and environmental health. However, cultivation of most mushrooms is difficult or yet impossible. A major obstacle for improvement of mushroom cultivation technology is the lack of knowledge on molecular genetic mechanisms that underlie mushroom development. Available information is highly scattered, describing specific, unrelated studies in model mushrooms and more recently including individual studies on major cultivated mushrooms.

Despite the high variations in shape, color, composition, substrate and triggers for fruiting induction, mushroom life cycles follow a general course. Within the developmental stages of the mushroom, especially the formation of hyphal knots and primordia seem highly similar between species. We decided to 'access' the general developmental pathway through interspecies comparison of primordium specific gene expression patterns, including model as well as major cultivated species. Promising universal, primordium specific genes will be studied in detail in the model organisms *Coprinopsis cinerea* and *Schizophyllum commune* by means of gene deletion, fusion to fluorescent markers and quantitative PCR. Once confirmed to play a role in mushroom development, these genes will serve as foundation for compilation of a general mushroom development model in two directions; stages preceding and stages following primordium formation.

At the moment of writing, superSAGE datasets are being assembled and many mushroom species are still under cultivation. We just started comparison of our first four datasets (dikaryotic mycelium versus primordia) in *C. cinerea* and *Polyporus brumalis*. Considering the effectiveness of other expression-based studies for identification of stage specific developmental genes in mushrooms, we expect to reveal several universal genes to start our model in the near future.

Keywords: superSAGE, transcriptome, mushroom, basidiomycete, bioinformatics, developmental genetics.

P-28

担子菌ウシグソヒトヨタケにおけるセプチンの発現およびインテラクトーム解析 <u>塩谷 達弘</u>,中村 宏江,石井 律好,高橋 直樹,村口元 (秋田県大院・生物資源)

担子菌ウシグソヒトヨタケの柄伸長欠損突然変異体の原因遺伝子の1つである eln8 は出芽酵母セプチン Cdc3 様タンパク質(Cc.Cdc3)をコードしていることが判明した。セプチンとは酵母からヒトまで保存され た GTP 結合タンパク質ファミリーであり、最初に出芽酵母の細胞質分裂異常突然変異体の原因遺伝子と して同定され、動物細胞においては神経組織での発現や、細胞膜での小胞融合との関連が知られている。 そこで Cc.Cdc3 が柄細胞の伸長にどのように関わっているのかを明らかにするために、Cc.Cdc3-EGFP を ウシグソヒトヨタケで発現させたところ、柄細胞では細胞長軸に沿って繊維状に存在し、栄養菌糸先端で は小球状に存在していた。本菌には、セプチンが 5 種類 (Cc.Cdc3, Cc.Cdc10, Cc.Cdc11a, Cc.Cdc11b, Cc.Cdc12)存在し、栄養菌糸、原基、傘、柄、eln8 柄における各セプチン遺伝子の発現を定量 PCR によ り解析したところ、柄で各セプチンの発現が増加していたが、eln8 柄において、Cc.Cdc10 の発現が野生 型の柄に比べて著しく低下していることが分かった。また、セプチンの多様な局在様式は、他のタンパク 質がセプチンと相互作用して制御されていると考えられるため、Yeast two hybrid 法を用いて Cc.Cdc3 と相 互作用するタンパク質を柄細胞 cDNA から探索したところ、Cc.Cdc10 および Cc.Cdc12 がほぼ同数で検出 できた。さらに、セプチン以外のタンパク質として、ATP-dependent DNA helicase、SUMO 化 E2 酵素であ る Ubc9、細胞壁を緩める expansin、GMF (Glia maturation factor) を発現している酵母をそれぞれ1クロー ン検出できた。さらに本菌の5種類のセプチン同士の相互作用を、同手法によって調べたところ、Cc.Cdc3 と Cc.Cdc3、Cc.Cdc3 と Cc.Cdc10、Cc.Cdc3 と Cc.Cdc12、Cc.Cdc12 と Cc.Cdc12 の間で相互作用が見られ た。

Septin gene expression and interactome analyses in Coprinopsis cinerea.

Tatsuhiro Shioya, Hiroe Nakamura, Noriyoshi Ishii, Naoki Takahashi, Hajime Muraguchi

(Grad. Sch. of Bioresource Sci., Akita Prefectural Univ.)

P-29 (O-7)

麹菌が産生する hydrophobin RolA と固体表面間の相互作用機構解析

田邊弘毅¹,<u>田中拓未¹</u>,大類景子¹,上原健二¹,高橋徹^{2,3},冨樫貴成⁴,有田稔彦⁴,阿部敬悦^{1,3} (¹東北 大院・生物産業創成,²酒総研・基盤,³東北大・未来研,⁴東北大・多元研)

麹菌の産生する界面活性蛋白質 hydrophobin RolA は生分解性ポリエステル PBSA に吸着し, PBSA 分解酵素 CutL1 による PBSA 分解を促進する。一方,様々な固体表面と hydrophobin 間の相互作用機構やその kinetics は不明である。これまでに、1. RolA の Leu137, Leu142 が PBSA への結合に重要、2. pH4-10 での PBSA への RolA の親和性は pH4 で最大、3. pH4-10 における PBSA 微粒子のゼータ電位は中性で負,酸 性で 0 になる結果を得た。以上の結果と、RolA の pI=5~6 という結果から、RolA の PBSA への吸着には、 両者の "疎水的相互作用"が正に、"負電荷の静電反発"が負に働く可能性が推察された。本報告は、様々 な固体表面への RolA の吸着様式の解析を目的とした。 異なる化学的性質を付与した表面への RolA の吸着を、pH7 の条件で QCM により評価した。疎水度が異 なる表面に対する RolA の親和性は、表面の疎水度と正の相関を示した。正・負電荷表面に対する親和性 は変わらず、負電荷表面で最大結合量が半減した。従って、固体表面の負電荷が最大結合量に対し負に働 く可能性が示唆された。RolA は両親媒性であるため、固体表面の電荷により吸着様式が異なる可能性を 推察した。また RolA は pH4 で固体表面に高い親和性を示し、RolA 濃度上昇に伴う急激な吸着量の増加 と rodlet 状重合構造形成が確認された。現在、電荷・極性を持つ表面に対し、pH の異なる条件下での親 和性解析を行っている。

Analysis of the interaction between Aspergillus oryzae hydrophobin RolA and solid surfaces

Hiroki Tanabe¹, <u>Takumi Tanaka</u>¹, Keiko Orui¹, Kenji Uehara¹, Toru Takahashi^{2,3}, Takanari Togashi⁴, Toshihiko Arita⁴, Keietsu Abe^{1,3} (¹ Grad. Sch. Agric. Sci., Tohoku Univ., ² NRIB., ³ NICHe., Tohoku Univ., ⁴ IMRAM., Tohoku Univ.)

P-30

麹菌 hydrophobin RolA 多重変異体と cutinase CutL1 間の相互作用解析

<u>對馬裕誠</u>, 村垣 公英¹, 上原 健二¹, 高橋 徹^{2,3}, 山形 洋平^{2,4}, 阿部 敬悦^{1,2} (¹東北大院農・生物産業創成,²東北大・未来研,³酒類研・基盤,⁴東京農工大院農・応生化)

hydrophobin は糸状菌に広く分布する両親媒性の分泌蛋白質で、糸状菌の菌糸表面に局在する。A. oryzae を生分解性ポリエステルである polybutylene succinate-co-adipate(PBSA) を唯一の炭素源として培養すると、 hydrophobin RolA と PBSA 分解酵素である cutinase CutL1 を共発現する。PBSA に吸着した RolA は CutL1 と相互作用することで PBSA に CutL1 を濃縮し、PBSA 分解を促進する。RolA の固液界面への酵素濃縮機 能は hydrophobin の新たな性質である[1]。

これ迄の研究で、RolAとCutL1の相互作用には、RolA側ではHis32、Lys34が、CutL1側ではGlu31、Asp142、 Asp171が重要であり、イオン結合の関与を見出した[2]。しかし、RolA-H32SK34S二重変異体は野生型RolA と比較してCutL1に対する親和性が大幅に低下したが、親和性は残っていた。そこで本研究ではRolA二 重変異体に残存するCutL1に対する相互作用部位の解明を目的とした。相互作用部位と推定されるRolA-N 末端近傍の正電荷アミノ酸をさらに置換したRolA三重変異体を作製した。またRolA二重変異体を第一 級アミン修飾試薬で処理し、正電荷アミノ酸修飾RolA二重変異体を調製した。本報告では、QCMによる RolA三重変異体および化学修飾RolA二重変異体とCutL1との分子間相互作用解析について議論する。

[1]Takahashi et al., Mol Microbiol. 57: 1780-1798 (2005)

[2]村垣ら, 日本農芸化学会 2011 年度大会要旨集 p164

Analysis of the interaction between Aspergillus oryzae hydrophobin RolA and cutinase CutL1

<u>Yusei Tsushima</u>, Kimihide Muragaki, Kenji Uehara, toru Takahashi, Youhei Yamagata, Keietsu Abe (¹Grad. Sch. Agric. Sci., Tohoku Univ., ² NICHe., Tohoku Univ., ³ NRIB., ⁴Tokyo Univ. of Agric. and Technol.,)

- 49 -

麹菌 Aspergillus oryzae の機能性ペプチド融合ハイドロフォービン(HypA)の生産 と吸着

<u>堂前圭佑</u>,加瀬明日香,中島春紫(明治大・農・農化)

Hydrophobin (ハイドロフォービン) は糸状菌・担子菌の空気中に露出した細胞表層に普遍的に存在す る両親媒性の低分子量タンパク質である。単量体として細胞外に分泌された後、細胞表層で疎水性領域を 外側に向けて自己集合して強固な単層を形成することにより、気中菌糸や胞子・分生子に撥水性を与える。 一方、Hydrophobin は各種の基材の表面に吸着する性質を有し、Hydrophobin のコーティングにより、基材 の疎水性度が大きく変化することが報告されている。

清酒・醤油・味噌の製造に用いられる麹菌(*Aspergillus oryzae*)から Hydrophobin をコードすると考えられる遺伝子(*hypA* $\sim D$)を単離している。このうち固体培養時には *hypA* 遺伝子が最も多く発現し、コードされる HypA タンパク質は主として分生子に局在することを観察している。

HypA タンパク質の物質表面への吸着性について解析する目的で、麹菌を宿主として単量体の HypA および重金属吸着ペプチドを結合した機能性ペプチド融合 HypA を生産し、親水性および疎水性の各種基材への吸着性と機能性の付与について検討を行なった。*enoA* プロモーター制御下で液体培養により HypA および機能性 HypA を生産し、液体クロマトグラフィーにより精製した。各々の水溶液を各種基材上に滴下して乾燥することにより吸着させた。その結果、HypA および機能性 HypA は特に疎水性の基材表面に強く吸着することが観察された。

Expression and adsorption of functional peptide fusion hydrophobin (HypA) of Aspergillus oryzae

Keisuke Domae, Asuka Kase, Harushi Nakajima

(Dept. of Agricultural Chemistry, Univ. of Meiji)

P-32

Aspergillus oryzae のハイドロフォービン群の機能および局在性の解析

山川結, 石田千絵, 早川芙佑華, 水野佑香, 中島春紫 (明治大・農・農化)

ハイドロフォービン(hydrophobin)は、空気中に菌糸を伸長させる糸状菌・担子菌類にみられる細胞表 層タンパク質である。低分子量(70~150a.a.)の両親媒性タンパク質であり、菌体外に分泌された後、菌 糸や分生子の表層に自己集合して単層を形成し、撥水性の付与や疎水性基材表面などへの吸着に関与する ことが知られている。一般に、1つの菌株は互いに相同性の低いハイドロフォービン遺伝子を複数有して いるが、その使い分けについてはほとんど解明されていない。

本研究室では麹菌 Aspergillus oryzae に注目し、ハイドロフォービンをコードすると推定される遺伝子を 4 つ単離し (hypA,B,C,D), hypA,B,C については発現を確認している。これまで、hypA,B,C について単独、 二重および三重破壊株を作製し、 HypA は主として分生子に、HypB は菌糸に局在し、HypC は通常の条 件下では発現量が少ないことを観察している。さらに、hypA 遺伝子は分生子形成期に転写量が増加する が、hypB 遺伝子は菌糸の伸長期に転写され、分生子形成期には転写量が減少することを見出している。 hypA 遺伝子または hypB 遺伝子の欠失によるコロニーの撥水性および細胞表層微細構造への影響は、他方 の遺伝子により相補されないことからも、それぞれ独立して機能していると考えられる。そこで、HypA と HypB の局在性と発現の関連を明らかにする目的で、hypB 遺伝子を hypA プロモーター、hypA 遺伝子を hypB プロモーターにより発現させ、その下流に蛍光タンパク質 eGFP を融合して、それぞれ hypA,hypB 二 重破壊株に導入した株を作製した。蛍光顕微鏡観察により、ハイドロフォービンの局在性はプロモーター が支配することを示唆する結果が得られている。

Characterization and localization of hydrophobins in Aspergillus oryzae

Yui Yamakawa, Chie Ishida, Fuyuka Hayakawa, Yuka Mizuno, Harushi Nakajima

(Dept. of Agricultural Chemistry, Univ. of Meiji)

味噌用麹菌 A. oryzae KBN630 株における酸性ホスファターゼ遺伝子多重破壊株の 作出

<u>安田(吉野)庄子</u>,長谷川 摂,小野奈津子,伊賀 佳美¹,白石 洋平¹,和久 豊¹,杉本 達哉², 楠本 憲 -³,北本 則行(あいち産科技総セ・食工技セ,¹ ㈱ビオック,²ナカモ㈱,³ 食総研)

【目的】核酸系調味料を添加した調味味噌は、味噌中の麹菌ホスファターゼ(Aph)による旨味成分の分 解防止のため、高温の加熱失活処理が不可欠である。しかし、高温加熱により味噌の品質が低下するため、 Aph低生産麹菌を利用した新規な省エネルギー型味噌製造技術の開発が求められている。我々はこれまで に麹菌ゲノム情報から推定した aph 遺伝子候補 13 個の遺伝子破壊株を作出し、豆麹における Aph 活性を 測定した。その結果、 / aphC 株、 / aphA 株および / aphE 株の Aph 活性が低下した。そこで、 Aph 活性 のより低下した株を取得するために、 aphC、 aphA および aphE 遺伝子の二重・三重破壊株の作製を試み た。

【方法・結果】pyrG 遺伝子をマーカーとして作製した aphC 遺伝子削除用ベクターpDelaphC を用いて A. oryzae KBN630-17K3 株を形質転換し、5-FOA・ウリジン含有ツァペック寒天培地を用いて aphC 遺伝子削 除株を取得した。次に aphA 遺伝子削除用ベクターpDelaphA を用いて aphC 遺伝子削除株を形質転換し、 aphC · aphA 遺伝子二重削除株を取得した。さらに aphE 遺伝子破壊用ベクターpDisaphE を用いて aphC · aphA 遺伝子二重削除株を形質転換し、 $aphC \cdot aphA \cdot aphE$ 遺伝子の三重破壊株を取得した。破壊株の Aph 活性を測定した結果、豆麹では $\bigtriangleup aphC$ 株が最も低下し(親株の約 4%)、米麹では $\bigtriangleup aphC \bigtriangleup aphA$ 株が最も 低下した(親株の約 24%)。本研究は「新たな農林水産政策を推進する実用技術開発事業」の一環として 実施した。

Multiple disruption of acid phosphatase (Aph) genes in the miso koji mold, A. oryzae KBN630

<u>Shoko YOSHINO-YASUDA</u>, Osamu HASEGAWA, Natsuko ONO, Yoshimi IGA¹, Yohei SHIRAISHI¹, Yutaka WAGU¹, Tatsuya SUGIMOTO², Ken-Ichi KUSUMOTO³, Noriyuki KITAMOTO (Food Res. Center, ACIST, ¹ Bio'c CO.,LTD, ²NAKAMO CO.,LTD, ³Nat'l Food Res. Inst.)

P-34

Aspergillus aculeatus 由来糖化アミノ酸オキシダーゼホモログ遺伝子の取得と発現 <u>宮武はる香</u>,谷修治,炭谷順一,川口剛司 (阪府大院・生環科)

糖化アミノ酸オキシダーゼ(FAOD)は、糖化アミノ酸を酸化的に加水分解し、H₂O₂を生成する酵素であり、糖尿病の指標となる糖化タンパク量の測定に利用可能である。当研究室にてゲノム情報が明らかとなった糸状菌 Aspergillus aculeatus は FAOD ホモログ遺伝子を 5 つ持つことが判明した。そこで、ホモログ遺伝子 fao1~5 を大腸菌で発現させ、発現産物の基質特異性について明らかにすることを目的とした。

ホモログ遺伝子 fao1~5 について,発現プラスミドや発現条件を検討することで,全て可溶性タンパク として発現させることに成功した。発現産物の基質特異性について,反応性が期待される糖化アミノ酸

(N^{e} -fructosyl N^{α} -Z-lysine, fructosyl valine), L-proline, D-proline, L-hydroxy proline, sarcosine, saccharopine を対象に調べたところ, FAO2 は pipecolinic acid, L-proline, D-proline, FAO3 は N^{e} -fructosyl N^{α} -Z-lysine, FAO5 は N^{e} -fructosyl N^{α} -Z-lysine, fructosyl valine に反応することが明らかとなった。FAO1 と FAO4 につ

いては、調べた限りではどのような基質に反応するか判明しなかった。

現在, FAO3 と FAO5 について, 基質認識に関与すると推定されるアミノ酸に変異を導入し, 基質特 異性の変化について調べているところである。

Expression of fructosyl amino acid oxidase homolog genes from Aspergillus aculeatus

Haruka Miyatake, Shuji Tani, Jun-ichi Sumitani, Takashi Kawaguchi

(Grad. Sch. Life & Env. Sci., Osaka Pref. Univ.)

— 51 —

Aspergillus aculeatus 由来分泌型 β-glucosidase の反応特性

竹谷俊亮,谷修治,炭谷順一,川口剛司 (阪府大院・生環科)

Aspergillus aculeatus は、単糖生成力に優れたセルラーゼ剤を生産する。この特徴は、本菌のβ-glucosidase1 (BGL1) が、セロオリゴ糖に対する比活性が高く、糖転移活性が低いことに起因していることが明らかに されているが、その他の内在のβ-glucosidase に関する知見は得られていない。本研究では、A. aculeatus の ゲノムにコードされている7種の推定分泌型β-glucosidase (BGLA, B, C, D, E, I, J と称す) を A. oryzae を 宿主として発現し、精製した酵素の諸性質について解析、比較を行った。BGL1, BGLB, BGLC は比活性で laminaribiose (β-1,3) > gentiobiose (β-1,6) > cellobiose (β-1,4) となる基質特異性を示した。しかしながら、 BGLA は cellobiose にはまったく活性を示さず、gentiobiose に高い分解活性を示し、GH family 3 に属する酵 素ではユニークな性質を持つ BGL であった。また、p-nitrophenyl-β-D-glucopyranoside (pNPG) に対しては 分解活性を持つため、配糖体をより認識する BGL であることも示唆された。BGL1 の立体構造が糸状菌 の GH family 3 で初めて解明されたため、BGL1 を基に BGLA の立体構造をモデリングした。BGL1の +1 サブサイトは芳香族アミノ酸によってスタッキングされているのに対して、BGLA では上記の芳香族アミ ノ酸がなく +1 サブサイトが自由度の高い構造となっていた。+1 サブサイトの自由度の高さが pNPG の ような配糖体の受け入れやすさに寄与すると推測された。gentiobiose を分解し、cellobiose を分解できない 原因に関しては予測された構造を基に部位特異的変異を加えることで解析を進めている。

The hydrolytic property of extracellular β -glucosidases from Aspergillus aculeatus

Shunsuke Taketani, Shuji Tani, Jun-ichi Sumitani, Takashi Kawaguchi (Grad. Sch. Life & Env, Sci., Osaka Pref. Univ)

P-36 GH3 β-グルコシダーゼがβ-フラクトフラノシダーゼ様活性を持つ <u>片山貴之</u>, 谷修治, 炭谷順一, 川口剛司 (阪府大院・生環科)

【背景・目的】*Aspergillus aculeatus* 由来 β -グルコシダーゼ1 (BGL1)は, Glycosyl Hydrolase famiry 3 (GH3) に 属し、セロオリゴ糖を非還元末端側からグルコース単位で加水分解する酵素である。GH3 には BGL の他 に、キシラン1,4- β -キシロシダーゼ、グルカン1,3- β -グルコシダーゼなどが属しており、その一次構造は類 似している。一方、 β -フラクトフラノシダーゼ (β -FFase) は、GH32, 68, 100 に属し、フルクトース残基を認 識してスクロースの加水分解を触媒する酵素である。GH3 と GH32, 68, 100 の酵素は、いずれも一次構造 の類似性は低く、GH3 の酵素が β -FFase 活性を持つという報告も無い。しかし、本研究において、GH3 の BGL1 が β -FFase 様活性を持つことが見出されたので、詳細に検討を加えた。

【方法・結果】BGL1 と様々な二糖を一晩反応させた後、TLC によって解析したところ、スクロースを用いた場合に、転移反応産物及び単糖と思われる位置に新たなスポットが検出された。また、HPAEC によって解析したところ、生成する単糖はグルコースであることが判明したため、転移反応産物はスクロースにフルクトースが付加したものと考えられた。そこで、スクロースに対するカイネティクスを解析したところ、Km=11.36 mM、kcat=0.05/s であり、転移反応効率は、スクロースに対して 36.2% (mol/mol) であった。現在、この転移反応産物を精製し、NMR による構造解析を行っている。

β -Fructofranosidase activity of the GH3 β -glucosidase from Aspergillus aculeatus

<u>Takayuki Katayama</u>, Shuji Tani, Jun-ichi Sumitani, Takashi Kawaguchi (Grad. Sch. Life & Env. Sci., Osaka Pref. Univ)

Aueobasidium pullulans 由来 α - L - アラビノフラノシダーゼの酵母 Pichia pastoris に おける高発現と酵素化学的性質

<u>東田知洋</u>,太田一良 (宮崎大農・応生科)

【目的】真菌 A. pullulans ATCC 20524 株から既に GH family 51 に属する α -L-アラビノフラノシダーゼ遺 伝子 *abfB*をクローニングした。本報は, A. pullulans ATCC 20524 株の本酵素を大量生産するために,メタノール資化酵母 P. pastoris での発現と分泌を検討し,酵素化学的諸性質を明らかにすることを目的とした。 【方法・結果】Oatspelt 由来キシランを炭素源として培養した A. pullulans ATCC 20524 株から全 RNA を抽 出し, cDNA を合成した。その cDNA を鋳型として *abfB* 領域を PCR で増幅して,ベクターに挿入後 P. pastoris に導入した。*abfB* 遺伝子のシグナルペプチドを含む全 ORF (2,097 bp)を分泌シグナル配列を含まない pPIC3.5 に挿入して作製した株を pABF115 由来株, *abfB* 遺伝子の成熟酵素領域を酵母 α 型接合因子の分泌シグナルを含む pPIC9 に挿入して作製した株を pABF116 由来株とした。30℃で 120 時間,液体振とう培養した結果, A. pullulans ATCC 20524 株が菌体外に 0.043 U / ml の酵素活性を示したことに対し,pABF115 由来株が 8.4 U / ml, pABF116 由来株が 4.7 U / ml と高い酵素活性を示した。次に,より酵素活性の高い pABF115 由来株の液体培養上清から,ゲル濾過クロマトグラフィーにより本酵素を電気泳動的に単一に精製した。精製酵素は分子量が約 116 kDa であり, *N*-glycosidase 処理で N 結合型糖鎖を除去することで分子量が約 70 kDa に減少した。また,最適 pH は 4.5,最適温度は 75℃であった。本研究は文部科学省特別教育研究経費研究推進事業の一環として行われた。

Characterization of Aureobasidium pullulans α-L-arabinofuranosidase expressed in Pichia pastoris.

Chihiro Higashida, Kazuyoshi Ohta

(Dept. Biochem. Appl. Biosci., Univ. of Miyazaki)

P-38

油画に付着する糸状菌の除去を目的とした真菌細胞壁溶解酵素の適用

<u>和田朋子</u>¹,中右恵理子²,早川典子¹,佐藤嘉則¹,大河原典子¹,五十嵐圭日子³,木島隆康²,木川りか¹ (¹東京文化財研究所・保修セ,²東京芸大院・美術科,³東大院・農生科)

糸状菌は、木材、紙、綿、絹、皮革、膠、澱粉糊などの様々な文化財の構成材料や修復材料に付着し、 分解や変質といった劣化を引き起こすことが知られている。さらに、菌種によっては低湿度下(65~70%RH 程度)でも生育可能であるため、博物館・美術館の収蔵品にも深刻な被害をもたらす。また、これらの菌 は文化財に一旦発生すると、クリーニングの際に除去が非常に難しい場合もある。発表者らは、物理的な クリーニング等で除去が難しい場合に対応するために、真菌細胞壁溶解酵素を適用し、油画に付着する糸 状菌の除去を行う試験を実施した。本発表では、文化財に強固に付着しクリーニングが困難な糸状菌の除 去に上記の酵素を適用するため、酵素の反応条件の検討を行ったので報告する。

はじめに真菌細胞壁溶解酵素を用いて、文化財等の汚損原因菌の細胞壁の溶解を試みた。その結果、生 菌、死菌ともに顕微鏡下で菌体が溶解することを確認した。つぎに、様々な酵素濃度で菌体細胞壁の減少 量を定量的に評価した。現在、油画などの文化財の構成材料や修復材料への影響について確認を行い、こ れらの条件を基に真菌細胞壁溶解酵素を文化財に適用する方法を検討するとともに、油画に付着した菌糸 の除去効果について実地試験を行っている。

Removal of filamentous fungi from oil painting using fungal cell wall lytic enzymes.

Tomoko Wada¹, Eriko Nakau², Noriko Hayakawa¹, Yoshinori Sato¹, Noriko Ohkawara¹, Kiyohiko Igarashi³,

Takayasu Kijima², Rika Kigawa¹

(¹Nat. Res. Ins. for Cultural Properties, ²Tokyo, Tokyo Univ. of Arts, ³Univ. of Tokyo)

担子菌エノキタケの acetyl xylan esterase (Fv-axe)様遺伝子の機能解析

<u>藤田将幸1</u>,西川良平1,吉田真澄1,奥原 徹1,稻富 聡2,田口悟朗1,下坂 誠1

(¹信州大・繊維・応生系,²ホクトきのこ総合研)

Acetyl xylan esterase (Axe) はキシラン中のキシロース残基にエステル結合したアセチル基を加水分解 する酵素であり、担子菌が木質素材を分解し栄養を獲得する際にはたらくと考えられる。これまでにエノ キタケ細胞から Axe に相同性を示し、養菌糸体特異的に発現する遺伝子(Fv-axe)を単離した。本研究で は、Fv-axe 遺伝子産物の機能を調査した。

Fv-axe ORF (361 アミノ酸残基) は N 末端側よりシグナル配列,セルロース結合ドメイン, family 1 carbohydrate esterase 活性ドメインからなるマルチドメイン構造を有していた。シグナル配列を除去した cDNA 断片を発現用ベクターpPICZ α A に挿入し,メタノール性資化性酵母 *Pichia pastoris* を宿主に用いて 発現させ,組換えタンパク質 Fv-Axe が合成基質 *p*-nitrophenyl acetate に対する分解活性を示すことを確認 した。現在,詳細な酵素学的性質を調査中である。

当研究室で開発した RNA 干渉(RNAi)および高発現用バイナリーベクターを用いて,エノキタケ Fv-axe 遺伝子の発現抑制株と高発現株を作出した。発現抑制株のおがくず培地における増殖が著しく遅延したこ とから, Fv-Axe は木質素材中のキシランの分解利用に強く関わっていることが明らかとなった。

Characterization of acetyl xylan esterase-like gene (Fv-axe) from the basidiomycete Flammulina velutipes

<u>Masayuki Fujita¹</u>, Ryohei Nishikawa¹, Masumi Yoshida¹, Toru Okuhara¹, Satoshi Inatomi², Goro Taguchi¹, Makoto Shimosaka¹

(¹Division Appl. Biol., Fac. Tex. Sci. Tech., Shinshu Univ., ²Mushroom Lab. Hokuto Co.)

P-40

Aspergillus nidulans の sirtuin 様タンパク質 SirA の機能解析

<u>伊藤英里子</u>, 志水元亨, 桝尾俊介, 高谷直樹 (筑波大院・生命環境)

sirtuin はヒストン脱アセチル化酵素(HDAC)クラスIIIに分類される NAD⁺依存的 HDAC であり生物界 に広く保存されている。sirtuin はヒストン H4 の脱アセチル化を促進することによって、ヘテロクロマチ ン構造の形成の促進と当該遺伝子のジーンサイレンシングを行う。また、sirtuin がヒストン以外のタンパ ク質を脱アセチル化する役割ももつことや他のタンパク質と複合体を形成して機能することも報告され ている。一方、カビにおける sirtuin の役割はほとんど未解明であり、その標的タンパク質や複合体を形成 するタンパク質は明らかになっていない。

酵母の Sir2p やヒトの SIRT1 とアミノ酸配列が類似した Aspergillus nidulans のタンパク質を探索し分子 系統樹を作製したところ、AN10449 (SirA) が Sir2p と同一のクラスターを形成した。SirA の組換えタン パク質が sirtuin 活性を有していたことおよび sirA 遺伝子破壊株 (Δ SirA) の無細胞抽出液のアセチルリジ ンレベルが野生株 (WT) のそれよりも高かったことから SirA が A. nidulans の sirtuin として機能すること が示された。また、 Δ SirA ではテロメア近傍の生合成遺伝子クラスターによって生合成されるステリグマ トシスチンとペニシリン G の生産量が増加した。細胞内 NAD⁺が増加した条件下ではこれらの生産量が減 少したことから、SirA は NAD⁺濃度依存的にこれらの生合成を抑制すると考えられた。A. nidulans には、 Sir2p や SIRT1 と複合体を形成するタンパク質のホモログが存在しない。tandem affinity purification と MALDI-TOF/TOF-MS の手法を用い SirA に結合するタンパク質を探索したところ、Elongation factor 2、メ チオニン合成酵素、熱ショックタンパク質 (Hsp70, Hsp40) が得られたことから、これらが SirA の標的タ ンパク質であるか、または、SirA と複合体を形成している可能性が考えられる。

Analysis of Aspergillus nidulans sirtuin A

Eriko Ito, Motoyuki Shimizu, Shunnsuke Masuo, Naoki Takaya(Grad. Sch. of Life and Environmental Sci., Univ. of Tsukuba)

— 54 —

フルアジナムにより誘導されるアカパンカビの遺伝子群の同定

高橋正和, 亀井誠之, 宮下基, 福森文康, 藤村真(東洋大院・生命科学)

フルアジナムは、ミトコンドリアの電子伝達系の共役反応を阻害するアンカプラー型の殺菌剤であり、 幅広い作物病害の防除に使用されている。本研究では、アンカプラーによる損傷に対してどのように細胞 応答が起こるかを明らかにするために、アカパンカビにフルアジナム(5mg/L)を1時間処理してマイクロ アレイ法を用いて応答遺伝子を網羅的に解析した。その結果、ミトコンドリア電子伝達系複合体 III の阻害 剤(Qol 剤)で誘導されることが知られている alternative oxidase(*aod-1*)および酸化剤メナジオンで誘導され ることが知られている glutathione S-transferase(*gst*)や oxidoreductase(*mig*)などの遺伝子群がフルアジナムに より誘導される。これらの遺伝子で実際にフルアジナムで誘導されることを qRT-PCR 法を用いて確認 したところ、ほとんどの遺伝子で4倍以上の発現量の増加が認められた。さらに、*nap-1*破壊株を用いて確 析したところ、フルアジナムによる *aod-1*遺伝子の誘導は保持されたが、gst や *mig*遺伝子のほとんどの遺 伝子の誘導が消失した。同様の傾向は、異なるアンカプラーである CCCP でも認められた。さらに、GFP を用いた NAP-1 の局在解析から、フルアジナムはメナジオンと同様に、NAP-1 を細胞質から核に移行させ ることが明らかになった。これらのことから、フルアジナムは、ミトコンドリアに損傷を与え、*aod-1*を誘 導するとともに、活性酸素を発生させて NAP-1 を活性化し、酸化ストレス応答遺伝子を誘導すると考えら れた。

Fluazinam induced the alternative oxidase, glutathione S-transferase and oxidoreductase genes in Neurospora crassa

Masakazu Takahashi, Masayuki Kamei, Moto Miyashita, Fumiyasu Fukumori, Makoto Fujimura (Grad.Sch.of Life

Sci., Toyo Univ)

P-42

麹菌 Aspergillus oryzae 金属プロテアーゼ遺伝子の転写解析

<u>酒井大介</u>¹, 竹内道雄¹, 古崎利紀², 石井一夫², 有江力², 山形洋平¹

(¹東農工大院・応生化,²東農工大院・農学系ゲノム科学人材育成プログラム)

麹菌 Aspergillus oryzae のゲノム解析の結果、A. funigatus や A. nidulans などの他の Aspergillus 属と比べ てプロテアーゼをコードする遺伝子が約4割多く、A. oryzae のゲノム中にのみ認められるプロテアーゼ遺 伝子が存在することが明らかとなった。さらに、それらのプロテアーゼ遺伝子は窒素源によって転写量が 異なることが示唆された。そこで、本研究では麹菌 A. oryzae の産生する金属プロテアーゼを中心とした遺 伝子に着目して転写解析を行い、A. oryzae の窒素代謝がどのように制御されているのか調べることを目的 としている。

半定量的 PCR によって、A. oryzae の金属プロテアーゼ遺伝子の転写量が、窒素源や培養時間の違いに よって異なることが明らかとなった。そこで、より詳細に窒素源と培養時間の変化による金属プロテアー ゼ遺伝子の転写量変動を調べるため、次世代シーケンサーを用いた解析を行った。解析には、窒素源を硝 酸ナトリウムとゼラチンとし、それぞれの培養時間を48時間と72時間とした4条件を用いた。その結果、 半定量的 PCR と同様に複数の金属プロテアーゼ遺伝子で窒素源、培養時間による転写量の変化が見られ、 さらに培養時間によるものよりも窒素源によるものの方が転写量の変化する遺伝子が多いことが明らか となった。現在、解析を継続しており、今後ヒートマップの作製やクラスター解析を行い、A. oryzae の窒 素代謝制御について述べる予定である。

Gene transcriptional analysis of metalloproteases in Aspergillus oryzae

Daisuke Sakai¹, Michio Takeuchi¹, Toshinori Kozaki², Kazuo Ishii², Tsutomu Arie², Youhei Yamagata¹

(¹Dept. of Applied Biol. Chem., Tokyo Univ. of Agri. and Tech., ² Tokyo Univ. of Agri. and Tech.)

— 55 —

麹菌酸性プロテアーゼ遺伝子のイントロンスプライシングに関する研究

石田健, 久保島恵, 宮本雅史, 森田寛人, 前田浩, 岡本綾子, 山形洋平, 竹内道雄 (東京農工大・応生科)

麹菌ゲノムには 126 個のプロテアーゼ遺伝子が存在する。この遺伝子群の mRNA の塩基配列とゲノム 配列の比較から、オルタナティブスプライシングが起きている遺伝子が複数存在することが予測された。 本研究ではゲノム解析で予測されたプロテアーゼ遺伝子と cDNA の配列を比較することにより、麹菌プロ テアーゼ遺伝子のオルタナティブスプライシングについて検討した。

麹菌 RIB40 株を様々な条件で培養し mRNA を精製して cDNA ライブラリを作製した。この cDNA ライ ブラリより各プロテアーゼ遺伝子 cDNA を PCR により増幅し、これらの配列とアノテーションで予測さ れた配列を比較した。その結果、セリンタイプカルボキシペプチダーゼ遺伝子 AOEXE103 では培養条件 によりそのスプライシングパターンに変化が認められ、成熟型 mRNA の他、イントロンを部分的に含む mRNA も存在することが明らかとなった。また、アスパルティックプロテアーゼ遺伝子 AOEXE007 は、 ゲノム解析による予測では活性中心モチーフが存在したが、今回検討した条件では予測とは異なった位置 でスプライシングが起こることにより翻訳が途中で終了し、酵素活性をもたないプレプロ配列が翻訳され る可能性が示唆された。

Intron splicing of acid protease genes in Aspergillus oryzae

Ken Ishida, Megumi Kuboshima, Masashi Miyamoto, Hiroto Morita, Hiroshi Maeda, Ayako Okamoto, Youhei Yamagata, Michio Takeuchi (Dept. of Applied Biological Science, Tokyo Univ. of Agriculture and Technology)

P-44

麹菌転写因子 HapX の高発現はシデロフォア生産を顕著に増大させる

中村隼人¹, <u>林口拓実¹</u>, 安田(吉野)庄子², 北本則行², 志水元亨¹, 加藤雅士¹(¹名城大・農, ²あいち産 科技総セ・食工技セ,)

【目的】デフェリフェリクリシン(DFF)は Aspergillus oryzae が生産するシデロフォアで,鉄欠乏時に DFF 生合成系の初発酵素遺伝子 dfA 産物が誘導され,生産が開始される。DFF は鉄と結合し変色することか ら,清酒醸造において品質劣化の原因となっている。一方,麹菌シデロフォアは鉄の補給剤としての利用 が期待されている¹⁾。HapX の機能解析の研究から,HapX は麹菌シデロフォア生産制御遺伝子 sreA を抑 制することが明らかとなっており,SreA を介して dffA を間接的に制御することが予想されるが、近縁の Aspergillus nidulans における研究ではシデロフォアの生産にHapX がほとんど関与しないことが報告され ている²⁾。本研究では,HapX 高発現の DFF への影響を調べることで,シデロフォア生産に関する HapX の機能の解明を目的とした。

【方法と結果】 taaG2 プロモーターの制御下に HapX 遺伝子を連結したプラスミドを作製し, Aspergillus oryzae KBN616 に導入し高発現株とした。野生株および高発現株をデンプンを炭素源としたツァペックドックス液体培地に植菌し、鉄を添加・非添加条件で培養を行った。それぞれの菌体からmRNA を抽出し、RT-PCR による測定で、高発現株は野生株に比べ dffA 遺伝子発現強度が高くなることが確認された。また培地中の DFF 濃度を測定した結果、遺伝子発現と同様に高発現株の方が高いことが確認された。これらの結果から HapX は dffA 遺伝子の発現制御に関与し、HapX 高発現株はシデロフォアの生産に有効であることが示された。

1) 入江ら、日本農芸化学会 2005 年度大会講演要旨集 p. 286

2) Hortschansky P. et al. EMBO J, 26, 3157 (2007)

Overexpression of the *A. oryzae* transcription factor HapX significantly increases siderophore production. Hayato Nakamura¹, <u>Takumi Hayashiguchi¹</u>, Shouko Yasuda², Noriyuki Kitamoto², Motoyuki Shimizu¹, Masashi Kato¹ (¹Fac. Agric., Meijo Univ., ²Food Res. Center, ACIST)

— 56 —

ligD 遺伝子破壊による実用麹菌 hapX 破壊株の取得とその解析

<u>増田裕一郎</u>¹,安田(吉野)庄子²,北本則行²,志水元亨¹,加藤雅士¹(¹名城大院・農、²あいち産科 技総セ・食工技セ)

HapX は糸状菌や一部の酵母に存在し、プロモーター上の CCAAT 配列に結合する Hap 複合体と相互作 用し、転写を制御する転写因子である。環境中の鉄の量によって hapX 遺伝子の発現および HapX と Hap 複合体の親和性が調節され、その結果、鉄を補酵素として含むような酵素や鉄の取り込み系に関わる遺伝 子の発現をコントロールする。そこで本研究では hapX 遺伝子破壊株の有効利用も考慮し、実用菌株 A. oryzae KBN616 で hapX 遺伝子破壊を計画した。DNA の非相同末端結合反応に関与する ligD 遺伝子の破壊 により、相同組換え効率が顕著に上昇することが知られている¹⁾。今回はまず実用菌株 KBN616 の ligD 破壊株を取得し、得られた ligD 遺伝子破壊株を用いて、形質転換を行った。その結果、相同組換え効率は 85%と高い値を示し、hapX 破壊株を取得することができた。デフェリフェリクリシン生産系の初発酵素を コードする遺伝子 dffA の発現は、近縁の A. nidulans では、ほとんど HapX の影響を受けないとの報告があ るが、²リアルタイム PCR で hapX 破壊株と野生株とで発現量を比較したところ、麹菌では野生株に比べて dffA 遺伝子の発現量が低下していることが分かった。現在、HapX が制御すると予想される他の遺伝子の 発現に関しても解析を進めている。

3) Mizutani O. et al. Fungal Genet. Biol., 45, 878 (2008)

4) Hortschansky P. et al. *EMBO J*, 26, 3157 (2007)

Deletion of the hapX gene using a ligD disruptant of an industrial strain of Aspergillus oryzae and analysis of the hapX deletion mutant.

<u>Yuichiro Masuda</u>¹, Shoko YOSHINO-YASUDA², Noriyuki Kitamoto², Motoyuki Shimizu¹, Masashi Kato¹ (¹Faculty of Agr., Meijo Univ., ²Food Res. Center, ACIST.)

P-46

麹菌 A. oryzae のデンプン分解酵素生産に関与する転写因子の細胞内局在解析

<u>鈴木空太</u>,田中瑞己,新谷尚弘,五味勝也 (東北大学院農・生物産業創成)

麹菌のデンプン分解酵素生産には、デンプン分解酵素遺伝子群を直接制御する転写因子 AmyR とマルトース取り込み系を制御する MalR の 2種の転写因子が関与している。A. nidulans においては AmyR が活性化と協調的に核移行することが報告されている(1)。麹菌において MalR は AmyR に先行して活性化すると予想されるが、その活性化機構は明らかとなっていない。本研究では AmyR と MalR の活性化機構を解析するため、グルコース抑制制御因子 (CreA) 破壊株における発現解析および sGFP-AmyR と sGFP-MalR の細胞内局在解析を行った。

creA 破壊株における発現をノーザン解析により調べた結果, AmyR 制御下の遺伝子はグルコースによっ ても発現が誘導されたのに対し, MalR の制御下の遺伝子は発現が誘導されなかった。このことから, AmyR と MalR は異なる活性化機構を有していることが示唆された。次に, 各種炭素源における sGFP-MalR の細 胞内局在観察を行ったところ,興味深いことに sGFP-MalR は調べた全ての炭素源培養時において核局在 していた。このことから, MalR は誘導基質依存的に核内で何らかの修飾を受けることにより活性化する ものと推定される。現在, sGFP-AmyR についても各種炭素源培養時における細胞内局在解析を進めてい る。

本研究は生研センター「イノベーション創出基礎的研究推進事業」の支援を受けて行われた。 1) Murakoshi *et al.*, *Appl Microbiol Biotechnol*. 94: 1629-1635 (2012)

Intracellular localization of transcription factors involved in starch degradation in Aspergillus oryzae

Kuta Suzuki, Mizuki Tanaka, Takahiro Shintani, Katsuya Gomi

(Div. Biosci. Biotechnol. Future Bioind., Grad. Sch. Agric. Sci., Tohoku Univ.)

麹菌における CreA 及び脱ユビキチン化酵素 CreB 破壊によるグルコース抑制の 解除

一<u>瀬桜子</u>,田中瑞己,新谷尚弘,五味勝也 (東北大院農・生物産業創成)

麹菌は多様な多糖類分解酵素群を生産するものの、その発現はグルコースによるカタボライト抑制を受ける。糸状菌におけるグルコース抑制は広域制御型転写因子 CreA によって制御されることが知られている。モデル糸状菌 Aspergillus nidulans では、CreA のユビキチン・脱ユビキチン化によりグルコース抑制が 制御されることが示唆されており、グルコース存在条件下では、脱ユビキチン化酵素である CreB によっ て CreA が脱ユビキチン化されると考えられている。そこで、麹菌において creA 及び creB 破壊株を作製 し、グルコース抑制への影響を解析した。

麹菌において creA 及び creB 破壊株を作製し、その生育を宿主株と比較した結果、creA 破壊株では生育 の悪化が観察されたが、creB 破壊株では生育への影響は観察されなかった。次に、デンプンとグルコース を混合した培地におけるハロー形成能を比較した結果、野生株ではハロー形成が見られないのに対し、 creA 及び creB 破壊株では明瞭なハロー形成が観察された。また、デンプン・グルコース混合条件におけ る α-アミラーゼ及びグルコアミラーゼの発現をノーザン解析により調べた結果、creA 及び creB 破壊株で はグルコース存在条件下でもこれらの遺伝子が強く発現していた。以上の結果から、creA 及び creB 破壊 株ではグルコース抑制が解除されていることが示された。現在、creA 及び creB 破壊株の α-アミラーゼ生 産性への効果を比較している。(本研究は生研センター「イノベーション創出基礎的研究推進事業」の支 援を受けて行われた。)

Glucose derepression by gene disruption for CreA and ubiquitin C-terminal hydrolase CreB in Aspergillus

oryzae Sakurako Ichinose, Mizuki Tanaka, Takahiro Shintani, Katsuya Gomi

(Div. Biosci. Biotechnol. Future Bioind ., Grad. Sch. Agric. Sci., Tohoku Univ.)

P-48

麹菌における CreA タンパク質量の翻訳後過程における制御

<u>田中瑞己</u>,新谷尚弘,五味勝也 (東北大院農・生物産業創成)

麹菌は多様な多糖類分解酵素を生産するものの、その発現はグルコースによるカタボライト抑制を受ける。糸状菌におけるグルコース抑制は、広域制御型転写因子 CreA によって制御されることが知られている。A. nidulans では、グルコース抑制に関わる他の因子としてユビキチン化・脱ユビキチン化に関与すると推定される因子が同定されている。このことから、グルコース抑制は CreA のユビキチン化・脱ユビキ チン化を介して制御されていると予想されている。しかし、CreA のタンパク質レベルでの挙動についてはほとんど解析がなされていない。そこで、本研究では N 末端に 4xHA タグを融合した CreA を麹菌で発現させ、ウェスタン解析により CreA タンパク質の炭素源に対する挙動を解析した。

creA のプロモーター領域に 4xHA-CreA を連結した発現コンストラクトを creA 破壊株に導入した。 各種炭素源での培養時における定常状態の発現量を比較した結果、マルトースを炭素源とした場合に CreA タンパク質量が減少した。次に、フルクトースを炭素源とした培地で培養後、菌体をグルコースお よびマルトースを炭素源とした培地に移して CreA の挙動を調べた。その結果、マルトースを炭素源とし た培地に移した場合に CreA タンパク質の急速な減少が観察された。また、マルトース依存的な CreA の 減少は、構成的に発現するエノラーゼ遺伝子のプロモーターを用いて 4xHA-CreA を発現させた場合にも 観察された。以上の結果から、CreA タンパク質量が炭素源依存的に翻訳後の過程において制御されるこ とが示唆された。

(本研究は生研センター「イノベーション創出基礎的研究推進事業」の支援を受けて行われた。)

The amount of CreA protein is regulated at the post-translational level in Aspergillus oryzae.

Mizuki Tanaka, Takahiro Shintani, Katsuya Gomi

(Div. Biosci. Biotechnol. Future Bioind., Grad. Sch. Agric. Sci., Tohoku Univ.)

— 58 –

Neurospora crassa の beta-1,3-glucan 合成酵素遺伝子 fks-1 の転写制御因子の探索

<u>亀井誠之</u>,高橋正和,一石昭彦,藤村真(東洋大院・生命科学)

出芽酵母の beta-1,3-glucan 合成酵素遺伝子 FKS1, FKS2 は細胞壁の損傷によって転写量が上昇し、この 誘導は Slt2 MAP キナーゼ及びその下流の転写調節因子 Rlm1 によって制御されている。酵母との比較ゲ ノム解析の結果から、モデル糸状菌 Neurospora crassa には 1 つの beta-1,3-glucan 合成酵素遺伝子 fks-1 の 存在が明らかになっているが、fks-1 を発現制御するシグナル因子については不明である。

そこで、Neurospora crassa の fks-1 の発現を制御する因子を明らかにするため、qRT-PCR による fks-1 の 発現解析を行った。fks-1 は基礎的な栄養生育条件下において発現量が恒常的に高く、培養菌糸体に Micafungin (beta-1,3-glucan 合成酵素阻害剤)による細胞壁損傷処理を行っても、発現量に顕著な変動は認 められなかった。さらに、その発現量は mak-1 (出芽酵母 Slt2 ortholog)破壊株や rlm-1 (出芽酵母 Rlm1 ortholog)破壊株においても完全に消失しなかった。これらのことから、Neurospora crassa の fks-1 の発現制 御には MAK-1 MAP キナーゼ及び転写調節因子 RLM-1 は関与していないことが明らかになり、酵母の FKS1, FKS2 の発現制御機構とは大きく異なることが推定された。gfp をレポーター遺伝子として利用した fks-1 のプロモーターアッセイを行ったところ、推定プロモーター領域 1500bp のうち、開始コドン上流 -1500~-300 領域の欠損によってgfp 発現量が顕著に減少した。このことから、fks-1 の開始コドン上流1500 ~-300 領域に結合するアクチベータータイプの転写調節因子の存在が示唆された。現在、fks-1 プロモー ター領域に結合する DNA 結合タンパク質について解析を行っている。

Attempt to identify a transcriptional regulator of *fks-1*, beta-1,3-glucan synthase gene, in *Neurospora crassa*.

Masayuki Kamei, Masakazu Takahashi, Akihiko Ichiishi, and Makoto Fujimura

(Grad. Sch. of Life Sci. , Toyo Univ.)

P-50

Trichoderma reeseiのセルラーゼ生産に関与するシグナル伝達関連タンパク質の解析

<u>日下秀行</u>,古川隆紀,深谷英嗣,志田洋介,小笠原 渉 (長岡技大・生物)

糸状菌 Trichoderma reesei は、細胞外セルロースやその誘導体に応答してセルラーゼを誘導的に生産す る。しかし、誘導の初段階でセルロースは不溶性で直接細胞膜を通過できないことから、どのように細胞 外セルロースを認識しているのかは不明である。また、これまでの研究から初発のセルラーゼ誘導生産は 構成的に発現しているセルラーゼによって分解された微量のセルロース分解産物が引き金となり引き起 こされるというモデルが提唱されているが、その詳細は明らかにされていない。これまでに当研究室では、 セルラーゼ誘導基質の取込みおよび認識に関与するトランスポーターの同定を試みている。網羅的な遺伝 子発現応答解析によりセルラーゼと同調して発現する推定トランスポーター遺伝子を選抜し、それぞれの 遺伝子破壊株の表現型を評価した結果、推定トランスポーターMFS031の破壊に伴い著しいセルラーゼ活 性の低下が観察された。本研究では推定トランスポーターMFS031の使期の解明を目的として、 この遺伝子の破壊が基質の取込みやセルラーゼ遺伝子発現に与える影響について詳細な解析を行った。そ の結果、セロオリゴ糖を炭素源として使用した場合、MFS031 破壊株は野生株と同等の基質取り込み能を 示したが、セルラーゼ遺伝子の誘導発現能を欠損していることが明らかとなった。この結果より、推定ト ランスポーターMFS031 はセロオリゴ糖の基質認識に関与している可能性が高いと推定された。現在、酵 母 Saccharomyces cerevisiae を用いて MFS031 の異種宿主発現株の構築を行い、各種炭素源に対する基質取 込みについての解析を行っている。

Functional analysis of genes encoding a putative cello-oligosaccharide transporter in the filamentous fungus

Trichoderma reesei.

Hideyuki Kusaka, Takanori Furukawa, Eiji Fukaya, Yousuke Shida, Wataru Ogasawara

(Dept. Bioeng., Nagaoka Univ. of Tech)

P-51

Trichoderma reesei のセルラーゼ生産に関与する MFS トランスポーターの機能解析

古川隆紀,志田洋介,小笠原渉(長岡技大・生物)

【目的】糸状菌 Trichoderma reesei は、細胞外のセルロースやその分解産物の存在に応答して誘導的にセル ラーゼを生産する。古くから T. reesei はセルラーゼ生産のモデル生物として様々な研究の対象となってき ており、そのセルラーゼ生産制御機構に関しても無数の報告がなされている。しかし、細胞外セルロース の認識機構やセルラーゼ誘導物質の取り込み系に関してはほとんど知見が得られておらず、セルラーゼ生 産制御機構の解明における大きなブラックボックスとなっている。本研究では、セルラーゼ生産に関与す る糖トランスポーターの同定を目的として、遺伝子発現プロファイリングに基づく推定トランスポーター 遺伝子の選抜と遺伝子破壊による糖トランスポーターの機能解析を行った。

【方法および結果】セルラーゼ生産および非生産条件下での網羅的な遺伝子発現応答解析を行い,セルラ ーゼ生産に関与すると推定される推定糖トランスポーター遺伝子の選抜を行った。選抜遺伝子についてそ の遺伝子破壊株の構築を行い,結晶性セルロース培養におけるセルラーゼ生産性を指標に表現型の解析を 行った。その結果,ある推定トランスポーター遺伝子の破壊に伴い,大幅なセルラーゼ生産の遅延と菌体 生育の遅れが観察された。また、セロビオースおよびラクトース培養においても同様にセルラーゼ生産性 と生育能の低下が観察された。現在、遺伝子破壊株を用いて様々な糖類に対する取り込み挙動の解析を行 っている。

Identification and functional analysis of a MFS transporter gene involving cellulase production in the filamentous fungus *Trichoderma reesei*.

Takanori Furukawa, Yosuke shida, Wataru Ogasawara (Dept. of Bioeng., Nagaoka Univ. of Tech.)

P-52

糖質加水分解酵素の生産における Aspergillus aculeatus clbR 高発現の影響

<u>川村彩乃</u>,國武絵美,谷修治,炭谷順一,川口剛司 (阪府大院・生環科)

糸状菌 Aspergillus aculeatus においてセルロースによる遺伝子発現誘導を正に制御する因子 cellobiose response regulator (ClbR) は, セルロースに応答して XlnR 非依存的に誘導される cellobiohydrolase I (*cbhI*), carboxymethyl cellulase 2 (*cmc2*), Fla-xylanase (*xynIa*) 遺伝子及び XlnR により誘導される carboxymethyl cellulase 1 (*cmc1*), Flb-xylanase (*xynIb*) 遺伝子の発現を亢進する。そこで我々はこの ClbR を翻訳伸長因子 遺伝子 (*tef1*) プロモーター制御下で構成的に高発現させた株を作製し, そのセルロース系バイオマス分解 酵素生産に与える影響を解析した。

ClbR 高発現株とコントロール株を小麦ふすまを炭素源として培養した際の Xylanase, Endoglucanase 活性を測定したところ, Xylanase 活性においては ClbR 高発現株で培養初期での酵素生産量が約3倍に 増加しており,培養後期でも高い活性を維持していた。一方, Endoglucanase 活性においては,コントロ ール株と比べて酵素生産量に顕著な差は見られなったものの、培養後期での活性の低下は緩やかであった。 これらの活性に起因する各酵素成分を調べるため、培養4日目と8日目の培養上清中の分泌タンパク質を ペプチドマスフィンガープリント法を用いて同定した。その結果, ClbR 高発現株では ClbR 制御下にあ る酵素のうち XynIa の分泌量が劇的に増加していたことから, XynIa が Xylanase 活性の上昇に影響して いると考えられたが, Endoglucanase 活性に影響すると考えられる酵素の分泌量に顕著な差は観察されな かった。

現在は、各酵素生産量と各転写産物量の相関を調べるため、ClbR 制御下にある遺伝子発現量をノーザンブロット法を用いて定量している。

The effect of Aspergillus aculeatus clbR overexpression on cellulosic biomass-degrading-enzyme-production

Ayano Kawamura, Emi Kunitake, Shuji Tani, Jun-ichi Sumitani, Takashi Kawaguchi

(Grad. Sch. Life & Env. Sci., Osaka Pref. Univ.)

P-53 環境 pH による糸状菌セルラーゼの生産制御

<u>宮本健太郎</u>,青山未来,金丸京子,木村真,小林哲夫 (名大院生命農・生物機構)

【目的】 クロモソームIVマッピング用変異株である Aspergillus nidulans A517 は、CMC を含む培地で 生育させてもセルラーゼ生産の指標となるハローがほとんど観察されない。これまでの研究で、本セルラ ーゼ生産変異株の原因遺伝子は、クロモソームIV上に存在していることが示唆されているが、その同定に 至っていなかった。本研究では、原因遺伝子が palC であることを同定し、これを受けて pH シグナリング とセルラーゼ生産の関連を解析したので報告する。

【方法・結果】 掛け合せにより A517 における原因遺伝子と各種マーカー遺伝子とのリンケージを検 討した結果, palC 遺伝子周辺にマップされた。そこで、palC あるいはその近傍に存在する xlnR について 原因遺伝子である可能性を検討した。その結果、xlnR の導入は A517 の変異を相補せず、野生株における xlnR の破壊も主要エンドグルカナーゼ EglA、EglB の生産に全く影響を与えなかったのに対し、palC の導 入により A517 のセルラーゼ生産性が回復した。PalC は pH シグナリングに関与する因子で、転写因子 PacC の上流に位置する。PacC DNA 結合配列は EglA, EglB を含む数種類のセルラーゼ及びその生産に関与す る転写因子 ManR のプロモーター領域に存在していた。CMC を単一炭素源とする酸性、中性液体培地で のセルラーゼ誘導を Zymography により解析したところ,酸性条件では野生株と palC 変異株における EglA, EglB 誘導に大きな違いはなかった。一方、野生株は中性条件で酸性条件より多量の EglA, EglB を生産す るのに対し、palC 変異株では激減していた。現在、pacC の破壊を試みており、これについても併せ報告 する予定である。

本研究は、生研センターのイノベーション創出基礎的研究推進事業の一環として行われたものである。

Regulation of fungal cellulase synthesis by ambient pH.

Kentaro Miyamoto, Miki Aoyama, Kyoko Kanamaru, Makoto Kimura, Tetsuo Kobayashi

(Graduate Sch. of Bioagric. Sci., Nagoya Univ.)

P-54 (O-11)

Co-regulation of A. nidulans cellulase genes by transcription factors McmA and ManR

Nuo Li, Miki Aoyama, Kyoko Kanamaru, Makoto Kimura, Tetsuo Kobayashi (Graduate Sch. of Bioagric. Sci.,

Nagoya Univ.)

In *A. nidulans*, a MADS box protein McmA regulates at least two endoglucanse genes (*eglA* and *eglB*) and two cellobiohydrolase genes (*cbhA* and *cbhD*). As a MADS box protein generally requires an interacting partner to regulate gene expression, identification of the McmA partner is the key to understanding the regulatory mechanisms underlying cellulase regulation. One of the candidate cofactors is ManR because it is essential for expression of the above cellulase genes. This study focuses on the clarification of the cooperative regulatory mechanisms by McmA and ManR.

RNA sequencing analysis revealed that most cellulase genes were regulated by both ManR and McmA, implying that ManR is one of the partners of McmA. Previous studies have proved the existence of two binding sites for McmA on the 50 bp region of the *eglA* promoter. To detect the binding of ManR to the region, electrophoretic mobility shift assay was applied in the presence and absence of McmA. His-tagged McmA and Flag-tagged ManR were purified and utilized in the experiments. While ManR alone showed very weak binding, McmA alone bound to the probe with two shift bands corresponding to the single and double occupation of the binding sites. When both ManR and McmA were applied, the slower migrating DNA-protein complex with enhanced affinity appeared. Supershift assay using anti-Flag tag and anti-His tag antibodies confirmed that the complex contained both ManR and McmA. The results illustrated that McmA played a key role in the regulation of cellulase genes by assisting recruitment of ManR to the promoter.

This work was supported by the Programme for Promotion of Basic and Applied Researches for Innovations in Bio-oriented Industry.

Co-regulation of A.nidulans cellulase genes by transcription factors McmA and ManR

Nuo Li, Miki Aoyama, Kyoko Kanamaru, Makoto Kimura, Tetsuo Kobayashi

(Graduate Sch. of Bioagric. Sci., Nagoya Univ.)

P-55

Aspergillus nidulans におけるマンナナーゼ生産制御機構

— 61 -

<u>渡邉亜也子</u>,青山未来,金丸京子,木村 真,小林哲夫 (名大院生命農・生物機構)

【目的】 A. oryzae において同定された転写因子 ManR は、マンナナーゼ・セルラーゼ生産に必須の因子 である。一方, A. nidulans では manR 遺伝子の破壊がマンナナーゼ生産性に大きな影響を与えない。A. nidulans は manR ホモログである manS を有していたため、本研究では A. nidulans における manR と manS のマンナナーゼ生産制御への寄与を調べた。

【方法・結果】 AmanR, AmanS, AmanR/AmanS の三種の破壊株におけるエンドマンナナーゼ生産性を野 生株と比較した。konjac glucomannan (KG)を基質とするプレートアッセイでは, AmanR 株でのエンドマン ナナーゼ生産性がわずかに低下し, AmanS 株では大幅に低下した。AmanR/AmanS 株では生産性が完全に 消失した。CMC, KG, 及び locust bean gum 由来 galactomannan (GM)を単一炭素源として液体培養した培 養上清を, KGを基質とするザイモグラフィーにより解析した。野生株では CMC で 2 種, GM で 2 種のエ ンドマンナナーゼ活性が検出され, KG ではこれらを合わせた 4 種となった。また, CMC 誘導型の 2 種は manR 破壊で消失, GM 誘導型の 2 種は manS 破壊で消失した。CMC 誘導型の 2 種は GM を基質とせず, ザイモグラフィー上の移動度は主要エンドグルカナーゼ EglA, EglB と完全に一致した。以上から ManR 依存的かつ CMC 誘導型の 2 種は EglA, EglB であり, KG のグルコースストレッチを切断していることが 示唆された。従って,純粋な意味でのエンドマンナナーゼは ManS により制御されていると考えられる。 本研究は,生研センターのイノベーション創出基礎的研究推進事業の一環として行われたものである。

Regulation of mannanase synthesis in Aspergillus nidulans

Ayako Watanabe, Miki Aoyama, Kyoko Kanamaru, Makoto Kimura, Tetsuo Kobayashi

(Graduate Sch. of Bioagric. Sci., Nagoya Univ.)

P-56 (O-12)

AtrR は Aspergillus fumigatus においてエルゴステロール合成系遺伝子発現を制御する

大場歩¹,清水公德²,萩原大祐²,新谷尚弘¹,川本進²,五味勝也¹

(¹東北大院農・生物産業創成,²千葉大・真菌センター)

当研究室では、これまでに麹菌においてアゾール系薬剤排出に関与する複数の ABC トランスポーター 遺伝子の発現を同時に制御する Zn₂Cys₆型の転写因子 AtrR を見いだしている. AtrR は Aspergillus 属に幅 広く保存されており、病原性真菌 Aspergillus funigatus においても、atrR を破壊することでアゾール系薬 剤に関して超感受性を示すことを明らかにしている.

本研究では、A. funigatus の atrR 破壊株における遺伝子発現プロファイルを網羅的に調べるために、 RNA-seqを用いてトランスクリプトーム解析を行った.A. funigatus の野生株と破壊株をDMSO, fluconazole, miconazole で各々処理したサンプルに異なるインデックスを付加することでマルチプレックスな RNA-seq を行い、各サンプルから 1.91~2.45 M read の配列、約 10000 遺伝子の発現プロファイルを得た.発現量を 比較した結果、破壊株では薬剤無添加において ABC トランスポーター遺伝子だけでなく複数のエルゴス テロール合成系遺伝子の発現量が極めて低く、薬剤を添加した際には野生株でそれらの発現量が上昇する 一方、破壊株ではほとんど変動しない、あるいは僅かな上昇しか示さないことが明らかになった.このこ とから AtrR は ABC トランスポーター遺伝子のみならず、エルゴステロール合成系遺伝子の発現も制御し ていると考えられる. A. funigatus では bHLH 型転写因子 SrbA がエルゴステロール合成系遺伝子の発現を制御している可 能性が示唆された.

AtrR regulates the expression of ergosterol biosynthesis genes in Aspergillus fumigatus.

<u>Ayumi Ohba¹</u>, Kiminori Shimizu², Daisuke Hagiwara², Takahiro Shintani¹, Susumu Kawamoto², Katsuya Gomi¹ (¹Div. Biosci. Biotechnol. Future Bioind., Grad Sch. Agric. Sci., Tohoku Univ., ²MMRC, Chiba Univ.)

P-57 (O-13)

Neurospora crassa のエルゴステロール生合成阻害剤による erg 遺伝子の誘導とその制御

— 62 —

<u>宮下基</u>,亀井誠之,高橋正和,一石昭彦,藤村真(東洋大院・生命)

Ergosterol は糸状菌の細胞膜の成分で、その生合成経路は農業用殺菌剤や抗真菌剤の標的である。 Morpholine 系剤 Fenpropimorph (FEN)は、C-14 sterol reductase (ERG-24)と C-8 sterol isomerase (ERG-2)の二点 の酵素を阻害し、Azole 系剤 Fluconazole (FLC)は Lanosterol 14-alpha-demethylase (ERG-11)を阻害し殺菌活 性を発現する。Ergosterol 生合成阻害剤により erg 遺伝子が誘導される事が知られているが、薬剤の阻害点 と誘導遺伝子の関係は不明な点が多い。そこで、N. crassa に FEN と FLC を処理し、メバロン酸経路から Ergosterol に至る 21 種類の erg 遺伝子の発現様式を qRT-PCR を用いて比較解析した。その結果、FEN に より阻害点の erg-24 と erg-2 及びその下流の erg-25 と erg-3 が誘導された。一方、FLC では阻害点の erg-11 及びその下流の erg-6 が誘導され、薬剤の阻害点により誘導される遺伝子が異なる事を明らかにした。興 味深いことに両剤を混合処理すると、FEN 応答遺伝子の誘導のみが顕著に低下した。合成経路の阻害で蓄 積する異常ステロールにより、誘導される遺伝子を決定している可能性が考えられた。N. crassa の Ergosterol 生合成経路は少なくとも二種類の異なる制御を受けていると推測し、その転写因子を同定する ため、転写因子破壊株ライブラリーから、FEN 及び FLC 感受性株をスクリーニングした。その結果、sterol binding element regulator protein である sah-2 破壊株が顕著な FEN 感受性を示し、FEN 応答遺伝子の誘導も ほぼ完全に消失した。一方、sah-2 破壊株は FLC 感受性及び FLC による erg-11 誘導は野生株と同様に認 められた。以上の事から、N. crassa では、転写因子 SAH-2 が Morpholine 系剤により誘導される遺伝子を 制御する事を明らかにした。

Regulation of ergosterol biosynthetic genes in response to azole and morpholine fungicides in *Neurospora* crassa.

Moto Miyashita, Masayuki Kamei, Masakazu Takahashi, Akihiko Ichiishi and Makoto Fujimura

(Fac. of Life Sci., Toyo Univ.)

P-58

Histone deacetylase *HstD* と *LaeA* のジェネティックインタラクション

<u>河内護之^{1,2}</u>,廣瀬雅人^{1,2},岩下和裕^{1,2}(1広島大院・先端研,2酒総研)

【背景】糸状菌は、多種多様な二次代謝物 (SM) を生産する為, SM 生産遺伝子やその制御機構が注目 されている。この SM 生産遺伝子クラスターの制御に,ヒストン修飾遺伝子が関与することが近年示された。 このような背景から, Aspergillus oryzae を用いて Histone deacetylase (HDAC)遺伝子の破壊株を作成し, コウ ジ酸・ペニシリンをモデルとして SM 生産遺伝子クラスターの発現並びに SM 生産性への影響を解析した。 その結果、酵母の Hst4 ホモログである HstD が,SM 生産の抑制制御に関与することを新規に見出した。ま た, 近年織田等により糸状菌の主要な SM 生産制御因子である LaeA が, コウジ酸生産を正に制御にするこ とが報告された。そこで、コウジ酸・ペニシリン生産制御をモデルに、二次代謝制御における HstD と LaeA のジェネティックインタラクションについて解析を行った。

【方法・結果】HstD と LaeA のジェネティックインタラクションの有無を明らかとするため、*AHstDALaeA* 株を作成し解析した。その結果、*AHstD* バックグランドであるにも関わらず, *ALaeA* 株と同様のコウジ酸 及びペニシリン生産性を示した。したがって, *HstD* は *LaeA* の制御を介し SM 生産を制御している事が示 唆された。そこで、*HstD* と *LaeA* のエピスタティックな関係についてさらに検討するため、*LaeA* 高発現 並びに *AHstD* バックグランドでの *LaeA* の高発現を行った。その結果, *AHstD* バックグラウンドでも, *OE::LaeA* 株と同様のコウジ酸及びペニシリン生産性を示した。したがって, *HstD* は *LaeA* 上流で作用す ることが明らかとなった。これまでに、*LaeA* のレギュレーターに関する報告はないことから,本研究は *LaeA* の制御因子に関する最初の報告である。

Analysis of genetic interaction between HstD and LaeA

Moriyuki Kawauchi^{1, 2}, Masato Hirose^{1, 2}, Kazuhiro Iwashita^{1, 2}

(1 Grad. Sch. Adv. Sci. Mat., Hiroshima Univ., 2. NRIB)

P-59

ムギ赤かび病菌におけるトリコテセン生合成制御遺伝子 Tri6の分子生物学的解析

中嶋 佑一, 前田 一行, 市川 雛代, 小林 哲夫, 木村 真 (名大院生命農)

ムギ赤かび病菌 Fusarium graminearum はコムギなどの重要穀類に感染し赤かび病を引き起こすだけで なく、収穫後の穀粒を二次代謝産物のトリコテセン系毒素などのマイコトキシンで汚染する。本菌のトリ コテセン生合成に関与する遺伝子群はクラスターを形成しており、これらの遺伝子群の発現はクラスター 内遺伝子の Tri6 によって制御される。現在ではトリコテセン生合成経路を構成する遺伝子群の大部分が同 定され、また機能解析も進んではいるものの、制御因子である TRI6 の諸性質に関してはいまだ不透明な 部分が多い。

F. graminearum の遺伝子組み換えには抗生物質耐性遺伝子を選択マーカーとして利用する手法が一般 的であるが、多重の遺伝子組み換えを行う際に選択マーカーの種類による制限を受ける点や、目的とする 配列以外に選択マーカー発現カセットなどの外来遺伝子配列を組換え体の染色体上に残してしまうとい った問題があった。そこで今回 Tri6 を解析するにあたり、選択マーカー配列を染色体上に残さない組換え 株の取得を目指し、F. graminearum において HSV-tk 遺伝子を用いたネガティブセレクション系を適用した。 本ネガティブセレクション系を用いることで改変 Tri6 のみが導入された変異株を作出することに成功し、 トリコテセン生合成への影響を中心に TRI6 発現状況や翻訳語修飾の有無の調査など各種解析を行ってい る。

Molecular analysis of Tri6, trichothecene biosynthesis regulatory gene in Fusarium graminearum.

Yuichi Nakajima, Kazuyuki Maeda, Hinayo Ichikawa, Tetsuo Kobayashi, Makoto Kimura.

(Nagoya Univ.)

P-60

糸状菌 Coleophoma empetri F-11899 株への人工アシラーゼ遺伝子の導入

中谷 和也,山田 雅人,大内 卓也,磯貝 泰弘,橋本 正治 (富山県大・生物工)

深在性真菌症治療薬 micafungin (アステラス製薬) は糸状菌 Coleophoma empetri F-11899 株が生産する FR901379 のアシル側鎖を放線菌由来のアシラーゼを用いて脱アシル化し,最適化されたアシル側鎖を有 機合成により化合させて生産されている。この製造工程は,C. empetri F-11899 株と放線菌の発酵培養と, 脱アシル体を原料にした多段階工程で行われている。この多段階工程を簡略・効率化することができれば 環境負荷やコスト削減が期待できる。そこで,これまでに本研究室では脱アシル体を直接生産できる C. empetri F-11899 株の取得を目的として,放線菌からアシラーゼ遺伝子をクローニングし,C. empetri F-11899 株に導入し,脱アシル体直接生産株の取得を試みた。しかしながら,脱アシル体の生産は確認できなかっ た。この原因として,放線菌由来アシラーゼ遺伝子配列はGC 含量が糸状菌のそれらと比べて高く,また コドンの選択性が放線菌とカビでは異なると考えられた。そこで,放線菌由来のアシラーゼ遺伝子配列を C. empetri F-11899 株のコドンに最適化した人工アシラーゼ遺伝子を作成し C. empetri F-11899 株に導入し た。人工アシラーゼ遺伝子を発現プラスミドに導入し ATMT (Agrobacterium tumefaciens medieted transformation) 法により形質転換した。現在,脱アシル体直接生産株のスクリーニングとアシラーゼの 発現・活性について調査している。

Gene transfer of artificial acylase gene into fungus Coleophoma empetri F-11899.

Kazuya Nakaya, Masato Yamada, Takuya Ouchi, Yasuhiro Isogai, Seiji Hashimoto (Dept. of Biotechnol., Toyama Pref. Univ.)

糸状菌の二次代謝産物生合成酵素の細胞内局在解析

<u>伴曉彦</u>,田中瑞己,新谷尚弘,五味勝也(東北大院・農・生物産業創成)

近年,糸状菌や放線菌の生産する多種の二次代謝産物生合成に関わる遺伝子クラスターが次々に同定され、その中でも特に有用なものを高生産させようという動きが活発になっている。実際に麹菌 Aspergillus oryzae に異種の二次代謝産物遺伝子クラスターを導入することで目的の最終産物を生産できることも報告されている¹⁾。一方,効率的な二次代謝産物の生合成反応を考えると、糸状菌のような真核生物では生合成が細胞質ではなく何らかのオルガネラ内で行われている可能性を考慮する必要がある。今後、麹菌に異種の二次代謝系を導入し、高生産させるためにはオルガネラ局在化の制御が重要であると考えられる。そこで本研究では、モデルとして植物病原菌 Phoma betae の生産する DNA polymerase 阻害剤であるアフィディコリンの生合成遺伝子クラスターの局在を解析することを目的とした。

各生合成酵素に GFP を融合させたタンパク質を麹菌で発現させ、蛍光顕微鏡観察を行い、融合タンパク質の局在を観察した。また、P. betae によるアフィディコリン生合成経路には微生物から動植物に至る 生物界に広く分布するモノオキシゲナーゼである Cytochrome P450 が2種類存在するが、そのうち最終段 階に関わる P450-1 の N 末端側にはシグナルペプチド様配列が存在することから、これらの除去による融 合タンパク質の局在の変化についても観察を行った。続いて、各オルガネラ特異的に存在するオルガネラ マーカータンパク質等に RFP を融合させたタンパク質を麹菌内で共発現させ、各生合成酵素の局在部位を 同定した。

1) Fujii et al. Biosci. Biotechnol. Biochem (2011)

Subcellular localization of biosynthetic enzymes for secondary metabolite in the filamentous fungus.

Akihiko Ban, Mizuki Tanaka, Takahiro Shintani, Katsuya Gomi

(Div. Biosci. Biotechnol. Future Bioind., Grad. Sch. Agric. Sci., Tohoku Univ.)

P-62

糸状菌 Talaromyces stipitatus 由来 MT ドメインを有するタイプ I型 PKS の機能解析

橋元 誠¹, 小林大祐¹, 若菜大悟², 合田幸広², 藤井 勲¹

(¹岩手医科大・薬,²国立衛研・生薬)

スチピタチン酸生産菌 *Talaromyces stipitatus* には、スチピタチン酸前駆体である 3-methylorcinaldehyde (MO) 生産のポリケタイド合成酵素 (PKS) をコードする Ts0002pks 遺伝子に加え、Ts0002PKS と同様 にメチルトランスフェラーゼ (MT) ドメインをもつ非還元型 NR-PKS をコードする 3 つの遺伝子が存在 することがゲノム解析より明らかになっている。このうち、Ts0021pks は α-アセチル MO を合成する NR-PKS をコードする遺伝子であることをすでに報告した¹⁾。今回、残された機能未確認の 2 つの MT 含 有 NR-PKS 遺伝子のうち、Ts0058pks について、*Aspergillus oryzae* での異種発現による機能解析を試みた ので報告する。

Gateway 法により Ts0058pks 遺伝子を amyB プロモーター下に組み込んだ発現プラスミド pTA-Ts0058pks を構築し, A. oryzae M-2-3 に形質転換,導入した。形質転換体を 3 日間誘導培養後,培養液を HPLC にて 分析した結果, pTA-Ts0058pks 形質転換体においてコントロールには見られない化合物の生産が確認され た。その単離,構造解析を行った結果,トリヒドロキシナフタレン環にアセチル基とメチル基をもつ新規 ヘキサケタイドとその酸化体であることが確認された。Ts0058PKS は,Ts0002PKS や Ts0021PKS と同様 のドメイン構成をもつ NR-PKS でありながら,炭素鎖長がさらに伸長した生成物を与える PKS と考えられ,これらの PKS における炭素鎖長およびメチル基導入の制御機構に興味が持たれる。

1) 橋元誠,藤井勲,第10回糸状菌分子生物学コンファレンス要旨集, p.34

Functional analysis of type I polyketide synthase genes containing MT domain from Talaromyces stipitatus

Makoto Hashimoto¹, Daisuke Kobayashi¹, Daigo Wakana², Yukihiro Goda², Isao Fujii¹

(¹School of Pharmacy, Iwate Med. Univ., ²Natl. Inst. Health Sci.)

P-63

Penicillium purpurogenum による Monascus 色素同族体生産能の多様性解析

— 65 —

<u>荻原淳</u>,梅村彩良,小嶋涼,小金井霞,新居鉄平,加藤順,春見隆文 (日大・生物資源・生命化学)

我々は、東アジアにて発酵微生物として利用されてきた子のう菌 Monascus と不完全子のう菌 Penicillium の生産する共通した二次代謝産物について解析している。不完全菌 Penicillium の有性世代は次第に明らか にされつつあるが、Penicillium と子のう菌 Monascus の間の生殖世代と代謝産物生合成遺伝子の水平伝播 との関連性は不明である。そこで、本研究では Penicillium purpurogenum における Monascus 色素同族体生 産能の多様性を解析した。また、Penicillium purpurogenum のもつ Monascus 色素同族体生合成関連遺伝子 およびその遺伝子産物の検索を行った。さらに、これら遺伝子の Penicillium, Monascus 間における水平伝 播の可能性を検証するために Penicillium purpurogenum における交配型遺伝子の検索を行った。8 種類の Penicillium purpurogenum を用いて色素生産能を確認した。その結果、色素生産量に違いがあるものの6 菌 株において 12-carboxyl-monascorubramine, 12-carboxyl-monascorubrin の生産を確認した。色素生産しない ものや、特徴的な窒素代謝能を持つ2 菌株を確認した。当研究室において解析した Penicillium purpurogenum のゲノムドラフトシークエンスを用いて Aspergillus, Penicillium 等の糸状菌から見出されている既知の polyketide synthases の塩基配列情報を基に、本糸状菌の polyketide synthases 遺伝子の検索を local BLAST search により検索した。その結果、約 20 個の polyketide synthases 遺伝子の存在を確認した。さらに、同様 に本糸状菌のゲノムドラフトシークエンスを用いて既知の糸状菌由来交配型遺伝子塩基配列情報を基に、 交配型遺伝子の検索を行った。その結果、MAT 1-2 遺伝子と相同性の高い遺伝子の存在を確認した。

Analysis of the diversity of Monascus pigment homologues productivity by Penicillium purpurogenum

Jun Ogihara, Sara Umemura, Ryo Kojima, Kasumi Koganei, Teppei Arai, Jun Kato and Takafumi Kasumi (Dept. of Chem. Life Science, Nihon Univ.)

P-64

Aspergillus fumigatus ゲノム解読株 Af293 におけるフミトレモルジン非生産性の原因遺伝子の同定

<u>加藤直樹</u>¹,鈴木宏和¹,奥村英夫²,高橋俊二¹,長田裕之¹ (¹理研基幹研・ケミカルバイオロジー,² 高輝度光科学研究センター)

フミトレモルジンは病原性糸状菌 Aspergillus fumigatus の生産するマイコトキシンである。ゲノム解読 が契機となり、その生合成遺伝子(ftm)クラスターが同定された。しかしながら、ゲノム解読株 Af293 株において ftm クラスターは不活性化していると報告された。このため、生合成経路の全貌解明が困難で あった。そこで、我々はフミトレモルジン生産株である BM939 株を用いることで、生合成経路の解析を 行ってきた。

本研究では、Af293 株で報告されているフミトレモルジン生産欠損の遺伝的要因の同定を目的として、 fum クラスターの塩基配列比較、発現解析、および Af293、BM939 の両株の代謝産物プロファイル比較を 行った。遺伝子発現に大差の無いことから、代謝産物生産の違いを引き起こす遺伝的要因として、メチル 基転移酵素をコードしている funD 遺伝子中の点変異に着目した。BM939 株由来の funD を含む DNA 断片 を Af293 株に導入したところ、フミトレモルジン生産の回復が認められた。大腸菌で発現させた組換え FunD を用いた生化学的解析から、点変異によって引き起こされるアミノ酸置換により、FunD の酵素活性 が生理的条件下では機能できないまでに低下しており、結果として Af293 株ではフミトレモルジン生合成 経路が FunD のステップで遮断されていることを明らかにした。

A point mutation of *ftmD* blocks the fumitremorgin biosynthetic pathway in Aspergillus fumigatus Af293

Naoki Kato¹, Hirokazu Suzuki¹, Hideo Okumura², Shunji Takahashi¹, Hiroyuki Osada¹

(¹Chemical Biology Dept., RIEKN ASI, ²JASRI)

P-65

イネいもち病菌の二成分情報伝達系攪乱による PK-NRP 融合化合物生産誘導

— 66 —

<u>尹忠銖</u>,本山高幸,林敏明,廣田洋,長田裕之 (理研基幹研・ケミカルバイオロジー)

【目的】糸状菌ゲノム中に予想以上に膨大な数の二次代謝遺伝子が存在することが明らかになってきたが, ほとんどは実験室条件では休眠状態にあり,利用することができない。情報伝達系を攪乱することにより, 二次代謝遺伝子を活性化して,膨大な数の二次代謝遺伝子を活かすことを可能にすることを目指している。 今回、二成分情報伝達系を攪乱することにより,固体培養条件では液体培養条件とは異なる化合物の生産 誘導が可能であることを報告する。

【方法と結果】二成分情報伝達系下流で働くp38 MAPキナーゼOsm1の遺伝子破壊株および,Osm1と二成分 情報伝達系のHPtの二重遺伝子破壊株を用いて解析を行った。Osm1遺伝子破壊株の固体培養条件で,ポリ ケタイド-非リボソームペプチド(PK-NRP)融合化合物であるテヌアゾン酸の生産が誘導された。テヌア ゾン酸はAlternaria属糸状菌等が生産するマイコトキシンであり、タンパク質合成を阻害する。また、抗腫 瘍活性などの生理作用も報告されている。Osm1遺伝子破壊によるテヌアゾン酸生産誘導とエピジェネテ ィックな制御との関連を解析するために、野生型株をヒストン脱アセチル化酵素阻害剤(SAHA)とDNA メチル化阻害剤(5-azacytidine)で処理したが、生産誘導は認められなかった。この結果から、Osm1遺伝 子破壊株では、これらの化合物による生産誘導とは異なるメカニズムで生産誘導されていることが示唆さ れた。

本研究の一部は、生研センターイノベーション創出事業による支援を受けた。

Induced production of a PK-NRP hybrid compound by disturbance of the two-component signal transduction system in the rice blast fungus

Choong-Soo Yun, Takayuki Motoyama, Toshiaki Hayashi, Hiroshi Hirota, Hiroyuki Osada

(Chem. Biol., RIKEN ASI)

P-66

牧草共生糸状菌 Epichloë festucaeの宿主植物への全身的感染における低分子量Gタンパク質 Cdc42 の役割

<u>榧野友香</u>・竹本大吾(名大院・生命農学)

E. festucae はイネ科牧草の細胞間隙で成育し,共生関係を確立する糸状菌エンドファイトである。本菌 は宿主植物内において,菌糸先端ではなく菌糸の中間が伸長することで,宿主植物と同調した菌糸成育を 可能としていることが報告されている。これまでに,エンドファイトの活性酸素生成酵素 NoxA が宿主と の共生関係を確立するために必要であること,NoxR と低分子量 G タンパク質 RacA が NoxA の活性化因 子として共生確立に関与していることが解っている。*noxA*,*noxR* および *racA* 破壊株は宿主植物内で過剰 な菌糸成育を示して植物を枯死させてしまうため,宿主植物との同調した菌糸生育に必要であると考えら れる。これまでに,RacA と高い相同性を示す Cdc42 の機能を RacA と比較解析し,RacA と Cdc42 がそれ ぞれ NoxR と BemA という異なる Nox 複合体構成因子と結合すること,*racA* 破壊株が感染した宿主植物 は矮化・枯死するのに対し,*cdc42* 破壊株が感染した植物は健全に生育できることを報告してきた。今回, *cdc42* 破壊株に GFP を発現させ,宿主植物内での菌糸生育を詳細に観察したところ,野生株では宿主植物 と同調した菌糸の進展が宿主植物の全身で観察されるのに対し,*cdc42* 破壊株では葉身基部において菌糸 が断片化しており,葉身上部において菌糸が検出されなかった。この結果より,*cdc42* 破壊株は菌糸細胞 の中間伸長を行うことができなくなったことで,宿主植物への全身的な感染能を失っていることが示唆さ れた。

Function of small G protein Cdc42 in intercalary hyphal growth of fungal endophyte *Epichloë festucae* in host

plant

Yuka Kayano, Daigo Takemoto (Grad. School Bioagr. Sci., Nagoya Univ.)

P-67

Isolation of a gene involved in the growth inhibition of grass pathogens by fungal grass

- 67 -

endophyte Epichloë festucae

Jennifer Niones, Takushi Hashikawa and Daigo Takemoto (Graduate School of Bioagricultural Sciences, Nagoya University)

While much has been reported on the ability of endophyte to protect its host from pathogens, the mechanisms of fungal endophyte in plant protection against pathogens are least understood. In this study, we screened for *Epichloë festucae* isolates, which could inhibit the mycelial growth of grass pathogens in axenic culture. One of the isolates, Ef437, significantly inhibits the mycelial growth of several grass pathogens. Through restriction enzyme-mediated integration (REMI) mutagenesis of this isolate, we identify several mutants that have lost its ability to inhibit the pathogen. One of the mutants, 830, contains plasmid insertion in the promoter region of a transcription factor Vib-1. In *Neurospora crassa*, Vib-1 is known as a transcriptional regulator that is essential for the expression of the genes involved in non-self recognition and promotion of cell death. Confocal microscopy of GFP under the control of *vib-1* promoter introduced in *E. festucae* revealed that expression of *vib-1* is induced only in endophyte mycelia, which has an encounter with the pathogens.

P-68

担子菌酵母 Cryptococcus neoformans の DBB 染色反応と PMT2 遺伝子の関与 <u>清水公徳</u>,今西由巳,川本進 (千葉大・真菌センター)

担子菌酵母と子嚢菌酵母は、ジアゾニウムブルーB(DBB)染色により区別される。すなわち、DBBの 添加により担子菌酵母のコロニーは赤色を呈するのに対し子嚢菌酵母のそれは染色されないが、そのメカ ニズムは不明である。本研究では、DBBによる染色メカニズムについて分子遺伝学的アプローチを試み た。

病原性担子菌酵母 Cryptococcus neoformans 野生型株 B4500 に Agrobacterium ランダム挿入変異処理を施 した。出現したハイグロマイシン耐性コロニーおよそ 10,000 個から DBB 染色陰性あるいは呈色減弱株 20 個を選抜した。戻し交配によりハイグロマイシン耐性と DBB 染色に関する表現型が連鎖した株をスクリ ーニングした結果, DBB 染色陰性を示す DBB14 株を得た。TAIL-PCR 法により DBB14 株のゲノムに挿入 された T-DNA 断片の周辺部位を増幅し,その塩基配列を決定,解析したところ,CNJ01930 (PMT2) と タグされた遺伝子に T-DNA の挿入が認められた。本遺伝子の翻訳産物は protein-O-mannosyltransferase と 高い相同性を有していた。PMT2 遺伝子破壊株を構築し DBB 染色試験を行ったところ,DBB14 株と同様 に DBB 染色陰性を示したことから, C. neoformans において PMT2 遺伝子は DBB 染色反応に不可欠である ことが明らかとなった。

Cryptococcus neoformans PMT2 gene is required for DBB staining

<u>Kiminori Shimizu</u>, Yumi Imanishi, Susumu Kawamoto (Medical Mycology Res. Cent., Chiba Univ.)

P-69

病原性真菌 A. fumigatus を弱毒化するマイコウイルスの探索とその性状解析

- 68 -

<u>八原美沙¹</u>,高橋梓²,森山裕充³,五ノ井透² (¹千葉大学・医学薬学府,²千葉大・真菌センター,³農工 大)

アスペルギルス症は、主に Aspergillus fumigatus によって引き起こされる。同菌は呼吸器疾患およびアレ ルギーの原因となるほか、全身に感染して重篤化する。しかし医薬用抗真菌薬は種類が極端に少なく、薬 剤耐性菌の出現といった問題を抱えており、新たな薬剤の開発が強く望まれている。そこで A. fumigatus の弱毒化に関与することが期待されるマイコウイルスを探索し、抗真菌薬として応用を目指す。これまで に、A. fumigatus のマイコウイルスは partitivirus (AfuPV-1)と chrysovirus (AfuCV)の2種がすでに報告され ているが、病原性抑制効果のあるウイルス株は見つかっていない。

我々は、国内で分離された A. funigatus 44 株(臨床分離株および環境分離株)から、dsRNA を精製することにより、4 株のマイコウイルス保有株を検出した。得られたウイルスはそのバンドパターンから、1. partitivirus、2. 配列未決定種、3. chrysovirus と配列未決定種の2 重感染株、4. chrysovirus に近い新種、であることが推測された。そこで次世代シークエンサー(Roche 社 GS junior)を用い、ウイルスのゲノム配列の決定を試みた。

次に、単胞子分離法によりウイルスフリー株の作製を行った。得られたウイルスフリー株はウイルス保 有株と、形態・生育速度・浸透圧耐性・薬剤耐性などの表現型を比較した。最後に、マウスにそれぞれの株 を経気道感染させ、ウイルスフリー株とウイルス保有株との病原性を比較した。当日は、これらの結果に ついて報告する。

Isolation and characterization of 4 Mycoviruses in opportunistic pathogen Aspergillus fumigatus

Misa Yahara¹, Azusa Takahashi-Nakaguchi², Hiromitu Moriyama³, Tohru Gonoi²

(¹Grad. School of Medical and Pharm. Sci., Chiba Univ., ²MMRC, Chiba Univ., ³Tokyo Univ. of Agric. & Tech.)

P-70

イネいもち病菌における DNA 二本鎖切断誘導系を用いた遺伝的変異機構の解析 と遺伝子ターゲッティング法への応用

荒添貴之,用之丸哲也,大里修一,*有江力,桑田茂 (明治大農・*農工大農)

イネいもち病菌 (Magnaporthe oryzae) はイネの重要病原菌であり,本菌の進化機構の解明や病原性関連 遺伝子の探索は重要な課題である。DNA 二本鎖切断 (DSBs) 修復経路の一つである非相同末端結合 (NHEJ)の関連遺伝子を破壊した変異株は,分生子形成能や病原性を保持したまま非常に高い頻度で遺伝 子破壊が可能となることが報告されている (Fungal Genet. Biol. 2007 45; 68-75)。このことは,破壊株のも う一つのDSBs 修復経路である相同組換え (HR) 修復系が本病菌の病原性や遺伝子ターゲッティング機構 において重要な役割を担うことを示唆している。我々は現在までに本菌の HR がストレス環境下における ゲノム応答として機能すること,新たな病原性獲得に寄与することを実証しており,18 塩基認識の制限酵 素遺伝子 I-Sce I を用いた人為的 DSBs 導入系の確立に成功している (平成 23, 24 年度)。そこで相同配列の 有無による DSBs 修復様式の解析をおこない,その知見を遺伝子ターゲッティング法へ応用した。相同配 列を持たない系統において DSBs の導入により広範囲 (約 4000 bp~)の欠失が高い割合で生じるのに対し て,相同配列を有する系統では欠失の割合が減少し,大幅に HR 修復の割合が上昇することを見出した。 また,約 15 bp 間隔で silent mutation を挿入し,印をつけた相同配列を用いることで,本菌の HR は切断部 位近傍 (約 100 bp) において生じ易いことを明らかにした。以上の結果から,本菌の HR は DSBs により 誘導され,ゲノム内に散在するエクトピックな相同配列を鋳型とすることで,ゲノムの安定化と多様性の 創出との双方に貢献していることが考えられた。遺伝子ターゲッティング法への応用では,標的遺伝子内 に DSBs を導入することでその効率が約 100 倍程度まで向上し,供給する相同配列は環状プラスミドを用 いてもその効率を維持できることを確認した。

Artificial DSBs induce various genetic variations and their application in gene targeting in Rice blast fungus

Takayuki Arazoe, Tetsuya Younomaru, Shuichi Ohsato, * Tsutomu Arie, Shigeru Kuwata

(Sch. Agric., Meiji Univ.; *Grad. Sch. Agric. Sci., Tokyo Univ. of Agric. & Tech.)

P-71

イネいもち病菌を用いたクロラムフェニコールの新規作用点の探索

69

西脇綾香,井上雅高,後藤麻紀子,鎌倉高志 (東理大院理工·応生)

イネいもち病菌は感染の際に必須な器官である付着器を形成する。この付着器形成という現象は、真核 生物において最も単純な細胞分化のモデルの一つであると考えられる。細胞分化プロセスには一般に多く の遺伝子が関与しており、それだけ阻害されうるポイントも多いことが知られている。そのため、本菌の 付着器形成が各種の細胞内因子を阻害する化合物に対して非常に鋭敏に反応する実験系として利用が可 能であると考えた。本研究は、このような実験系を用いて、各種化合物の新たな作用を探索し、その分子 標的を同定することを目的としている。本菌に様々な既知の薬剤を作用させたところ、原核生物のタンパ ク質合成を阻害する抗生物質クロラムフェニコール(Chloramphenicol: Cm)が、付着器形成を特異的に 阻害した。本菌は真核生物であることから、本菌に対する Cm の新規作用点が存在することが示唆された。 また、Cm はヒトに対しても作用点未知の強い副作用を示すことから、Cm が真菌とヒトとで共通の作用 点に作用している可能性も考えられる。そこで新規作用点の探索を目的として、Cm と結合すると思われ る標的候補ペプチドのT7 ファージディスプレイ法による取得を試みた。その結果、ホスファターゼ様タ ンパク質の一部と相同性の高い標的候補ペプチド配列を取得した。このタンパク質をコードしている遺伝 子を本菌において過剰発現させ、野生株では付着器形成を阻害する濃度のCm を作用させたところ、付着 器形成能が回復した。この回復が Cm の濃度依存的に弱まったことからも、このタンパク質が本菌におけ る Cm の標的であることが示唆された。現在、この遺伝子に注目しさらに解析を進めている。

Search for the novel molecule target(s) of Chloramphenicol in Magnaporthe oryzae.

Ayaka Nishiwaki, Masataka Inoue, Makiko Goto, Takashi kamakura (Tokyo Univ. of Sci.)

P-72

イネいもち病菌のキチンデアセチラーゼ相同タンパク遺伝子 CBP1 の機能解析 <u>吉田翔</u>,黒木美沙,大野優子,中嶋佑一,鎌倉高志 (東理大院理工・応生科)

イネいもち病菌 Magnaporthe oryzae は宿主植物への侵入において付着器と呼ばれる感染特異的器官を 形成する。この付着器形成は、接着表面の硬度、疎水性度などの物理的シグナルや、クチクラワックスな どの植物由来成分によって誘導されることがわかっているが、その詳細な分子機構は未知な部分が多い。

その分子機構を解明することを目的に,付着器形成誘導時において高い発現特異性を示す遺伝子として キチンデアセチラーゼ相同タンパク遺伝子 *CBP1*(chitin binding protein 1)を単離した。*CBP1*の機能を探る ため遺伝子破壊株を作製しその形質を調べたところ、物理的シグナルのみが存在する疎水性人工固体基質 上において, *CBP1* 遺伝子破壊株の付着器形成率は野生株と比べ顕著に低下したが、植物由来成分の添加 によって野生株と同等まで付着器形成率が回復したため, *CBP1* は物理的シグナルの認識に関与すると考 えられた。また,極親水性人工固体基質上において野性株では植物由来成分存在下で付着器を形成するの に対し, *CBP1* 遺伝子破壊株では付着器をほとんど形成しなかった。このことから, *CBP1* は物理的シグナ ルのうち、疎水性ではなく硬度によって誘導される付着器形成シグナルに関与していると推測された。さ らに、PKC の活性化因子であるジアシルグリセロールによる付着器形成への影響の観察の他、キチンデア セチラーゼとしての機能の検証を行った結果、*CBP1* は細胞壁成分であるキチンを脱アセチル化する働き を持ち、硬度の認識によって PKC 経路を活性化することによって付着器形成を誘導する、という可能性 が示された。

The role of Magnaporthe oryzae Chitin-Binding Protein Genes, CBP1 in Appressorium Differentiation

Sho Yoshida, Misa Kuroki, Yuko Ohno, Yuichi Nakajima, Takashi Kamakura

(Dept. of Applied Biological Sci., Tokyo Univ. of Science)

P-73

コムギいもち病菌のエンバクに対する非病原力遺伝子 PAT1 のマッピング

- 70 -

<u>森亮太</u>,井上喜博,中馬いづみ,土佐幸雄 (神戸大院・農学研究科)

イネ科栽培植物いもち病菌(Magnaporthe oryzae)には、植物属レベルで寄生性が分化したいくつかの菌群 が存在する。我々はこれまでに、コムギ菌・エンバク菌がコムギ・エンバクに対して示す特異的寄生性の 解析を行い、エンバク菌のコムギに対する非病原力遺伝子 PWT3、PWT4 の座乗領域をを約 30kb 以下の領 域に絞り込むことに成功している。一方、逆方向の非病原性、すなわち、コムギ菌のエンバクに対する非 病原性は、単一非病原力遺伝子 PAT1 によって支配されていることが明らかとなっている (Oh et al. 2002)。 今回は、PAT1 の単離に向けて、そのマッピングを試みたので報告する。まず、PAT1 をもつコムギ菌 Br48 と PAT1 をもたないエンバク菌 Br58 を交配して得た F₁集団から PAT1 保有菌系(菌系 76Q1)を選抜し、 Br58 と戻し交雑することにより PAT1 分離 BC₁F₁集団 (80 菌系)を作出した。これらをエンバク品種 (cv. Shokan, Pc-38)に接種したところ、非病原性菌系と病原性菌系の分離比が 1:1 に適合した。この結果をもと に、BC₁F₁80 菌系における Pat1 座の遺伝子型を決定した。続いて、SSR マーカーを用いた bulked segregant analysis を行い、四つの PAT1 リンクマーカー(MGM82, MGM83, MGM224, MGM433) を見出した。80 菌 系からなる PAT1 分離集団を用いて分離分析を行った結果、これらが PAT1 と連鎖することが確認された。 SSR マーカーMGM82, MGM83, MGM224, MGM433 は、Zheng et al. (2008) において第三染色体にマッピ ングされていることから、PAT1 は第三染色体に座乗することが示唆された。

Molecular mapping of PAT1, an avirulence gene of Triticum isolates of Magnaporthe oryzae on oat.

Ryota Mori, Yoshihiro Inoue, Izumi Chuma, Yukio Tosa (Graduate School of Agricultural Science, Kobe Univ.)

P-74

感染中のいもち病菌が分泌する AVR-Pia タンパク質はごく微量である

<u>佐藤佑樹¹</u>,尾瀬農之²,寺内良平³,曾根輝雄¹ (1北大農院・応生科,2北大薬院・創薬,3岩手生工研)

イネいもち病菌は感染時にエフェクタータンパク質や非病原性タンパク質を分泌するが、その分泌量や イネ側の認識に必要な量などについての報告はなされていない。そこで、非病原性タンパク質 AVR-Pia の分泌量を定量するため、組換えタンパクと特異的な抗体の作成を試みた。大腸菌を用いて発現させた組 換え AVR-Pia (rAVR-Pia)を、抵抗性遺伝子 Pia を持つイネの葉に有傷接種したところ、過敏感反応様の褐 変が観察された。また、rAVR-Pia を接種した Pia イネ葉で処理後 24 時間までに抵抗性関連遺伝子 PR12 (Mitsuhashi I. et al., 2008)の発現誘導が認められた。

rAVR-Pia を利用して作成した抗 AVR-Pia 抗体の特異性を検証した。その結果,抗 AVR-Pia 抗体はいも ち病菌由来の天然 AVR-Pia を特異的に認識した。また,ECL 法によって検出されたバンドの発光量から いもち病菌が感染時に分泌する AVR-Pia を定量したところ,葉鞘新鮮重 1g あたり約 0.47ng (6.45×10⁻² pmol)であった。

これらの結果から rAVR-Pia は Pia イネに認識されうる正しい構造を持ち,抵抗反応を誘導することが 示唆された。親和性イネ感染時の AVR-Pia 分泌量が定量できたことで Pia イネが感染初期のごく微量の AVR-Pia を認識し,抵抗反応を誘導していることが明らかとなった。また,抗 AVR-Pia 抗体が天然 AVR-Pia を特異的に認識することから,これまで観察が困難だった,非親和性イネにおける抵抗反応誘導時の AVR-Pia の動態や局在を,免疫染色によって可視化できる可能性が示された。

A trace amount of AVR-Pia protein is secreted from Magnaporthe oryzae during infection

Yuki Sato¹, Toyoyuki Ose², Ryouhei Terauchi³ and Teruo Sone¹

(¹Graduate school of Agriculture, and ²Research faculty of Pharmacology, Hokkaido Univ., ³ Iwate Biotechnology Research Center)

P-75

イネいもち病菌マイコウイルス由来弱毒化タンパク質が宿主細胞に及ぼす生育阻

害メカニズムのパン酵母を利用した解析

<u>太田智子¹</u>,浦山俊一¹,福原敏行¹,有江力¹,寺岡徹¹,高橋梓²,東江昭夫²,五ノ井透²,森山裕充¹ (¹東京農工大院・生物制御科,²千葉大・真菌センター)

Magnaporthe oryzae chrysovirus1(MoCV1)はイネの重要病害菌であるイネいもち病菌に感染し,生育阻害 や弱毒化を引き起こすマイコウイルスである。MoCV1 の5 つのタンパク質をそれぞれパン酵母で発現さ せると,dsRNA4 ORF を過剰発現した酵母細胞では,液胞の肥大化や細胞質の顆粒化といった形態異常 や,生育不良が観察された。さらに微生物培養装置を用いて,ORF4 単独のコンストラクトと,dsRNA4 全長のコンストラクトをそれぞれ導入した酵母を培養し,細胞数を表す吸光度の増加速度や生菌細胞数の 推移,細胞形態の異常をそれぞれ観察したところ,ORF 単独導入株よりも dsRNA 全長導入株の方がより 強い生育阻害を示した。微生物培養装置で 18 時間,30 時間培養した酵母サンプルからそれぞれ RNA を 抽出し,次世代シークエンサー(Illumina 社 MiSeq)を用いて ORF4 導入による酵母細胞の遺伝子発現変化 を調べた。その結果,各培養時間の ORF4,dsRNA4 全長導入酵母でそれぞれ発現量が上昇・下降してい る遺伝子が多数認められた。そこで dsRNA4 配列に含まれる 5'及び 3'UTR 配列中に,転写や翻訳促進領 域,または mRNA 安定化領域などが存在するかについても解析を進めている。

Analysis of growth inhibition mechanism caused by the ORF4 protein of Magnaporthe oryzae chrysovirus1.

Tomoko Ohta¹, Syunichi Urayama¹, Toshiyuki Fukuhara¹, Tsutomu Arie¹, Tohru Teraoka¹, Azusa

Takahashi-Nakaguchi², Tohru Gonoi², Akio Tohe², Hiromitsu Moriyama¹.

(¹Dept. Appl. Biol. Sci., Tokyo Univ. of Agric. and Tech., ²MMRC, Chiba Univ.)

P-76

Alternaria alternata N18株に生育阻害を引き起こすマイコウイルスのゲノム解析と AK 毒素産生に及ぼす影響調査

<u>竹下佳那</u>¹,岡田亮¹,福原敏行¹,有江力¹,寺岡徹¹,江草真由美²,児玉基一朗²,森山裕充¹ (¹農工大院・農,²鳥取大院・農)

Alternaria alternata N18株はニホンナシに病原性で,胞子発芽時にAK毒素(デカトリエン酸エステル)を 分泌して感染葉に黒斑症状を引き起こす。N18株は二本鎖 RNA をゲノムとするマイコウイルスに感染し ており,ウイルス感染株はウイルスフリー化株と比べて顕著な生育阻害を示す。ウイルス感染株とフリー化 株の病原性を検定したところ,感染株はフリー化株よりも激しい病斑をナシ葉に引き起こした。そこで宿主 菌に生育阻害を引き起こす因子の同定を目的に、N18株マイコウイルスの塩基配列を解析した。本ウイル スは5分節のゲノムを有し、RdRp 領域における分子系統解析の結果、イネいもち病菌弱毒化マイコウイル ス MoCV1(Magnaporthe oryzae chrysovirus 1)と近縁であることが判明した。また、RNA2の ORF タンパク質 は、MoCV1 において宿主に生育阻害を引き起こす ORF4 タンパク質と高い相同性を示したことから、この タンパク質が N18株の生育阻害に関与していることが示唆された。さらに、ウイルス感染の AK 毒素産生 量に及ぼす影響を調べるため、HPLCを用いてウイルス感染株とフリー化株の分生子発芽液中の AK 毒素 の定量を試みている。

Sequence analysis of mycovirus attenuating A.alternata strain N 18 and analysis of AK toxin production

<u>Kana Takeshita</u>¹, Ryo Okada¹, Toshiyuki Fukuhara¹, Tsutomu Arie¹, Tohru Teraoka¹, Mayumi Egusa², Motoichiro Kodama², Hiromitsu Moriyama¹

(¹Faculty of Agric., Tokyo Univ. of Agric.& Tech. ² Faculty of Agric., Tottori Univ.)

P-77

キャベツ萎黄病菌における SIX4 の機能はトマト萎凋病菌と同じか?

— 72 —
<u>柏</u> 毅, 稲見 圭悟¹, 藤永 真史², 小木曽秀紀², 寺岡 徹, 有江 力(農工大院連農,¹現ブリヂスト ン中研,²長野野花試)

SIX4 はトマト萎凋病菌 Fusarium oxysporum f. sp. lycopersici (Fol) レース 1 とキャベツ萎黄病菌 f. sp. conglutinans (Foc) のみが保持し,宿主植物への感染時に発現される(柏ら 2010)。Fol レース 1 の SIX4 を破壊すると,萎凋病抵抗性品種(I) に感染できるようになることから,Fol では SIX4 は非病原力遺伝子として機能している (Houterman 2008)。Fol と Foc の SIX4 は,遺伝子周辺を含む約 2 kb の塩基配列が 99%一致しており,いずれの SIX4 も約 2 Mb の小型染色体に座乗していた。そこで,Foc の SIX4 が Fol の SIX4 と同様の機能を有するのか,Foc の SIX4 (FocSIX4) を二回相同組換え法によって破壊して解析した。 $\Delta FocSIX4$ 株は萎黄病抵抗性(YR) キャベツ品種の抵抗性を打破せず,逆に YR 品種だけでなく感受性品種でも病原力が低下した。また、 $\Delta FocSIX4$ 株の病原力は FocSIX4 の相補によって復帰した。以上から,FocSIX4 はキャベツ萎黄病菌では病原力に関与することが明らかとなり,トマト萎凋病菌における機能(非病原力)とは異なった。緑色蛍光タンパク質遺伝子を導入してキャベツ根部での感染挙動を観察すると、 $\Delta FocSIX4$ 株のキャベツ根部への侵入は親株 Cong:1-1 株よりも遅延したことから,FocSIX4 が感染初期段階における病原力に関与していることが示唆された。

SIX4 in the cabbage yellows fungus plays different role than in the tomato wilt fungus

<u>Takeshi Kashiwa</u>, Keigo Inami¹, Masashi Fujinaga², Hideki Ogiso², Tohru Teraoka, Tsutomu Arie (Grad. Sch. Agric. Sci., Tokyo Univ. of Agric. & Tech., ¹Present address: Central Res. Bridgestone Corp., ²Nagano Veg. and Ornam. Crop. Exp. Stn.)

P-78 (O-18)

出芽酵母の Spindle Position Checkpoint (SPOC)構成要素はウリ類炭疽病菌において 付着器分化過程における適切な細胞周期の進行に関与する

<u>深田史美¹</u>,坂口 歩²,久保康之¹(京都府大院・生環¹、生物研²)

ウリ類炭疽病菌はウリ科植物に炭疽病を引き起こす植物病原糸状菌である。本菌は感染過程において分 生胞子の先端部での付着器形成,侵入菌糸の宿主内成長といった一連の形態形成を伴い,感染を成立させ る。我々はこれまでにアグロバクテリウム形質転換法により,ウリ類炭疽病菌の付着器形成欠損変異株 coQ-1を得ている。coQ-1の破壊候補遺伝子における推定コードアミノ酸配列は,出芽酵母のBUB2と高い 相同性を示し,このホモログ遺伝子をCoBUB2と命名した。出芽酵母のBUB2は、細胞分裂制御に関与する Spindle Position Checkpoint (SPOC)の構成要素である。CoBUB2の遺伝子破壊実験を行った結果, cobub2破 壊株は付着器の形態異常,宿主植物への病原性低下を示した。そこで,cobub2破壊株における核分裂の挙 動を解析するため,付着器分化過程での核局在および紡錘体観察を行った。その結果,野生株では培養開 始4時間後,付着器形成に伴い紡錘体が出現し核分裂が行われるのに対し,cobub2破壊株では培養開始2時 間後の未発芽胞子において核分裂が行われ、2核となる胞子の割合が顕著に増加した。そこで,付着器分 化過程における細胞周期を検討するため,S期阻害剤およびM期阻害剤を用いて核分裂を観察した結果, 破壊株でのG1/S期の移行時期が,野生株と比較して約2時間早まることが認められた。以上より,ウリ類 炭疽病菌の付着器分化過程において,CoBUB2はG1期の維持,あるいはS期の適切な開始時期に関与して おり,M期の制御因子である出芽酵母のBUB2とは異なる機能を有する可能性が示唆された。

Spindle Position Checkpoint (SPOC) component in Saccharomyces cerevisiae is involved in proper cell cycle

progression during appressorium development in Colletotrichum orbiculare

Fumi Fukada¹⁾, Ayumu Sakaguchi²⁾, Yasuyuki Kubo¹⁾

(¹⁾Life and Environmental Sciences, Kyoto Prefectural Univ., ²⁾National Institute of Agrobiological S

P-79

ウリ類炭疽病菌における低分子量Gタンパク質CoCdc42, CoRac1の機能解析

— 73 —

<u>河下美都里</u>・幸前有香・野村拓将・久保康之・辻 元人 (京府大院生環)

分裂酵母において細胞端マーカータンパク質 TEA1 が細胞極性の制御に関与することが知られている。こ れまでにウリ類炭疽病菌において TEA1 ホモログ CoKEL2 の破壊株が人工基質上で側部発芽をする異常な 付着器を形成することを明らかにしている。本菌の感染器官分化と細胞極性制御の関連について明らかに することを目的として今回,酵母における極性形成の主要な制御因子である低分子量 G タンパク質 Cdc42 のホモログ遺伝子をウリ類炭疽病菌より 2 種単離(CoCdc42,CoRac1 と命名)し、その破壊株の性状解析 を行った。cocdc42 破壊株は培地上でのコロニー生育にやや遅延が見られ、また分生子形成量も低下した。 宿主キュウリ葉への接種試験の結果、野生株と比較して病斑形成能の低下が認められた。そこで破壊株の 感染器官形成能について調べたところ、胞子は長楕円型の異常形態を示し、発芽の遅延や発芽部位の異常 が認められた。しかしながら、発芽後は宿主への侵入能を有する付着器を形成した。以上のことから CoCdc42 は細胞極性の制御に必須の因子ではないが、欠損により多面的な異常が生じることが明らかとな った。一方,corac1 破壊株のコロニー生育は野生株や cocdc42 破壊株と比較して顕著に遅延し、異常なコロ ニー形態を示した。現在,CoCdc42 と CoRac1 の局在や破壊株における細胞骨格の挙動について調べている。

Functional analysis of small GTPases, CoCdc42 and CoRac1, from Colletotrichum orbiculare.

<u>Kawashimo Midori</u>, Kozen Yuka, Nomura Takumasa, Kubo Yasuyuki, Tsuji Gento (Grad.sch.of Life and Environ. Sci.of Kyoto Prefectural Univ.)

P-80 (O-19)

イチゴ黒斑病菌の 1.0 Mb 染色体にコードされる AF 毒素生合成遺伝子クラスターの同定

<u>原歩美¹</u>,近藤日佳理¹,播本佳明¹,間瀬千晶¹,張祐介¹,山本幹博²,秋光和也³,柘植尚志¹ (¹名大 院・生命農,²岡山大・農,³香川大・農)

イチゴ黒斑病菌 NAF8 株の AF 毒素生合成遺伝子(AFT)クラスターは,1.0 Mb の conditionally dispensable 染色体にコードされている。先に、本染色体の塩基配列を決定し、両腕に対応する 2 つのコンティグ(F1 および F2)からそれぞれ 158 個,127 個の遺伝子を同定した。なお、AFT 遺伝子群はコンティグ F2 の 392 kb 領域にクラスターとして存在し、この領域には 24 個の推定 AFT 遺伝子が 2~7 コピー分布する。これ ら 24 遺伝子のうち 17 個については、すでに AF 毒素生産における機能を同定した。今回、この領域にコ ードされる、AF 毒素生産に不可欠な転写制御因子 AftR によって制御される遺伝子の同定を試みた。1.0 Mb 染色体の全遺伝子について、野生株とAFTR サイレンシング株における転写レベルをリアルタイム RT-PCR 法によって比較解析した。その結果、AFTR サイレンシング株では、24 個の AFT 遺伝子すべての転写レベ ルが顕著に低下し、これら遺伝子が AftR によって正に制御されることが明らかとなった。さらに、遺伝 子破壊によって、機能未解析の 7 遺伝子について AF 毒素生合成における機能を解析した。その結果、7 遺伝子のうち 4 個が AF 毒素生産に不可欠であり、残り 3 個は毒素生産を抑制する遺伝子であることが明 らかとなった。

Identification of AF-toxin biosynthetic genes cluster encoded by the 1.0-Mb chromosome in the strawberry pathotype of *Alternaria alternata*

<u>Ayumi Hara¹</u>, Hikari Kondou¹, Yoshiaki Harimoto¹, Chiaki Mase¹, Yusuke Cho¹, Mikihiro Yamamoto², Kazuya Akimitsu³, Takashi Tsuge¹

(¹Grad. Sch. Bioagric. Sci., Nagoya Univ., ²Fac. Agr., Okayama Univ., ³Dept. Agr., Kagawa

P-81

リンゴ斑点落葉病菌の1.3 Mb 染色体にコードされる AM 毒素生合成遺伝子クラス

- 74

ターの同定

<u>川瀬めぐみ</u>,後藤千保,播本佳明,児玉基一朗,山本幹博,尾谷浩,柘植尚志 (名大院生農・鳥取大・ 岡山大)

リンゴ斑点落葉病菌 IFO8984 株の AM 毒素生合成遺伝子(AMT)クラスターは、1.3 Mb の小型染色体 にコードされている。先に、本染色体の塩基配列を決定し、両腕に対応する 2 つのコンティグ(M1 およ び M2)からそれぞれ 146 個、184 個の遺伝子を同定した。さらに、コンティグ M2 にそれぞれ 1~4 コピ ー存在する 17 個の推定 AMT 遺伝子を同定した。今回、IFO8984 株を毒素生産培地(MCD)と非生産培地 (PDB)で培養し、1.3 Mb 染色体にコードされる全遺伝子の転写レベルをリアルタイム RT-PCR 法によっ て比較解析した。その結果、17 個の推定 AMT 遺伝子の転写レベルは MCD 培養時に上昇することが明ら かとなり、これら遺伝子が AM 毒素生合成に関与することがさらに示唆された。一方、他のほとんどの遺 伝子はむしろ PDB 培養時に転写が誘導された。さらに、遺伝子破壊によって、推定 AMT 遺伝子の AM 毒 素生合成における機能を解析し、17 遺伝子のうち 13 個が毒素生合成に関与することを明らかにした。

Identification of AM-toxin biosynthetic gene cluster encoded by the 1.3-Mb chromosome in the apple pathotype of *Alternaria alternata*

Megumi Kawase, Chiho Goto, Yoshiaki Harimoto, Motoichiro Kodama, Mikihiro Yamamoto, Hiroshi Otani,

TakashiTsuge

(Univ. of Nagoya, Univ. of Tottori, Univ. of Okayama)

P-82

パイロシークエンス法を用いたキュウリ褐斑病菌の殺菌剤耐性変異検出の構築 新福剛、坂野真平、石上陽平、一石昭彦、藤村真(東洋大院・生命科学)

作物病害の防除に農業用殺菌剤が果たす役割は大きいが,近年開発されている殺菌剤は,耐性菌の出現 リスクが高く,ほとんどの種類の殺菌剤で耐性菌の報告がある。しかし,耐性菌の分布は圃場単位で異 なっており,有効な薬剤の選抜には迅速かつ簡便な圃場単位のモニタリング手法が必要となる。多くの殺 菌剤の主要な耐性変異が特定塩基の置換であることから,蛍光ハイブリプローブ法を用いて,融解温度曲 線解析から耐性変異を同定する手法を採用してきた。この方法では,混合サンプルから耐性菌の比率を融 解温度曲線ピーク比として簡単に算出できる。しかし,ベンズイミダゾール剤やボスカリド剤のように, 複数種の耐性変異が存在する薬剤では,蛍光プローブ法で各耐性変異の比を求めることには限界がある。 そこで,本研究では,パイロシークエンス法による診断について検討した。パイロシークエンス法は,塩 基配列の決定により変異を同定してゆくが,取り込まれる塩基量をルシフェラーゼによる発光量として定 量できる。キュウリ褐斑病菌のベンズイミダゾール耐性変異(beta-tubulin の E198A, E198K および F200Y 変異)を検出するために,PCR 増幅プライマー,1本鎖 DNA を回収するためのビオチン化プライマーお よびシークエンスプライマーを設計した。その結果,それぞれの耐性変異を明確に検出できると同時に, 混合サンプルから複数種の変異の比を概算できることが明らかになった。同様にボスカリド耐性変異(コ ハク酸脱水酵素 SdhB の H278R と H278Y 変異)を検出する系を構築した。現在,圃場サンプルを用いて, キュウリ栽培施設ごとの耐性菌分布を解析中である。

Fungicide resistance monitoring using pyrosequencing in cucumber corynespora leaf spot fungus Corynespora cassiicola

Tsuyoshi Shimpuku, Shinpei Banno, Yohei Ishigami, Akihiko Ichiishi, Makoto Fujimura

(Fac. of Life Sci., Toyo Univ.)

P-83

ウリ類炭疽病菌が分泌するエフェクター分子の植物細胞死誘導および抑制能と感

— 75 —

染過程における局在解析

入枝泰樹,高野義孝 (京大・院・農)

ウリ類炭疽病菌 Colletotrichum orbiculare はウリ科植物に加えて,Nicotiana benthamiana にも感染する植物 病原糸状菌である.当研究室では,これまでにN. benthamiana に細胞死を誘導する本菌のエフェクター分 子 NIS1 を同定している.以前の報告において,多犯性炭疽病菌 C. gloeosporioides の CgDN3 は過敏感細胞 死の抑制に関与する可能性が示唆されていたが,今回,ウリ類炭疽病菌の CgDN3 オルソログ (CoDN3) が,NIS1 誘導型細胞死の抑制能を持つエフェクター分子であることを報告する.さらに,CoDN3 遺伝子 のプロモーター活性に関して,GFP を用いたレポーター解析をおこなった結果,CoDN3 プロモーターは, NIS1 と同様に活物寄生段階において高い活性を示し,本段階における NIS1 誘導型細胞死の抑制が強く示 唆された.また,両エフェクターと蛍光タンパク質の融合タンパク質を発現させ,本菌の植物感染過程に おける局在観察を行った.その結果,両エフェクターの局在は,付着器が形成する活物寄生型侵入菌糸の 基部周辺において,リング状シグナルとして観察された.一方,エフェクターのリング状シグナルはセロ ファン膜への侵入菌糸の基部周辺では観察されなかった.さらに,付着器を除去した結果,エフェクター シグナルは,侵入菌糸基部周辺に存在する構造体において,その局在を示した.現在,このリング状シグ ナルについて,更に解析を行っている.なお,本研究は生研センター「イノベーション創出基礎的研究推 進事業」の援助を受けて行われた.

The abilities of effectors, secreted by *Colletotrichum orbiculare*, to induce or suppress plant cell death and their subcellular localization during infection

Hiroki Irieda, and Yoshitaka Takano (Grad. School of Agriculture, Kyoto Univ.)

P-84

ウリ類炭疽病菌は,植物表層上における PacC 依存型の環境認識を介して,適切 な侵入様式を選択する

吉野香絵、高野義孝(京大院農)

ウリ炭疽病菌はシロイヌナズナの傷口周辺で従来型のメラニン化した付着器に依存しない侵入様式 (HTE; hyphal tip-based entry)を選択する。今回, ウリ類炭疽病菌がどのようなシグナル認識を介して HTE 型侵入様式を選択するかを検討した。まず, 植物傷口の漏出液が, プラスチック上において HTE 様の形 態分化を誘導する活性を持つこと, さらに漏出液の pH を下げることで活性が失われることを発見した。 この結果に基づき, pH 応答転写因子である PacC のオルソログ遺伝子 (CoPacC)の遺伝子破壊解析を行 った結果, 破壊株は, シロイヌナズナ傷口周辺における HTE 型への選択率を大幅に低下させた。さらに, CoPacC 遺伝子およびその推定下流遺伝子の発現解析を行なった結果, CoPacC および当該下流遺伝子は中 性 pH に加えて高イオンが存在するとより強く誘導された。この結果を支持するかたちで, 無傷な植物体 表面においても, 高イオン存在下で培養すると HTE 型が誘導された。抵抗性の低下したシロイヌナズナ 変異体において, HTE 型侵入様式は, メラニン化付着器による様式よりも, 侵入菌糸を高率で形成する。 これらより, 植物の傷口周辺において, ウリ類炭疽病菌は CoPacC を介し漏出イオンおよび外界 pH を感 知することにより, 適切な侵入様式を選択することが示唆された。さらに, 細胞骨格マーカーを導入した 本菌の形質転換体を作出し, HTE 型の形態形成と従来型のメラニン化付着器型と異なる動態が観察さ れ,発芽後の等方性型の菌糸伸長が推定された。

Colletotrichum orbiculare selects appropriate entry modes via PacC-dependent environmental recognition on

plant surface

Kae Yoshino, Yoshitaka Takano (Grad. School of Agriculture, Kyoto Univ.)

P-85

トウモロコシごま葉枯病菌の病原性と有性生殖におけるオートファジーの関与

— 76 —

<u>住田卓也</u>,泉津弘佑,森田篤,田中千尋 (京大・院・農)

オートファジーは真核生物に保存された細胞内での自己構成成分の主要な分解系の一つであり、植物病 原性糸状菌においては宿主への病原性との関連性が注目を集めている。今回我々は、出芽酵母においてオ ートファジーの開始に関与するとされるキナーゼをコードする遺伝子 Atg1、オートファゴソームの形成に 必要とされるユビキチン様タンパクをコードする遺伝子 Atg8 のトウモロコシごま葉枯病菌におけるオル ソログ遺伝子 ChAtg1, ChAtg8 の破壊菌株を作出した。これらの破壊株の分生子をトウモロコシ葉に接種 すると、著しい病原性の低下が観察された。ChAtg1 破壊株ではわずかに葉への侵入が認められたが、ChAtg8 破壊株では全く認められなかった。これらの破壊株では分生子の発芽率が低下し、その程度は ChAtg8 破 壊株において著しかった。また、ChAtg8 破壊株は野生型株や ChAtg1 破壊株と比べ酸化ストレスに対して 強い感受性を示した。ChAtg1 破壊株及び ChAtg8 破壊株の野生型株との交配試験を行ったところ、これら の破壊株由来の偽子嚢殻は形成されず、雌性不稔を示した。また、野生型株由来の偽子嚢殻中には本来 8 本形成されるはずの子嚢胞子がおよそ 4 本しか観察されなかった。ChAtg1 破壊株を用いた交配によって 得られた子嚢胞子はそのほとんどが野生型であり、ChAtg8 破壊株を用いた交配によって得られた子嚢胞 子は全て野生型であった。即ち、これらの遺伝子の突然変異は子嚢胞子形成過程において致死的であり、 トウモロコシごま葉枯病菌ではオートファジーが有性生殖に必須であることが明らかとなった。

Autophagy is involved in pathogenicity and sexual reproduction in Cochliobolus heterostrophus

Takuya Sumita, Kosuke Izumitsu, Atsushi Morita, Chihiro Tanaka

(Grad. School of Agriculture, Kyoto Univ.)

P-86

トウモロコシごま葉枯病菌における PKA 遺伝子および PKR 遺伝子の機能解析

湯谷智,泉津弘佑,住田卓也,北出雄生,田中千尋(京大・院・農)

cAMP 依存的タンパクキナーゼ A (PKA) は、cAMP シグナル伝達経路の中で最も重要な因子の一つで あり、様々な植物病原菌の病原性に関与することが報告されている。しかし、トウモロコシの主要病原菌 の一つであるトウモロコシごま葉枯病菌(Cochliobolus heterostrophus)ではそれら因子の情報はほとんど 得られていない。そこで、我々は本菌の二種類の PKA 遺伝子(PKA1, PKA2)と PKR 遺伝子(PKR)の破壊 株を作出し、本菌生活史におけるそれらの役割を明らかにしようとした。まず、PKA 欠損株の表現型につ いての調査を行った。PKA2 欠損株は菌叢様相や生育等において野生株と何ら区別出来なかったが、PKA1 欠損株では生育速度が有意に遅くなった。しかし、いずれの欠損株でも付着器形成能などの病原性に関与 する重要な能力は野生株と同等で差は見られなかった。他植物病原菌の既知事例では PKAI ホモログが一 般に病原性を支配すると報告されているが、本菌では PKA1 が単独で病原性に対して支配的な役割をもた ないことが判明した。さらに、本菌における PKA の機能をより詳細に明らかにする為、PKA1 PKA2 二重 変異株の作出を試みた。交配により得られた二重変異株の子嚢胞子は発芽可能であったが、24 時間以内に 生育が完全に停止し、以後、再伸長することはなく致死となった。本結果は、PKA1 ならびに PKA2 が本 菌の基本的生育に必須の役割を重複して担っていることを示唆している。次に、PKR 欠損株について調べ た。本欠損株は、野生株と比較して生育速度ならびに胞子形成能が著しく低下していた。さらに、付着器 形成能ならびに病原性も喪失した。以上の結果から、本菌の PKR 遺伝子は本菌の病原性に関与し、また、 先の PKA 遺伝子の結果も併せて考慮すると、本菌では PKA1 ならびに PKA2 両遺伝子が重複して病原性に 関与していることが明らかとなってきた。

Characterizations of PKA genes and PKR gene of Cochliobolus heterostrophus

Satoshi Yutani, Kousuke Izumitsu, Takuya Sumita, Yuuki Kitade, Chihiro Tanaka

(Grad. School of Agriculture, Kyoto Univ.)

P-87

Cryphonectria parasitica の C 末端脂質付加部位を欠く低分子量 GTP 結合タンパク質

RAS3の性質

山内優輝,高橋拓也,笠原紳 (宮城大学・食産業・環境)

クリ胴枯病(chestnut blight)は、世界三大植物病の一つとして有名で、特に米国アパラチア地方で極め て優勢であったクリ(American chestnut)を半世紀の間に事実上全滅させるほどの被害をもたらした。そ の原因糸状菌 Cryphonectria parasitica は、1900年頃にわが国からニューヨークへの貨物に付着して移入さ れたといわれている。現在、C. parasitica のゲノム解析はほぼ終了しており、さまざまな角度から植物へ の病徴発現メカニズムが解析され、またその制御方法が検討されている。

C. parasitica の低分子量 GTP 結合タンパク質 RAS に関しては、これまでに RAS1, RAS2 が確認されて いるが、本研究では新たに見出された RAS3 について構造・機能解析を行った。RAS3 は他の Ras 関連タ ンパク質にほぼ共通して認められる C 末端領域のファルネシル化部位(CAAX box)を欠くことが大きな 特徴で、その点で動物の Rin および Rit との共通性が認められた。RAS3 をコードする ras3 遺伝子の破壊 と過剰発現を行い、特に ras3 欠損変異が菌糸成長や分生子形成に及ぼす影響を検討した。GFP 融合 RAS3 を発現させて、その局在について観察したところ、細胞表層(細胞膜上)に強い蛍光が認められた。C 末 端 32 アミノ酸を欠失した RAS3 は、この局在を示さず、細胞質全体に分散して発現していた。このこと から、C 末端 32 アミノ酸がファルネシル基に替わり膜結合に寄与している可能性が示された。また、RAS3 の GTP 結合能や GTPase 活性等の生化学的性質を調べるために、大腸菌中で RAS3 を発現し、精製した。

Properties of *Cryphonectria parasitica* small GTP-binding protein RAS3 which lacks C-terminal lipidation site.

Yuki Yamauchi, Takuya Takahashi and Shin Kasahara (Dept. of Env. Sci., Miyagi Univ.)

P-88

糸状菌類で保存されている機能未知遺伝子破壊株の特性解析

<u>井丸直^{1,2}</u>,妹尾史子^{1,2},寺戸志保^{1,2},池田優理子²,岩下和裕^{1,2} (1 広島大院・先端研, 2 酒類研)

> 麴菌(Aspergillus oryzae)のゲノムシーケンス解析によって大半の遺伝子が、機能未知遺伝子であり、その多くが糸状菌類に広く、保存されているとともに米麹などで高発現することが明らかになっている。これらの遺伝子群の解析によって、麹菌を含む糸状菌に特異的でかつ新規の生物分子システムが発見できると考えられる。我々はこれまでに、糸状菌類に保存されている機能未知遺伝子群(cff 遺伝子)より、米麹での発現等の147 遺伝子を対象に遺伝子破壊を行った結果、ホモ・ヘテロを含む130 遺伝子の破壊成功株を得ており、最小培地による固体培地・液体培地の表現型の解析を行っている。

本研究では、得られた麴菌の機能未知遺伝子破壊株ライブラリーを用いて、更なる様々な条件でのフェ ノタイプの形態観察を行った。米麹等のモデルアッセイとして天然物(米粉・小麦粉・大豆粉)培地プレ ートによるコロニーおよびハローの解析を行った。その結果、最少培地と比較して菌糸生育や分生子形成、 ハローが減少する破壊株など特徴的な表現型を示す遺伝子が見出された。また、Hydroxyl urea、 Camptothecin, Tunicamycin, Dithiothreitol等といった特定の合成や機構を阻害する阻害剤耐性試験等を行 った結果、感受性の変化した破壊株等を見出しているので報告する。現在、浸透圧やpH等のストレス応 答試験等を行っており、これらのスクリーニング試験において明らかな表現型が見られたものについては、 今後より詳しい遺伝子機能解析を進める予定としている。

Analysis of phenotype of the cff (conserved among filamentous fungi and function unknown) gene disruptants in

Aspergillus oryzae.

Nao Imaru^{1,2}, Fumiko Senoo^{1, 2}, Shiho Terado^{1,2}, Yuriko Ikeda², Kazuhiro Iwashita^{1,2}

(1 Hiroshima Univ., 2 NRIB)

	A
Arend F. van Peer	
J	D
David Hibbett	
]	H
Hsiang-Ting Huang	
	J
Jennifer Niones	
1	Ν
Nuo Li	
ł	S
Shunsuke Masuo	
č	b
秋山康紀	

い

五十嵐圭日子	36
石田 健	56
石田千絵	50
石堂圭一	38
一瀬桜子	58
伊藤英里子	54
稲葉 梓	41

76	支泰樹	入枝表
67	忠銖	尹 帰

お

 習子	太田智
 歩	大場
 淳	荻原

か

$\frac{73}{2}$
52
1
66
59
57
6
53
'4
5
13
50

く

日下秀行	
國武絵美	

さ

酒井香奈江	32
酒井大介	55
坂口 歩	33
坂本裕一	29
佐藤佑樹	71

79

l

す

鈴木	晃	35
鈴木空	大	57
住田卓	1也	77

せ

泉津弘佑	34
	 υı

た

高橋正和	55
竹下佳那	72
竹谷俊亮	
竹本大吾	
田所隆之	45
田中麻左人	
田中拓未	
田中瑞己	
玉野孝一	25

ち

張	斯来	 37

つ

辻井	雅	
對馬裕	誠	

て

と

堂前圭佑	
土佐幸雄	

な

中沢威人	31
中澤奈美	
中嶋佑一	64
中谷和也	64

に

西川良平	47
西村麻里江	15
西脇綾香	70

は

橋元	話	65
畠山	信太郎	40
林口	拓実	56
原	歩美	
伴	曉彦	65

ひ

東田知洋	53
平本哲也	

ર્જ

深田史美	
藤田将幸	
二神泰基	
古川隆紀	60

ほ

星	浩臣	15

— 80 —

ま

增田裕一郎	. 57
松尾賢人	. 43

み

宮下	基	31, 63
宮武は	な香	51
宮本健	达郎	61

む

村口	元	27

Ł

元杉	i ź	遥	
本山	高	幸	
森	亮	太	

Þ

安田(吉野)庄子	51
矢萩大貴	
八原美沙	
山内優輝	
山田智士	

ゆ

湯谷	智	77

よ

 翔.	吉田
 좖絵.	吉野君
 啓.	吉見

わ

和田朋子	53
渡邉亜也子	62

糸状菌分子生物学研究会 会則

- 本会を糸状菌分子生物学研究会(Fungal Molecular Biology Society of Japan)と呼ぶ。また本会が開 く研究会を糸状菌分子生物学コンファレンス(Conference on Fungal Genetics and Molecular Biology)と呼ぶ。
- 2. 本会は糸状菌の分子生物学、細胞生物学、生化学、生理学、遺伝学などの普及発展を目的とする。
- 3. 本会はその目的を達成するために次の事業を行う。
 - 2. 研究会及び総会の開催。
 - 3. 会報の発行。
 - 4. 関連研究団体との協力事業。
 - 5. その他、必要と思われる事業。
- 4. 本会はその目的に賛同して入会した個人会員及び総会において承認された名誉会員を持って構成する。
- 5. 本会入会希望者は所定の入会申込書を提出し、別に定める入会金を納入するものとする。
- 6. 本会はその運営のため、会長、運営委員若干名および会計監査 1~2 名をおく。任期は 2 年とし、改選 は運営委員の推薦と総会の承認による。
 - (1) 会長は本会を代表し、会務を統括する。
 - (2) 運営委員は運営委員会を構成し会務を審議する。運営委員には庶務、会計、編集担当、広報担当 をおく。
 - (3) 本会の会計事務局は会長が指名する会計担当の運営委員の所属する施設に置く。
 - (4) 会計監査は本会の会計を監査する。
- 7. 本会は事業運営に必要な実費を年会費として個人会員から徴収する。
- 8. 本会の事務年度は7月1日から6月30日までとする。
- 9. 前事務年度の庶務、会計については、これを総会において報告し、承認を得るものとする。
- 10. 本会則の改定には総会出席者過半数の賛成を必要とする。

以上

補則

- (1) 本会則は2001年7月1日より発効する。
- (2) 本会入会金は 1,000 円とする。
- (3) 年会費は一般会員 2,000 円、学生会員 1,000 円とする。
- (4) 研究会の通知及び会報は、当該年度までの会費を納入した会員に送付する。
- (5) 2年度にわたって会費納入のない会員は、その資格を失うものとする。
- (6) 研究会の発表者は、会員に限るものとする。新入会員の演題申し込みは会費納入の確認を持って受理す る。

(平成 23 年 11 月 16 日改正)

糸状菌分子生物学研究会運営委員会名簿(2012年度)

会 長

五味 勝也 東北大学大学院農学研究科

運営委員

阿部	敬悦(会計担当)	東北大学大学院 農学研究科
有岡	学	東京大学大学院 農学生命科学研究科
五十嵐	【圭日子	東京大学大学院 農学生命科学研究科
尾関	健二	金沢工業大学 バイオ・化学部
加藤	雅士 (編集担当)	名城大学 農学部
川口	剛司(広報担当)	大阪府立大学大学院 生命環境科学研究科
高木	忍	ノボザイムズジャパン株式会社 研究開発部
高野	義孝	京都大学大学院 農学研究科
西村	麻里江	独立行政法人 農業生物資源研究所
秦洋	<u> </u>	月桂冠株式会社 総合研究所
堀内	裕之(庶務担当)	東京大学大学院 農学生命科学研究科
山形	洋平	東京農工大学大学院 農学研究院
山田	修	独立行政法人 酒類総合研究所

会計監査

竹内 道雄 東京農工大学大学院 農学研究院

糸状菌遺伝子研究会賛助会員(50音順)

アサヒビール株式会社

天野エンザイム株式会社

イチビキ株式会社

大関株式会社

菊正宗酒造株式会社

キッコーマン株式会社

月桂冠株式会社

合同酒精株式会社

三和酒類株式会社

新日本化学工業株式会社

寶酒造株式会社

株式会社東洋発酵

公益財団法人日本醸造協会

公益財団法人野田産業科学研究所

ノボザイムズ・ジャパン株式会社

白鶴酒造株式会社

株式会社ビオック

ヒガシマル醤油株式会社

株式会社樋口松之助商店

ヒゲタ醤油株式会社

株式会社フジワラテクノアート

マルキン忠勇株式会社

Meiji Seika ファルマ株式会社

名糖産業株式会社

ヤマサ醤油株式会社

株式会社雪国まいたけ